

# 額安寺宝篋印塔修理報告書

2011年  
大和郡山市教育委員会

# 額安寺宝篋印塔修理報告書

## 例　　言

- 1 本書は、大和郡山市額田部寺町で実施した、石造宝篋印塔の修理・移築作業と、それに関わる発掘調査の報告書である。
- 2 上記のうち、発掘調査は、市内遺跡の範囲確認調査として実施した。
- 3 各作業は、以下の日程で実施した。

解体工事：平成20年9月24日

修理工事：平成20年9月25日～平成21年3月9日

実測調査：平成20年11月4日

発掘調査：平成21年3月2日～12日

基礎工事：平成21年3月10・11日

組上工事：平成21年3月18日

- 4 各作業は、以下の分担で実施した。

### 修理・組上施工

西村金造・西村大造（㈱西村石灯呂店）

補助：久市彰平・石浦頭二（㈱西村石灯呂店）

### 解体・移動施工

三家昌興（㈱アースワーク）

### 基礎施工

大石文彦（大石石材工業㈱）

### 間詰め施工

小川正行（庭師植熊）

### 免震施工

杉田規久男（㈱安震）・矢田敏起（矢田石材店）

### 発掘調査

担当：山川均（大和郡山市教育委員会）

補助員：大江綾子（奈良女子大学大学院）・佐伯昌俊（奈良大学）※所属は当時

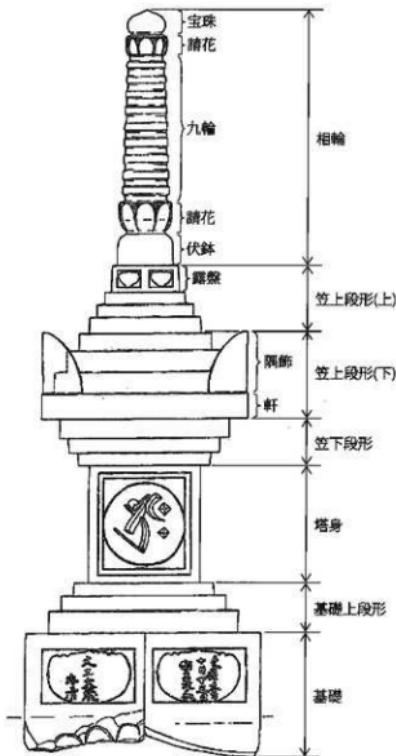
### 事務

大和郡山市教育委員会 生涯学習課

- 5 本書の執筆者は、それぞれの担当章（項）末に示した。なお、全体の編集は山川が担当し、大江がこれを補助した。
- 6 修理や調査に関する写真・スライド・実測図および出土遺物等は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。
- 7 修理費用に関しては、宝篋印塔所有者の額安寺と大和郡山市がそれぞれ分担で所定額を支出した。なお、発掘調査に関する費用は国庫補助金による範囲確認調査とした。

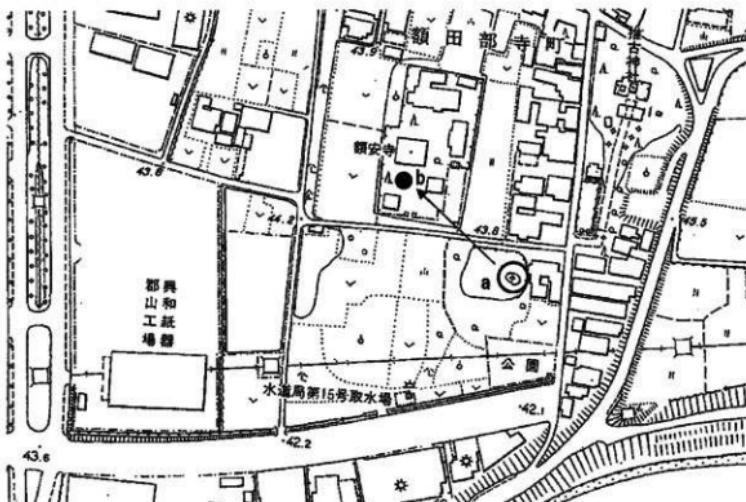
## 凡　例

- 1 発掘調査の遺構実測図に示した標高は、全て東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。
- 2 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で示した方位は座標北を示す。
- 3 遺物番号は全て通し番号になっており、実測図・図版それぞれの対照が可能である。
- 4 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦がアミがけ、土師器は白抜きとしている。
- 5 土色および遺物の色調に関しては、『新版標準土色帳』に掲げる。
- 6 本書中で、宝篋印塔の各部名称については基本的に以下の図の呼称に従うが、執筆者により若干の異同がある。





額安寺の位置 (S : 1/25,000)



額安寺宝篋印塔の位置 (S : 1/2,500)

※今回、a 地点から b 地点へ移動した



**主に解体時に使用した道具**

- ①クジリ
- ②バール小
- ③バール中
- ④ハツリノミ
- ⑤タガネ大
- ⑥タガネ中
- ⑦タガネ小

**主に修理時に使用した道具**

- ⑧ハビシャン小
- ⑨カタアワセ
- ⑩ハビシャン
- ⑪ビシャン
- ⑫ハイカラ
- ⑬セットウ（石頭）
- ⑭ノミ
- ⑮ノミ小
- ⑯ノミ小
- ⑰サシガネ小
- ⑱サシガネ
- ⑲墨ツボ
- ⑳墨差し

(西村 大造)

## 本文目次

I.	修理の契機 .....	1
II.	額安寺宝篋印塔について .....	2
1.	額安寺とその周辺 .....	2
2.	額安寺宝篋印塔の概要 .....	6
3.	額安寺宝篋印塔実測所見 .....	7
4.	額安寺宝篋印塔の石材 .....	14
III.	額安寺宝篋印塔の修理と組上施工 .....	18
1.	解体 .....	18
2.	修理過程 .....	20
3.	修補状況 .....	22
4.	組上げ .....	26
IV.	明星池中島の発掘調査 .....	32
1.	調査の契機および経過 .....	32
2.	調査の概要 .....	32
V.	考察 .....	38
1.	大藏派の遺品とその活動 .....	38
2.	大和の宝篋印塔に関する基礎的整理 — 鎌倉～南北朝期の様相 — .....	45
3.	矢穴調査報告 .....	55
4.	文献史料および古絵図にみる額安寺宝篋印塔 .....	71
VI.	まとめ —額安寺宝篋印塔の重要性について— .....	79
1.	額安寺宝篋印塔の原位置について .....	79
2.	額安寺宝篋印塔の重要性について .....	79

## 図目次

[II-1]		
図1.	額安寺出土の主な古代瓦 (S : 1/4) .....	3
図2.	『額田寺伽藍並条里図』釈文 (部分) .....	4
図3.	額安寺境内の整地痕跡 .....	4
図4.	額田部窯跡 .....	4
図5.	額安寺五輪塔群 .....	4
[II-3]		
図1.	相輪部材実測図 (1/10) .....	9
図2.	笠部材実測図及び露盤部拓影 (1/10) .....	9
図3.	塔身部材実測図及び拓影 (1/10) .....	9
図4.	基礎部材実測図及び拓影 (1/10) .....	10
図5.	基礎上面の様相 .....	11
図6.	基礎右側面の接触部 .....	11
図7.	額安寺宝篋印塔実測図 (1/15) .....	12
図8.	階段部分の設計 .....	12

[II-4]	
図1. 類安寺宝篋印塔石材の写真 .....	14
図2. 奈良盆地周辺の地質概略 .....	15
図3. 花崗岩類に含まれる有色鉱物の量と帶磁率の関係 .....	16
図4. 奈良盆地南西部の地質図 .....	16
[III-1]	
図1. 仮設橋の設置 .....	18
図2. 接合部の剥離 .....	18
図3. クレーンによる運搬 .....	18
図4. 塔身上面の状況 .....	19
図5. 基礎上面の状況 .....	19
図6. 宝篋印塔撤去後の状況（西より） .....	19
[III-2]	
図1. 損壊状況（正面より） .....	20
図2. 損壊状況（下より） .....	20
図3. 破断面の研磨 .....	20
図4. 補修石材の接着 .....	21
図5. 補修石材の加工状況 .....	21
図6. 仕上がりの状況 .....	21
[III-3]	
図1. 笠上段形（上）の修補部位（上より） .....	22
図2. 同上、修補前状況 .....	22
図3. 同上、修補後状況 .....	22
図4. 笠上段形の修補部位（下より） .....	23
図5. 同上、a部分修補前状況 .....	23
図6. 同上、a部分修補後状況 .....	23
図7. 同上、b部分修補前状況 .....	23
図8. 同上、b部分修補後状況 .....	23
図9. 塔身西面の修補部位 .....	24
図10. 同左、修補前状況 .....	24
図11. 同左、修補後状況 .....	24
図12. 塔身南面の修補部位 .....	24
図13. 同左、修補前状況 .....	24
図14. 同左、修補後状況 .....	24
図15. 塔身東面の修補部位 .....	24
図16. 同左、修補前状況 .....	24
図17. 同左、修補後状況 .....	24
図18. 塔身北面の修補部位 .....	24
図19. 同左、修補前状況 .....	24
図20. 同左、修補後状況 .....	24
図21. 基礎上段形の修補部位 .....	25
図22. 同上、修補前状況 .....	25
図23. 同上、修補後状況 .....	25
[III-4]	
図1. 基礎施工図（S : 1/20） .....	26
図2. 基礎工事 .....	26
図3. 基礎の設置 .....	26
図4. 積上げ（塔身） .....	27
図5. 同上（笠上段形） .....	27
図6. 同上（相輪） .....	27
図7. 間詰め .....	28

図8. 免震施工	28
図9. 免震用ゲルマット	28
図10. 免震施工部分模式図	29
図11. 経筒の奉納	30
図12. 塗工供養	30
図13. 同上	30
図14. 塗工（北面）	31
図15. 塗工（東面）	31
図16. 塗工（南面）	31
図17. 塗工（西北より）	31
〔V-2〕	
図1. 発掘調査区平面図（S：1/50）	33
図2. トレンチ南北畦畔土層図（西より・S：1/50）	33
図3. トレンチ南北畦畔土層図（西より）	33
図4. 駿安寺14次 ②層出土遺物実測図（S：1/3）	34
図5. 出土遺物写真①	35
図6. 出土遺物写真②	36
図7. 法隆寺における同范瓦（S：1/4）	37
〔V-1〕	
図1. 大藏派宝篋印塔・大藏派系宝篋印塔実測図（S：1/30）	40
図2. 長谷寺宝篋印塔陽刻板碑	41
〔V-2〕	
図1. 宝篋印塔の分布	47
図2. 陶飾法量分布	48
図3. 陶飾の分類	48
図4. 王寺町達磨寺塔（S：1/20）	48
図5. 1類宝篋印塔の分布	50
図6. 高取町壱阪寺塔	50
図7. 奈良国立博物館塔（S：1/20）	51
図8. 2類宝篋印塔の分布	51
図9. 吉野町薬師寺塔	52
図10. 3類宝篋印塔の分布	52
図11. 生駒市奥山往生院塔（S：1/30銘文略）	53
図12. 宇陀市室生寺塔	53
図13. 奈良市正暦寺塔2	53
〔V-3〕	
図1. 矢穴各部の名称と法量測定基準	56
図2-1. 東小阿弥陀笠石仏	57
図2-2. 同・背面先 A タイプ矢穴列痕	57
図3-1. 芦屋墓園石仏	58
図3-2. 同・正面先 A タイプ矢穴列痕	58
図3-3. 徳川大坂城山里丸石仏未製品転用石	58
図3-4. 同側面先 A タイプ矢穴列痕	58
図4. 矢穴の基本型式分類模式図	59
図5-1. 錦ガ丘五輪塔	60
図5-2. 同・地輪側面先 A タイプ矢穴列	60
図5-3. 奥山久米寺十三重塔	60
図5-4. 同・基礎側面先 A タイプ矢穴列	60
図5-5. 石清水八幡宮五輪塔	60
図5-6. 同・火輪下部先 A タイプ矢穴列痕	60
図6. 調査風景	61

図7-1. 頬安寺宝篋印塔にみられる矢穴列痕 石材A	62
図7-2. 同・石材B	62
図7-3. 同・石材A矢穴列痕	62
図7-4. 同・石材B矢穴列痕	62
図7-5. 同・矢穴列痕A細部	62
図7-6. 同・矢穴列痕B細部	62
図8. 頬安寺宝篋印塔の矢穴列痕略実測図・拓影 縮尺1:5、1:4	63
図9-1. 観音院宝篋印塔	65
図9-2. 同・基礎下部先Aタイプ矢穴列痕	65
図9-3. 清盛塚十三重塔	65
図9-4. 同・笠側面先Aタイプ矢穴列	65
図9-5. 二尊院十三重塔	65
図9-6. 同・基礎台座上面先Aタイプ矢穴列痕	65
図9-7. 満願寺九重塔	65
図9-8. 同・基礎台座側面先Aタイプ矢穴列痕	65
図10-1. 願成寺水盤	66
図10-2. 同・短側面下部先Aタイプ矢穴列痕	66
図10-3. 報恩寺五輪塔	66
図10-4. 同・基礎下部右側面先Aタイプ矢穴列痕	66
図10-5. 和田寺	66
図10-6. 右側面先Aタイプ矢穴列痕	66
図10-7. 藍那通称七本五輪卒塔婆	66
図10-8. 同・地輪側面先Aタイプ矢穴列痕	66
図10-9. 西小供養塔婆	66
図10-10. 同・基礎正面上端先Aタイプ矢穴列痕	66
図10-11. 早尾神社社碑	66
図10-12. 同・右側面先Aタイプ矢穴列痕	66
図11-1. 小林墓地定印跡	67
図11-2. 同・背面上端先Aタイプ矢穴列痕	67
図11-3. 北向地戴定印阿弥陀	67
図11-4. 同・左側面先Aタイプ矢穴列痕	67
図12. 中国南宋朱貴祠武士石像矢穴列痕拓影 縮尺1:8	68
[V-4]	
図1. 古絵図に描かれた明星池とその周辺	72
図2. 古絵図A	75
図3. 古絵図B	76
図4. 古絵図C	77
図5. 古絵図D	78

## 表 目 次

(II-4)	
表1. 花崗岩類の鉱物容積比	14
[V-2]	
表1. 大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔（1）	46
表2. 大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔（2）	47
表3. 宝篋印塔の分類	49
[VI-2]	
表1. 全国在路大藏派石造物一覧	80

## I. 修理の契機

平成9年5月27日、額安寺は宝篋印塔が所在する明星池の環境整備と、塔が立つ中島の崩壊に伴う宝篋印塔の倒壊防止を大和郡山市教育委員会（以下「市教委」）に要請した。市教委はこの要請に対し、文化財指定は塔にかかるものであり、史跡等に指定されていない池の整備を市が主体的に行なうことはできないものの、宝篋印塔の修理については協力可能であると回答した。また、その際に市教委では、宝篋印塔をより安全な境内へ移動してはどうかという提案も行っている。

平成16年3月16日、大和郡山市文化財審議委員の清水俊明氏より、市教委に対して書信で額安寺宝篋印塔が傾いているとの連絡があった。それを受けた市教委では翌17日に現地に赴き、中島に渡って現状調査を行った。その結果、石塔は東に傾いていることが確認され、またその主な要因は島の浸食にあると判断された<sup>1</sup>。また、塔の各部材がしっかりと組み合っておらず、さらに接着のために部材間に入れられているコンクリートが不均等であるため、塔の中心軸がゆがんでいたことも、傾きをより増長している可能性も指摘された。

市教委では、宝篋印塔の修理をより有利な条件で実施するには、本塔を国指定の重要文化財（以下「重文」）に指定することが必要と考え、平成16年6月16日に奈良県教育委員会（以下「県教委」）と協議を行い、額安寺宝篋印塔の重要性と倒壊の危険性についての説明を行った。しかしながら、この時の県教委の回答は、諸般の事情によって額安寺宝篋印塔を重文に指定するのは困難であること、さらに、市教委が考えるように、石塔を明星池中島から移動した場合、重文指定はさらに困難になるとのことであった<sup>2</sup>。

そうした中、額安寺宝篋印塔の傾きは猶予できない状況となったので、平成18・19年度、市教委では石塔の修理・移築に向けて関連業者から見積り及び修理方法についての資料提供を受け、額安寺とも協議した結果、修理は伝統的石彫技術保持者によって、伝統的な手法で行うこと、修理後は境内に移築することで基本的に合意した。

（文責：山川 均）

<sup>1</sup> その後の発掘調査で、塔が傾いた最大の原因是、脆弱な地盤に起因する不等沈下であると判断されるに至った（本書第IV章参照）。

<sup>2</sup> この意見については、あるいは額安寺宝篋印塔が鎌倉時代からこの明星池中島に存在したという仮定から述べられたものかもしれないが、本書第IV章に記したように、発掘調査の結果、中島が築造されたのは近世に下ることが判明している。

## II. 頬安寺宝篋印塔について

### 1. 頬安寺とその周辺

#### (1)古代

大和郡山市額田部寺町に所在する額安寺<sup>1</sup>は、額田部丘陵の南端部分と、大和川の氾濫原が接する段丘面上に立地する。考古学的に見るその起源は飛鳥時代に遡り、法隆寺207A型式（毛利光ほか1992）と同じ型を使用した可能性のある軒平瓦片の出土が知られている（前園1979）。ただしこれは小片であり、また中世の遺構から出土したものなので、これが初期の額安寺に伴うものか否かについては、検討の余地がある<sup>2</sup>。確實に額安寺において使用されたと考えられる軒瓦は、単弁六葉華文軒丸瓦（図1-1）である。時期的には7世紀第2四半期に位置付けられるもので、額安寺はこの頃、少なくとも小規模な伽藍は有していたものと思われる<sup>3</sup>。

これに続く7世紀第3四半期においては、山田式軒丸瓦が使用された建物が存在した可能性が高い。また、同第4四半期においては、法隆寺式軒丸瓦（図1-2）、同軒平瓦（図1-3）の使用が認められ、この時期の額安寺が斑鳩文化圏に組込まれていたことを明瞭に示す。

奈良時代においては、七堂伽藍を備えた寺域が描かれた「額田寺伽藍並条里図」が存在し<sup>4</sup>（図2）、また軒瓦も平城京同范瓦を含む、軒丸瓦4種、軒平瓦3種が認められることから（図1-4～6）、この時期に額安寺は本格的な寺院としての威容を整えたものであろう。

一方、「大安寺伽藍縁起并流配資材帳<sup>5</sup>」によれば、聖徳太子開基の「熊凝村道場（熊凝寺）」は大安寺の前身となる道場であるが、後世の考証では、「熊凝」は現在の額安寺に当たるとされている。先述の瓦に見られる斑鳩との関連を想起させる伝承といえよう。また、鎌倉時代後期に書かれた『信空筆大塔供養願文草稿<sup>6</sup>』には、道慈（?-744）が虚空藏菩薩像を本尊とし、寺号を「額安寺」に改めたとする。寺に現存する虚空藏菩薩がこれを指す可能性は強く<sup>8</sup>、鎌倉時代の通説とはいえ、額田氏出身で大安寺の移転に尽力した道慈が、自らの氏寺として額安寺を整備したと考えるのが正しいと思われる（田村ほか1966）。

#### (2)中世

平安時代を通じて額安寺の寺勢は衰えるが、鎌倉時代に入り、地元郡山が生んだ高僧・叡尊（1201-90）や、その弟子の忍性（1217-1303）、信空らによって復興が進む。弘安5年（1282）には、叡尊によって虚空藏菩薩の修理が行われており、永仁6年（1298）、忍性によって額安寺は閻東祈禱寺になった。嘉元3年（1305）、信空によって結界修法および忍性宿願の五重塔供養が行われており、額安寺の鎌倉復興は一応、完成したものと見なされる。

次いで鎌倉復興に関する考古学的な所見であるが、額安寺境内で実施された額安寺第8次調査において、本堂北側で大規模な整地痕跡が検出されている（大和郡山市2003）（図3）。このうち古い段階の整地層から出土した瓦器碗は橋本編年III-1期に属するもので、実年代としては、平家による治承4年（1180）の南都焼討ち前後の年代観が与えられている（橋本2009）。よって、額安寺の実質的な復興は、叡尊による復興より半世紀程度早く開始されていたことになる。この時期の額安寺復興と、重源らによる南都復興の相関関係については、今後の重要な研究課題であろう。なお、13世紀中葉～後葉には、さらに盛土が行われており、時期的に見て、これは叡尊による境内復興事業の痕跡かもしれない。

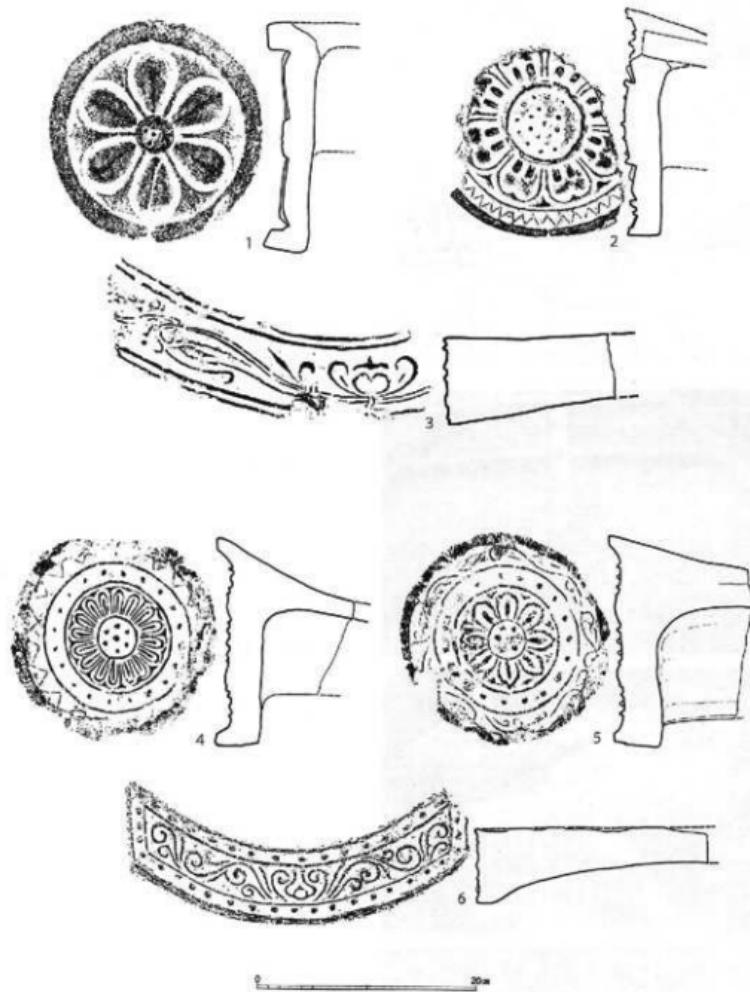


図1 須安寺出土の主な古代瓦 (S:1/4) 出典:上原2001

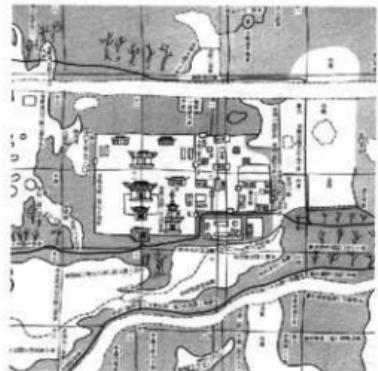


図2 「額田寺伽藍並条里図」軽文(部分)

出典：国立歴史民俗博物館 2001



図3 頬安寺境内の整地痕跡



図4 頬田部窯跡

出典：岸 1935



図5 頬安寺五輪塔群

このほか、額安寺鎌倉復興時の遺構としては、寺域北方の額田部窯跡がある。昭和3年に発掘調査が行われ、瓦窯跡3基が検出された（岸1935）（図4）。詳細な時期は不明であるが、鎌倉復興に伴う時期の遺構と考えられる。

また、瓦窯に隣接して額安寺五輪塔群が存在する。大型の忍性五輪塔を始めとして8基の五輪塔が並んでおり（図5）、昭和57年～58年にかけて発掘調査が実施された（奈良県教育委員会1983）。忍性五輪塔の地下からは石櫃に入れられた忍性舍利容器が出土し、極楽寺・竹林寺と共に、忍性の遺骨が遺言によって三カ所に分骨されていることが事実として確認された。このほか、忍性五輪塔に隣接する五輪塔の地輪からは極楽寺三世長老善願（1265～1326）の舍利容器が発見されているが、善願五輪塔は極楽寺にも存在するので、これは師・忍性ゆかりの地への分骨であつたものと思われる。さらに五輪塔群中には永仁5年（1297）銘のものが2基あり、そのうち1基は平朝臣盛房<sup>9</sup>の墓で、地輪に刻銘がある。

永正3年（1506）、額安寺は細川政元方の武将であった赤沢朝經（沢藏軒宗益）によって焼き払われた<sup>10</sup>（吉田2001）。この時の被害状況は明確ではないが、境内の発掘調査でこの時期のものと思われる焼土層が検出されている（大和郡山市教育委員会2003）。次いで永禄11年（1568）、額安寺は筒井順慶と松永久秀の争乱に巻き込まれ、講堂と五重塔以外は焼失した<sup>11</sup>。

なお、この時の被害が賄われるのには、慶長2年（1597）に豊臣秀吉による寺領安堵まで待たねばならなかった<sup>12</sup>。現在の額安寺本堂は、鳥衾や鬼瓦の銘から、慶長11年（1606）の建造であることが判明している。

（文責：山川 均）

<sup>1</sup> 額安寺は、古代においては「額田寺」と表記されていたが、本書では中世の石塔を扱う関係上、混乱を避けるため、本文中は「額安寺」の名称で統一する。

<sup>2</sup> 額安寺出土および表面採集の瓦に関する報告・論考としては、大和郡山市教育委員会1995および上原2001参照。

<sup>3</sup> 額安寺境内周辺地区において、古代に遡る遺構はほとんど検出されていない。よって、伽藍配置その他の地下遺構から判断することはできない。

<sup>4</sup> 本図の具体的な制作時期は、天平宝字年間（757～65）頃と考えられている（国立歴史民俗博物館2001）。

<sup>5</sup> 『寧安遺文』中巻収載。

<sup>6</sup> 西大寺復興第二世長老慈道房信空（1231～1316）。慈真とも。父は額安寺に住んだ善春房学春（俗姓は春道氏。本書第V章4項参照）。

<sup>7</sup> 「大和郡山市史」史料編収載。

<sup>8</sup> この虚空蔵菩薩像の制作年代については、奈良時代末という意見もあるが（前園ほか2001）。その年代観について特に明確な根拠は示されていない。ここではそれを道慈の持仏として認めた米山徳馬説（米山1966）に、より説得力を認める。

<sup>9</sup> 鎌倉幕府連署・北条時房の曾孫にあたり、弘安11年（1288）から永仁5年（1297）の死去直前まで、六波羅探題南方の地位にあった（水野2001）。

<sup>10</sup> 「額安寺地蔵菩薩蛤像由緒書」（『大和郡山市史』史料編収載）。

<sup>11</sup> 「額安寺」明治12年「寺院明細帳」。奈良県立図書情報館所蔵。

<sup>12</sup> 「額安寺縁起」（『大和郡山市史』史料編収載）。なお、額安寺宝蓋印塔が立っていた明星池の築造も、おそらくこの頃のことである（本書第IV章参照）。

## 2. 頬安寺宝篋印塔の概要

### (1)発見の経緯

額安寺宝篋印塔は、本書第V章4項で詳述するように、数枚の近世の絵図に描かれていることから、近世には明星池の中島上に立っていたようであるが、いつしか倒壊し、塔身以上は池の中に転落していた（清水1974）。1973年（昭和48）に、当時の額安寺住職であった喜多亮快氏が、同寺復興事業の一貫としてそれらの転落部材を引き上げ、基礎の上に組上げた。

翌1974年（昭和49年）、石造美術研究家の清水俊明氏（現：大和郡山市文化財審議委員）が基礎より銘文を発見し、銘文中に「文応元年（1260）」という鎌倉中期に遡る年号、及び「大藏安清」という石工名が刻まれていたことから、本塔は一躍学界の注目を集めることになった（川勝1974）<sup>1</sup>。在銘の宝篋印塔としては、奈良県生駒市所在の興山往生院宝篋印塔に次いで全国二番目の古さであり、石工の名前が具体的に判明する宝篋印塔としては、全国最古の事例となる<sup>2</sup>。昭和53年4月、大和郡山市指定文化財（建造物）。

### (2)様式的特徴

本塔は高さ274.3cmを測るもので<sup>3</sup>、部材によっては転落時のものと思われる破損が見られたものの<sup>4</sup>、部材は相輪まで完存しており、この時期のものとしては、保存状況が非常に良好である。

基礎は格狭間二区、塔身には二重の輪郭を刻み、月輪内に金剛界四仏種子を薬研彫りにする。基礎上、基礎下の段形は共に三段。隅飾と軒は独立するが、一弧直立馬耳状の古式である。笠上段形は六段、露盤には二区格狭間が刻まれている。これとほぼ同時期の正元元年（1159）に造立された興山往生院宝篋印塔（生駒市）と比較すると、額安寺宝篋印塔は塔身の二重輪郭や基礎二区格狭間、露盤など、装飾性に富むのが特徴といえる。

### (3)石工

額安寺宝篋印塔を制作した石工は、銘文に示されるように「大藏安清」という人物である。本塔の発見以前、大藏姓の石工としては、永仁4年（1296）に箱根山宝篋印塔（神奈川県箱根町）を制作した「大藏安氏」が知られていた。箱根山宝篋印塔銘文では、この安氏の出身を「大和国」としていることから、この後に相模を中心に活躍する大藏派石工の出自については、大和にあるとする見方が当時の学界では有力であったが、額安寺宝篋印塔の銘文は、まさにそれを裏付ける内容であった。また、その様式は箱根山宝篋印塔や、それに続く大藏派石工の制作にかかる宝篋印塔に濃厚に受け継がれている<sup>5</sup>。

（文責：山川 均）

<sup>1</sup> 銘文についての詳細は、本書3項及び第V章4項参照。

<sup>2</sup> 本塔の相対的価値評価については、本書第V章参照。

<sup>3</sup> 詳細な計測値については、本書4項参照。

<sup>4</sup> 破損部位については、第III章3項参照。

<sup>5</sup> 大藏派石工とその作品については、本書第V章1項参照。

### 3. 頤安寺宝篋印塔実測所見

#### (1)はじめに

大型石塔の解体修理は、外観からでは確認できない石塔の内部構造や石材構成などを観察する絶好の機会である。幸いにも筆者は、当該宝篋印塔の修理作業中に実測および拓本採取作業を行う機会を与えられ、重ねて、報告書を出すので実測時の所見をまとめよという話をいただいた。せっかくの機会でもあるので、やや詳しく部材ごとに整理し、最後に全体像をまとめるという形で報告の責を果たしたい。

なお、実測等の作業は、2008年11月4日に鈴間智子氏（筑波大学大学院）の協力を得て実施し、後日若干の補足作業を行って完了した。今回は部材が解体されていた関係上、最も測り易い場所を中心を選択して実施した。数値はその折のものであり、他面では微細ながら異なる場合もあることをお断りしておく。ただし、そのことで本報告の意味が失われることはない。

#### (2)各部の様相

##### 相輪（図1）

総高は99.0cm（ホゾを除く）で、下部のホゾまで1石で形成される。伏鉢は基部で直径21.5cm、高さ12.0cm、受花との境目の径は15.2cm。受花は最大径20.8cm、高さ12.0cmで、磨耗が進行していて観察がし難いが単弁八葉の蓮華文で、上位に間弁の先端だけが顔をのぞかせる。九輪部は高さ57.5cmで9輪あり、最下部の直径17.8cm、最上部の直径15.2cmを測る。ここもかなり摩耗が進んでおり、実測値は多少の出入があるが透減率から推定して、まず円錐台形に成形しそこに一定の幅で刻み（深さ1cm程度）を作つて九輪としていることがわかる（図8-A）。九輪各部の高さはほぼ3cm前後である。上位の受花は最大径15.6cm、高さ7.8cmで、下位の受花に似た八葉の単弁蓮華文で、間弁はその先端が見える程度である。摩耗が進んでいてかなり観察し難い。最上部の宝珠は、最大径14.8cm、高さ9.7cmを測りやや背が低く、先端部は小さく尖っている程度で極端な突起状には作られていない。

ホゾは伏鉢の下部に造り出されている。基部の直径12.3cm、高さ9.0cmで、端部はやや細くなつて直径11.8cmとなる。先端部の0.5cmほどは粗く面取りするように打ち欠いていた。

##### 笠部（図2）

上中下の3石で構成されている。上方の部材は、階段部分3段分と最上部にある方形の露盤までが一石で形成されている。露盤は上辺が25.8cm、下辺が26.3cm、高さは10.4cmを測り、各面に方形枠を2箇所設け、その中にそれぞれ1つの格狭間を彫り込んでいる。格狭間はかなり風化が進行しており、明瞭に観察される部分はほとんどない。露盤上面の中央に、口径13.0cm、深さ9.7cm、底径13.5cmのホゾ穴が穿たれる。内面はノミ痕が若干観察され、穴の側面はわずかに中位で膨らみ気味である。階段部は最下段（上から3段目の下辺）が長さ43.4cm、最上段の上面が31.2cmで、各段の上面は外側でわずかに下方へ傾斜している。この傾斜を含めた各段の高さは、下から6.1cm、5.2cm、4.6cmと徐々に低くなる。この部位の最下段裏面はホゾなどの作り出しあないが、中央がわずかに瘤むように作られている。これは各接触面で共通する事項であり、下位の石材とは四辺のわずかな部分だけが接触する形となる。

中央の部材は、隅飾が乗る台部分とその上の階段部3段分である。最上面の幅51.3cm、最下の台部分の幅は80.0cmを測り、台上面および最上面（下から3段目の上面）を除く階段の各上面は

外側でわずかに下方へ傾斜している。台の厚さはその傾斜部分を含めて9.9cm、各部の高さは1段目が8.4cm、2段目が8.5cm、3段目が6.6cmとなる（傾斜部含む）。1・2段目に高さの差はあまりないが、2段目から露盤下の最上段までは均一ではなく、徐々に高さを減じていることがわかる。ただし、比率に統一性は認められない。

この部材の上下両面にはホゾ等の構造物はなく、中央をわずかに窪ませる構造となっている。

隅飾は、台部分からの高さ23.5cm、基部の幅14.8cmで、素文の一弧式で茨はない。側縁は直線的に立ち上がるが、わずかに上位で外側へ張り出している（基部を0として頂部で0.5cm程度外方へ開き気味に作られる）。また、台部分とは軽い段で区切られている。1段目の階段隅部は隅飾背面に呑み込まれているが、2段目の隅部は辛うじて彫出されている。

下方の部材は3段の階段部分で構成され、最上部の幅65.4cm、最下部の幅51.0cm、各段の下面は最下面以外はわずかに傾斜しており、その部分を含めた高さは、上から7.5cm、5.7cm、4.8cmとわずかずつ減じており、上位の段の構成とよく似た作り方をしている。この部材の上下両面にもホゾ等の構造物はなく、中央をわずかに窪ませる構造となっている。

#### 塔身（図3）

1石で構成され、幅43.1cm、高さ45.8cmの直方体である。各面とも二重の方形枠を作り、その内側に月輪で囲まれた梵字を配置する。まず外側の方形枠は、幅36.3cm、高さ40.0cm、内側の方形枠は、幅32.6cm、高さ35.8cmで、月輪は直径32.6cm前後で、左右は内側の方形枠にほぼ接しているが、上下はそれぞれ1.5cmほど隙間がある。外側枠と内側枠および内側枠と月輪までの段差はそれぞれ0.6cm程度、内側枠と月輪内との段差は1.0cm前後である（実測したタラーク面の数値で、他面にはやや浅めの面もある）。梵字は金剛界四仏で薬研彫りされ、深い部分で月輪面から2cmほど彫り込まれている。ちなみに額安寺境内に復興された配置は、実測したタラークが南面に、以下右回りに東面がウーン、北面がアク、西面がキリークとなっている。

上面はノミ切りのままの粗い加工で止まるが、中央に口径15.0cm、深さ24.9cmの奉籠孔が穿かれている。奉籠孔は、口縁部から1.0～1.5cmのところで直径14.0cm程度に縮まるが、そこから約20cmほど直線的に下降したのち徐々に径を小さくし、底部での直径は12.0cmを測る。孔の内面は工具の痕跡が明瞭に残っている。出ホゾのような笠部との接合を行う施設は作られていない。

底面は他の接合面と同様に中央部分を浅く彫りくぼめており、基礎と接する部分は周辺部の幅2cm程度しかない。その窪み部分は粗い加工面で終わり、ホゾ等の施設は作られていない。

#### 基礎（図4）

階段部1石と基礎部4石で構成される珍しいものである。階段部は3段で、最上段の幅54.0cm、最下段の幅73.0cmを測る。下段の上面にわずかな傾斜面が観察されるが、上段にはない。傾斜面を含めた各段の高さは、下から8.7cm、5.7cm、4.8cmで、上に進むにしたがい徐々に数値を減じている。この部材の上下両面とも接合に関わる構造物はなく、他の面と同様に上下をわずかに窪ませた構造となっている。なお、この部材の上面で計測した中央の窪みは約0.6～0.8cm程度で、内側はわずかながら粗めの調整となっていることが、提示した拓本の様子でも観察できる。これは各接触面共通の情報である。

次に基礎部分の説明に入るが、ここでは銘文を記載する面を正面と捉えておく（額安寺境内に復興された折には北面に配置されている）。まず立面の様子から観察する。基礎の幅は91.0cmで、左右に長方形区画を並置し、その中に格狭間を彫り込む。区画は幅36.0cm、高さ27.3cm、深さ1.1cm、格狭間は幅32.4cmで方形枠内をほぼいっぱいに使って彫り込まれ、深さは枠底面から0.3～

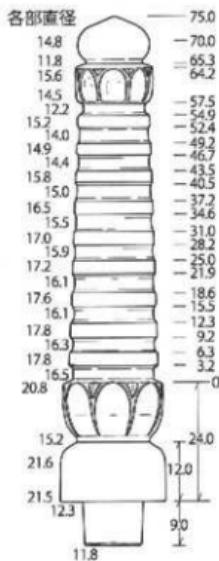


図1 相輪部材実測図(1/10)

九輪以上の数値は下位受花上面からの高さを表示

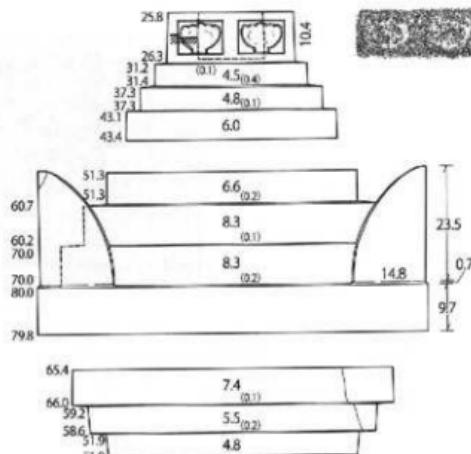


図2 笠部材実測図及び露盤部拓影(1/10)

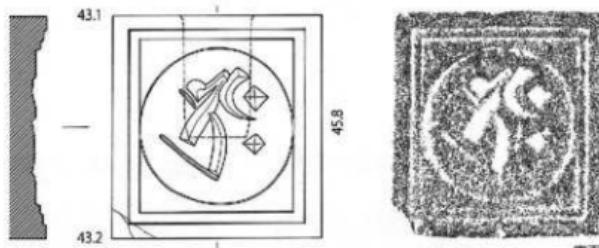


図3 塔身部材実測図及び拓影(1/10)

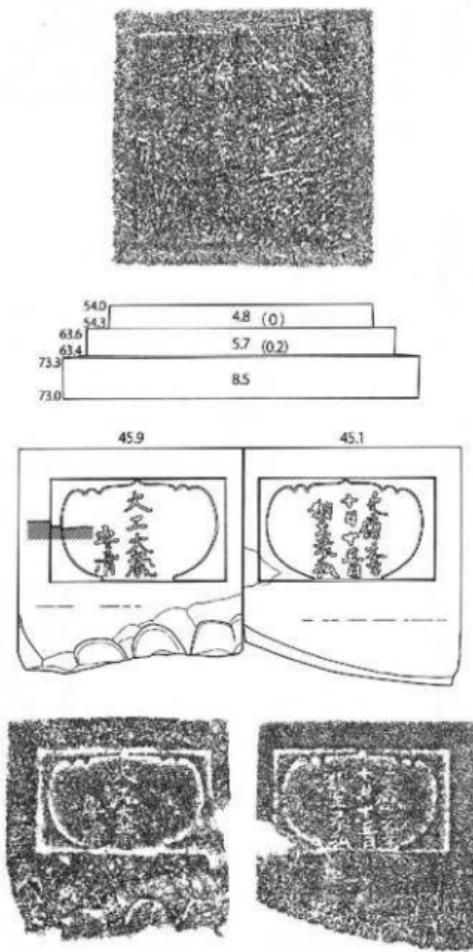


図4 基礎部材実測図及び拓影 (1/10)



図5 基礎上面の様相

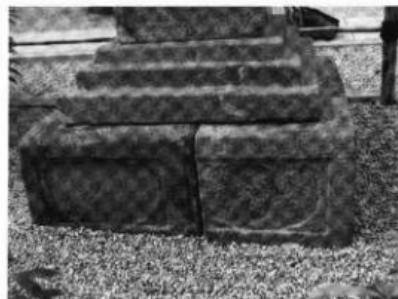


図6 基礎右側面の接触部

0.4cmで、中央付近がわずかに膨らむ。銘文は、左右の格狭間の中をほぼいっぱいに使うような大きめの文字で記載され、右側には「文應元年／十月十五日／頤主永弘」、左側に「大工大藏／安清」（／は改行を示す）とある。文字面は風化が進んでおり、輪郭はかなり傷んでいる。また、格狭間面からの文字の深さは2～5mm程度と一定ではない。底の形状は明瞭な薬研形ではなく、やや丸味を帯びたものである。

解体して理解できた特筆すべきことに、基礎下面の状況があげられる。右側の石材は底部分が自然面のままでまったくの未加工であり、基礎の上面から35cm付近以上は丁寧に表面が加工されているが、それ以下は粗い調整のままとしている。さらに左側の石材では、同様に基礎上面から32.5cm付近まで丁寧に調整されるが、それ以下は粗調整のままであるうえ、正面下端には矢穴が3箇所そのまま残されていた。矢穴は幅9～10cmで深さは6～7cm程度を測り、クサビの殴打による衝撃で矢穴から上へ数cmほどは剥落した痕跡をそのまま留めている。その剥落痕は、一部分だけが丁寧に調整された面にまで及んでいた。矢穴は第V章3項で述べられるので、詳細はそちらによられたい。なお、底部は自然面のままであり、一部左側面にも自然面が残されていた。

次に4石構成の状況を記すと、正面材の向かって左側が幅45.9cm、右側が幅45.1cmと均一ではない。底部までの高さも一定ではなく、右側の石材で36.5～47.0cm、左側のものでは41.5～45.0cmである。上記したように底面は自然面のままであり、当初から反花座などの基壇を設けることは想定されていない。さらに、平面の様子も特徴的で、図5に示しているとおり中空になっている。その中空部分は加工を行って開いているのではなく、剖面のままの状態であり、4石が接する部分だけ面調整を行っている。しかし、接触面はお互いきっちりと寸法を合わせている訳ではなく、各部とも2cm程度はズレが生じており、見えない部分にはそれほど気を遣って調整していないことがわかる。また右側面では、左右の石の大きさが大きく異なっており、接触面は基礎の中央ではなく向かって右側の格狭間に少しかかったところにある（図6）。他の面は左右の数値こそ一致しないが、ほぼ中央に接触面がある。

なお、中央にできる空洞は納骨等に利用することを目的として開放されているものではなく、あくまでも切り出した石材の問題に起因するものとみておきたい。

### (3)全体観を通して観たまとめ

部品図のみでは設計者の本来の意図を読み取るのは難しいので、やはり組み上げた図（図7）に

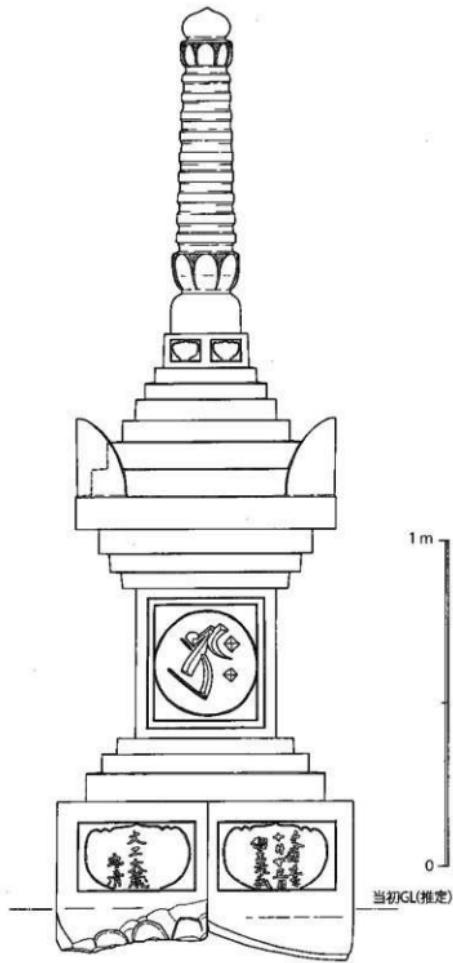


図7 頤安寺宝篋印塔実測図 (1/15)

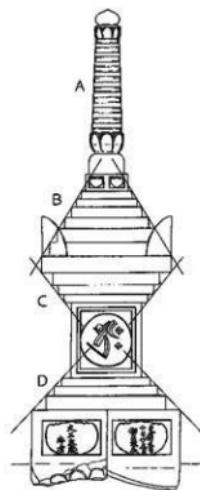


図8 階段部分の設計

基づいて塔としての全体観から得られる情報を整理しておこう。

まず各部の高さだが、相輪は99.0cm、笠部は最上部の露盤を含めて77.8cm（露盤を除くと67.4cm）、塔身は45.8cm、基礎は最大値で66.2cmである。これらを総合した塔の総高は、基礎の最も大きな石材を基準にすると総高288.8cmとなるが、当初の計画で土中すると考えていた部分を除き、丁寧な調整を行っている部分の小さい方の数値（低くなるほうの数値）を拾うと、総高は274.3cmとなる。この数値が設計段階で地上に見える「塔」としての高さと理解できるので、ほぼ9尺という数字を意識して建設されたものと言えるだろう。

全体観としては、基礎幅が塔の中での最大幅を有しており、笠の最大幅はそれより若干減じていて88%程度、塔身幅は47%程度である。高さの比率をみると、総高（274.3cm）に対する相輪は36.1%と大きいが、露盤を相輪の一部と考えれば39.9%となり約40%の高さを相輪が占めることがわかる。笠は露盤を除いて計測すると24.6%でほぼ4分の1、塔身は16.7%、基礎は上記した地上に見える部分で捉えると18.8%という数値となる。この視点では明確な規則性は見えてこない。

次に、各部の階段は高さの増減を行うことで強弱をつけており、全体の均整を維持するよう考えられているようだ。つまり基礎及び笠上面の階段では上位にのぼるほど高さを減じており、笠下面の階段では下位のものほど高さを減じている。ただし一定の比率で減じる訳ではなく、そこに規則性は看取されない。これは幅においても同様で、80%台の比率で減じているものの実際は80～89%という10%近い幅を有しており、単純に同じ数値となる部分はない。ところが、図8-B・C・Dに示すように各部の階段の隅角の点を結んでみると、各部位でほぼ直線を示すことがわかる（笠上位の露盤を除く）。子細には若干の出入りが見えるが、工作時の誤差の範囲と理解できるものであろう。幅同士、あるいは高さ同士を比較しただけでは見えないが、本塔の階段部は規則性を有して彫出されているのである。これは階段部をまず方錐台形に作り、それに刻みを加えて製作していくことを物語っている。

このように本塔の基礎や笠は、部材としては複数に分割して製作されているが、当然のことながら設計段階では組み上がった状況を前提にして作られたものであると言える。しかし、各辺とも傾斜角度が異なっており、傾斜直線の交点にも他の部材との有機的な関係は、現段階では見出せない。すでに語られているように、基礎を2区画にすることや塔身に方形枠を設けることなど、後に東国方面へ影響を与える要素は見えているが、未だ一品製作的に作られたものではないかと思われる。他の類似した宝篋印塔との比較によって設計の基準や意図が読み取れると思われ、詳細な情報の蓄積と整理が必要であることを提示して報告を終えたい。

文末になったが、実測作業は修理を請け負われた西村石灯呂店の作業場で行わせていただいた。お忙しい中にも関わらず、部材を外したり裏返したり、あるいはまた組み立てたりという面倒な作業を快くお引き受けいただいた。その結果として今回のような詳細な観察と報告を行うことができた。感謝する次第である。併せて、実測作業を中心とする調査について了解された額安寺当局および大和郡山市教育委員会の関係各位に感謝の意を表するものである。

（文責：狭川真一）

#### 4. 頬安寺宝篋印塔の石材

##### (1)はじめに

頬安寺宝篋印塔をつくっている岩石は花崗岩である。花崗岩の岩相を非破壊で記述するための方法として、肉眼観察と接写による写真上での鉱物量比を測定することにした。本来、花崗岩の区分は石英・斜長石・カリ長石の量比でなされるものであるが、写真のみでは判断が困難であることから、ここでは有色鉱物の量を測定した。測定に当たっては、写真上に格子を書き、その交点に存在する鉱物の数を測定し、これをもって鉱物の容量比とした。

花崗岩は、含まれる鉄チタン酸化鉱物の種類と量によっても磁鉄鉱系とチタン鉄鉱系に区分され、その違いは帯磁率にあらわれる。そのため、それぞれの帯磁率を測定した。測定にあたっては、田中地質社製携帯用帯磁率計（WSL-B型）を使用した。

##### (2)宝篋印塔の石材の岩石記載

宝篋印塔の石材は、粒径1～3mmの石英・斜長石・カリ長石を主体とする中粒の花崗岩からなる（図1）。塊状・均質で、面構造は見られない。モード組成は測定していないが、肉眼的にこれら3鉱物の容量は同程度であり、一般的な花崗岩の領域に入ると思われる。有色鉱物は主に黒雲母で、単独に点在する。このほか、少量の白雲母、ザクロ石を特徴的に含む。ザクロ石は0.3mm以下の粒状で自形結晶として産する。

実体顕微鏡下で撮影した写真をもとにして、黒雲母とザクロ石の容量比を測定した結果、黒雲母は3.03%、ザクロ石は0.35%であり、両者を合わせた有色鉱物は3.38%であった（表1）。また、帯磁率は $5 \sim 9 \times 10^{-5}$ SI（平均 $7 \times 10^{-5}$ SI）と低い値で、チタン鉄鉱系に属する。これらの特徴は、宝篋印塔全体を通して共通しており、すべて同一の岩石であると考えられる。

##### (3)奈良盆地周辺の花崗岩類

西南日本内帯には白亜紀～古第三紀の花崗岩類が広く分布している。Ishihara (1977) はこれらについて鉄チタン酸化鉱物（主として磁鉄鉱【 $\text{Fe}_3\text{O}_4$ 】とチタン鉄鉱【 $\text{FeTiO}_3$ 】）の量比と産状により、南から北に向かって、領家帯・山陽帯・山陰帯に区分した。一般に山陰帯の花崗岩は多量の磁鉄鉱とチタン鉄鉱を含む磁鉄鉱系花崗岩、領家帯と山陽帯の花崗岩は両者をほとんど含まないチタン鉄鉱系花崗岩に属する。さらに、領家帯の花崗岩は領家変成岩類と密接な分布をし、しばしば面構造を有することなどで山陽帯の花崗岩類と区別される。奈良盆地周辺は、これらのうち領家帯

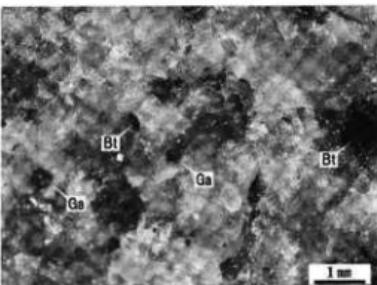


図1 頬安寺宝篋印塔石材の写真

Bl: 黒雲母、Ga: ザクロ石

	黒雲母	ザクロ石	色指数	文献
頬安寺宝篋印塔	3.03%	0.35%	3.38	本研究
南河内花崗岩	3.0%	0.5%	3.5	宮地ほか (1998)
春山花崗岩			2～3以下	西南ほか (2001)

表1 花崗岩類の鉱物容量比

に属する。額家帯の花崗岩類は変成岩類と調和的に貫入し、顕著な変形構造が見られる古期花崗岩類と、非調和的に貫入し変形構造の弱い新期花崗岩類とに区分される。

奈良盆地周辺の花崗岩類については、通商産業省工業技術院地質調査所（現産業総合研究所）による「大阪東南部」（宮地ほか, 1998）、「桜井」（西岡ほか, 2001）および「奈良」（尾崎ほか, 2000）地域の5万分の1地質図幅が出版されている。額安寺を含めた奈良盆地の周辺で花崗岩類がまとまって産するのは西側に分布する生駒山地南部の山塊と東側の山地で、それぞれ額家帯の花崗岩類が分布する（図2）。

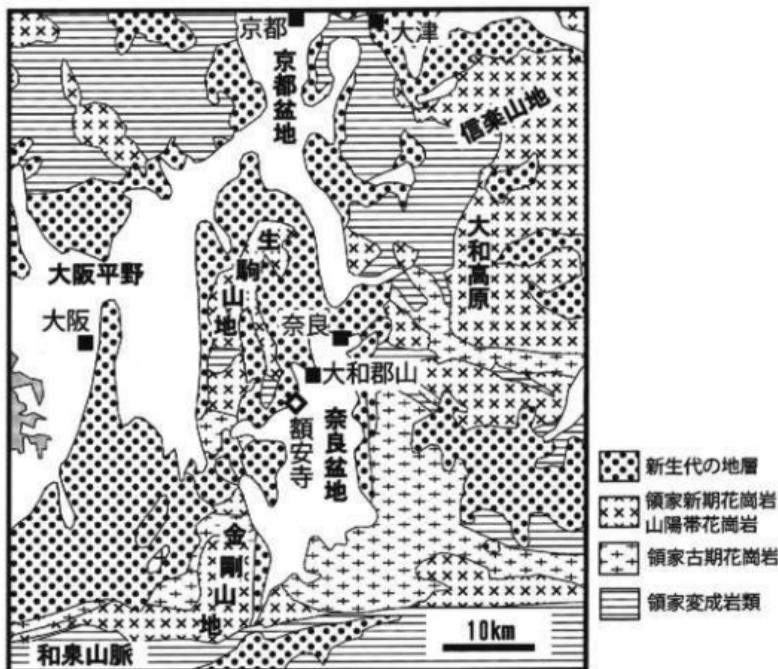


図2 奈良盆地周辺の地質概略

#### (4)石材の比較

額安寺宝鏡印塔の石材を山陽・領家帯の花崗岩類と比較するため、花崗岩類の帯磁率と有色鉱物の容量比を比較した。西南日本のうち、山陽帯と領家帯の花崗岩はいずれもチタン鉄鉱系に属する低い帯磁率を有するが、両者を比較すると、図3に示すように、山陽帯のものは $1 \times 10^{-4}$ SI～ $3 \times 10^{-2}$ SIであるのに対して領家帯の花崗岩類の帯磁率は $8 \times 10^{-5}$ SI～ $4 \times 10^{-4}$ SIで、領家帯のものの方が有色鉱物に富み帯磁率が低い。額安寺宝鏡印塔の花崗岩は $5\sim 9 \times 10^{-5}$ SI（平均 $7 \times 10^{-5}$ SI）の帯磁率で、チタン鉄鉱系に属する。額安寺の花崗岩をこれらと比べると、帯磁率が低く領家帯のものと近い値を示す。

領家帶の花崗岩類はさらに変成岩類と調和的に貫入し顕著な変形構造が見られる古期花崗岩類と、非調和的に貫入し変形構造の弱い新期花崗岩類とに区分される。額安寺宝瓶印塔の花崗岩には面構造が見られず、均質であることから、領家新期花崗岩類に属する可能性が高い。領家新期花崗岩類のうち、額安寺宝瓶印塔と同様のザクロ石を含む花崗岩の分布を見る。まず、信貴山北麓の久安寺～信貴畠地域では、南河内花崗岩と命名されているザクロ石含有黒雲母花崗岩が分布する（宮地ほか、1998）。

南河内花崗岩の北側には生駒山はんれい岩が、南側には領家古期花崗岩類が分布している（図4）。このほか、東部の天理市～桜井市域の山塊は主として領家古期花崗岩類が分布し、桜井市巻向山北部にはそれを貫く小規模の岩脈状岩体として巻向山花崗岩が分布する（西岡ほか、2001）。巻向山花崗岩はザクロ石を含む優白質な花崗岩である。奈良市東部の大慈仙町から三重県の山添村・名張盆地・上野市・青山町には、断続的に領

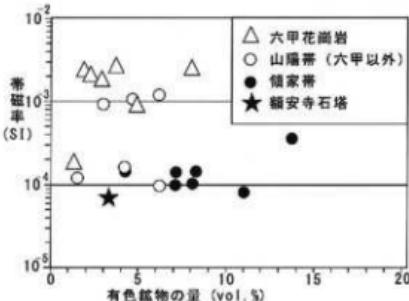


図3 花崗岩類に含まれる有色鉱物の量と帯磁率の関係



図4 奈良盆地南西部の地質図

家変成岩や古期花崗岩類を貫いてザクロ石を含む黒雲母花崗岩が分布し、阿保花崗岩と呼ばれている（尾崎ほか, 2000）。奈良盆地周辺の特に額安寺近隣の花崗岩類のうち、ザクロ石を含む花崗岩類が報告されているのは上記三岩体のみであり、額安寺宝篋印塔の石材产地候補は、これらの中にある可能性が高い。

額安寺宝篋印塔の花崗岩の鉱物容量比は黒雲母3.03%、ザクロ石0.35%であった。それに対しても、南河内花崗岩は黒雲母3%、ザクロ石0.5%（宮地ほか, 1998）で、両者の鉱物容量比は類似している。一方、巻向山花崗岩は優白質で色指数（有色鉱物の容量比）が2～3以下で、有色鉱物をほとんど含まない場合もある（西岡ほか, 2001）点で、額安寺のものとは異なる。阿保花崗岩の鉱物容量比は公表されていないため、このような鉱物容量比で比較することはできないが、阿保花崗岩は斑状で大型のカリ長石を含むことや分布域が遠いことなどを考え合わせると、額安寺宝篋印塔の石材产地となった可能性は低いと考えられる。

以上の事柄から、額安寺宝篋印塔を構成する花崗岩石材の産地となった岩体について、現時点では南河内花崗岩である可能性が最も高い。今後、さらに産地の可能性が高い地域の花崗岩について現地調査を行い、直接岩相を比較することが必要である。

（文責：先山 徹）

### III. 額安寺宝篋印塔の修理と組上施工

#### 1. 解体

##### a. 仮設橋の設置（図1）

宝篋印塔が池中島に立っていたため、解体修理に先行し、仮設橋を設置した。長さ12m、幅1m。



##### b. 接合部の剥離（図2）

宝篋印塔の各部材の接合面には、養生のためにコンクリートが厚く塗られていた。解体に際しては、ノミとタガネ・セットウでこれらのコンクリートを粗く割ってから、クレーンで持ち上げた。ただし、部分によっては石塔本体保全の観点から、現地であえて外さなかったところもあり、それらについては工房に運搬後、解体した。



##### c. クレーンによる運搬（図3）

島の上で解体した各部材はスリングによる破損を防ぐためサラシに巻き、池の南東に設置したクレーン車によって運搬用のトラック荷台に積み込んだ。



**d. 塔身上面の状況（図4）**

宝篋印塔の各部材は、このように厚いコンクリートによって接着されていた。塔身の上面に奉籠孔が看取されたが、ここにもコンクリートが流れ込んでいる状況であった。



**e. 基礎上面の状況（図5）**

接合部のみではなく、4つの部材からなる基礎の中心部にもコンクリートが流し込まれていた。パール等によって分離を試みたが、強く接着していたため、そのまま運搬し、工房において解体することとした。



**f. 宝篋印塔撤去後の状況**

**(西より) (図6)**

東側に石塔の傾きを抑える意味で、石などが置かれていた（詳細は本書第IV章参照）。

（文責：西村大造）



## 2. 修理過程

### a. 損壊状況（正面より）（図1）

右下隅部分に天地・左右それぞれ20cm程度の大きな欠損がある。



### b. 損壊状況（下より）（図2）

上記損壊部分の、下からの俯瞰。欠損部が意外に広い面積であることがわかる（図15において図示）。



### c. 破断面の研磨（図3）

補修石材の接着を確実なものとするため、必要最小限の範囲で破断面の研磨を行う。この作業により、接着力は格段に上がる。



d. 補修石材の接着（図4）

適当な大きさに裁断した石材3個を、欠損部分に接着する。補修石材には、頬安寺宝篋印塔で使用されているものと同質の「奈良石」と呼ばれる花崗岩を使用した。また、接着剤はエポキシ系石材用接着剤を使用している。



e. 補修石材の加工状況（図5）

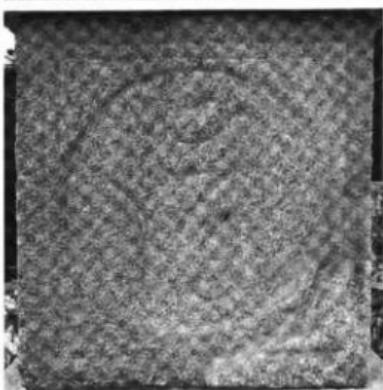
上記の石材に対し、宝篋印塔制作時の計画寸法に従って加工を加える。使用した主な道具は、ノミとセットツウとハビシャンである。



f. 仕上がりの状況（図6）

加工が終了した補修部に対し、接着剤と石材粉を混合した擬岩で接合部位を被覆した。また、部材の隅を丸めるなどのエイジング加工を施し、弱く着色を行って仕上がりとした。制作時のノミ痕なども残存部分からトレースし、自然な仕上がりを目指した。

（文責：西村大造）



### 3. 修補状況

額安寺宝篋印塔の修理方法（欠損部分の修補）に関しては、前節において述べた方法を踏襲している。修補部分については、図1～23に示す計6カ所であった。

今回の修復作業は、宝篋印塔を制作当時の姿に近づけつつ、一方では造立以来750年に及ぶ経年変化にも留意しながらの作業となった。ノミ痕を残す部分は残存部分のノミ痕をトレースし、ノミ痕が消え、花崗岩の地肌が風化した状況を示す部分は適宜エイジング加工を施すなど、あくまで自然な仕上がりを指向した。また、細部の加工にも厳密な注意を払っている。

なお、今回の修復においては、宝篋印塔の各部材の接着に用いられたコンクリートの除去に多大な労力を費やした。よって、今回の組上げに際しては、将来的な移設や修理に配慮し、基礎4石をはじめ、各部材はタタキ技法によるゆるやかな接合としている。

（文責：西村大造）

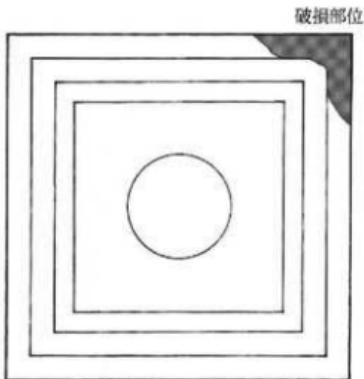


図1 笠上段形（上）の修補部位（上より）

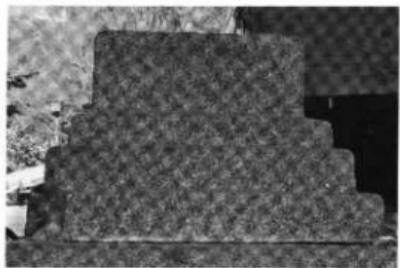


図2 同上、修補前状況

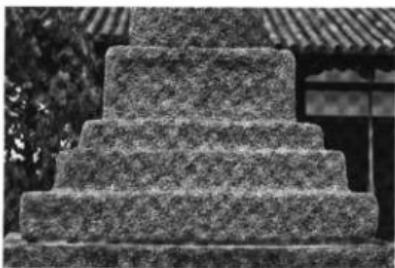


図3 同上、修補後状況

破損部位 b



図 4 篦上段形の修補部位（下より）

破損部位 b

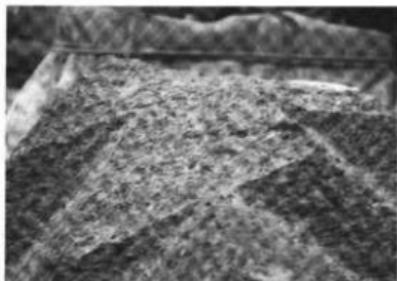


図 5 同上、a 部分修補前状況



図 6 同上、a 部分修補後状況

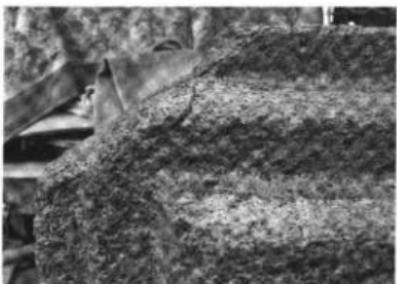


図 7 同上、b 部分修補前状況



図 8 同上、b 部分修補後状況



図9 塔身西面の修補部位

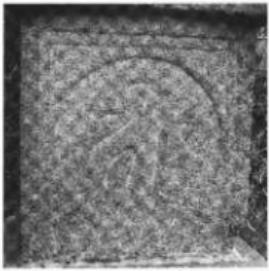


図10 同左、修補前状況

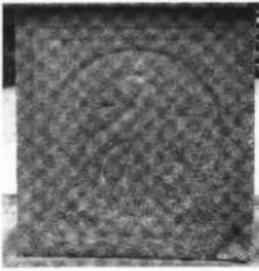


図11 同左、修補後状況



図12 塔身南面の修補部位

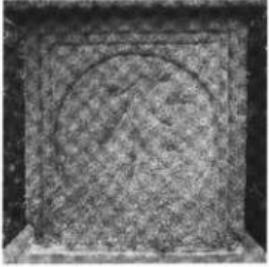


図13 同左、修補前状況

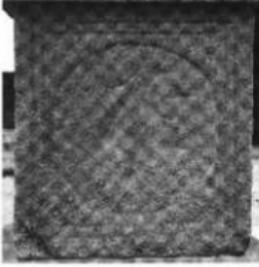


図14 同左、修補後状況



図15 塔身東面の修補部位

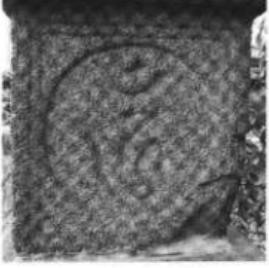


図16 同左、修補前状況

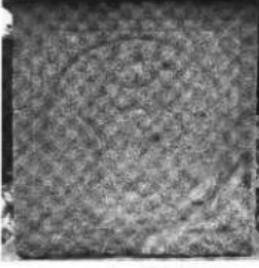


図17 同左、修補後状況



図18 塔身北面の修補部位

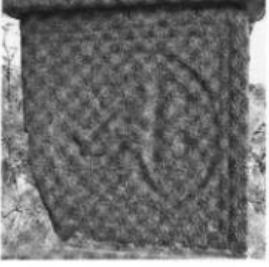


図19 同左、修補前状況

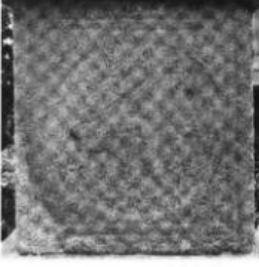


図20 同左、修補後状況

破損部位



図21 基礎上段形の修補部位

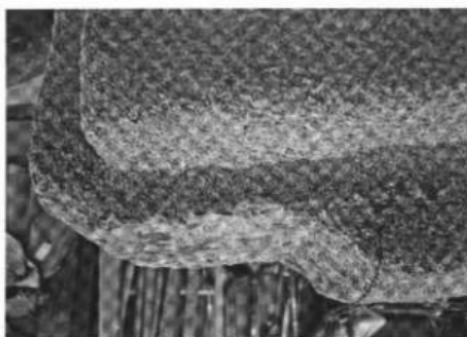


図22 同上、修補前状況

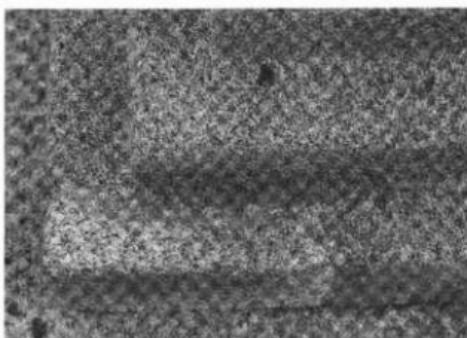


図23 同上、修補後状況

#### 4. 組上げ

##### a. 基礎工事（図1・2）

一边150cm、深さ75cmの平面形が正方形となる坑を掘り、最下層に辺長15～20cmの栗石を厚さ約30cmで敷設する。その上に直径2.3cmのバラスを敷設。ランマーによる圧密後の厚さは約20cmである。その上に約15cm（圧密後）の厚さで砂利を敷き、最上部には白川砂を約10cm敷設した。宝篋印塔の基礎は、大半はこの部分に埋設される。コンクリートの打設は行っていないため、経年によって数ミリ程度の沈下は予想されるが、粒度の異なる素材を均質に圧密したので、不等沈下の恐れは少ないものと思われる。設計は三家昌興氏（㈱アースワーク）、施工は大石石材工業㈱（代表：大石文彦氏）。

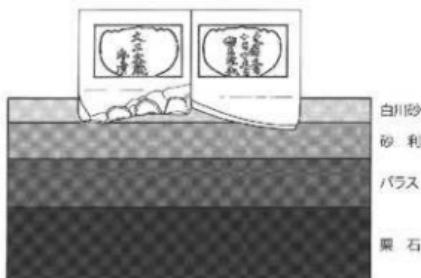


図1 基礎施工図 (S: 1/20)



図2 基礎工事

##### b. 基礎の設置（図3）

上記砂層中に、宝篋印塔の基礎（荒削未調整の部分）を埋設した。4石から成るので、水平出しがやや困難であった。なお、この石塔においては、制作当時の誤差から、上端面を合わせると左右の石材接合部分の一部に若干の間隙が生じてしまい、逆にこの左右石材を密着させると、上端面に高低が生じてしまう。今回は安全面の観点から、上端面を水平にすることを優先した。その結果、現状西面の左右石材接合部には若干の間隙が生じている。また、銘文については、見学者が見やすいように北側（通路側）とした。



図3 基礎の設置

### c. 積上げ作業（図4～6）

各部材は養生の上、紐で巻いてクレーンで吊り下げ、順次積上げた。積上げに際しては、塔身のように方向性の明らかなものは儀軌に従い、他の部材は、それぞれが最も整合的に組み合う方向性で組んだ。これは、当初の組み上げ時において、各部材がしっかり組み合うよう、現地で若干のハツリ等の加工を加えていた痕跡が看取されたことに基づく。若干生じるガタについては、鉛板を挟み込むことでこれを抑えた（後述の免震施工部分は除く）。



図4 積上げ（塔身）



図5 同上（笠上段形）



図6 同上（相輪）

#### d. 間詰め作業 (図7)

今回の修復に際しては、宝篋印塔の各部材の接着に用いられていたコンクリートの除去に多大な労力を費やした。よって、今回の組上げにおける各部材の接合は、深草砂利・石灰・にがり・水を混合したタタキ土を、京都の伝統的な技法に基づいて宝篋印塔各部材の隙間に詰めるタタキ技法による緩やかなものとして将来的な移設や修理に備えた。施工は小川正行氏（庭師植熊）。



図7 間詰め

#### e. 免震施工 (図8～10)

今回の組上げに際し、図10に示す部分に免震（吸震）施工を行った。施工対象となる石塔の各部材間に、免震（吸震）素材を専用の接着剤を併用して挟み込む比較的簡易な施工であるが、㈱建材試験センターにおける実験で、震度7クラスの地震に耐えることが確認されている。また、各地で近年発生した地震においても、この免震（吸震）施工がなされた墓石は倒壊していない。指定文化財に対する施工は、おそらく本事例が初となるであろう。

免震（吸震）素材は、プラスチックゲルシート（安震はかもり®）が有する免震（吸震）効果と、それを有効に引き出すための金属球、さらにそれらを安定させる効果を持つ特殊耐荷重リングで構成されている（特許第4238277号）。このゲルシートの素材は、粘着性と同時に弾力性が必要であるが、本製品の場合、通常見られるような可塑剤の注入なしに、上記の条件をクリアしており、耐久性において他種の製品より格段に優れる特徴がある。したがって、石造文化財に対する適性は高いものといえよう。また、中世石造物の場合、部材の接合面は必ずしも平坦ではない。今回の組上げ工事に際しては、状況に応じて3種類の厚さのゲルマット（3mm、4mm、5mm）を用いた（図10）。施工は筆者（杉田規久男：㈱安震代表）および矢田敏起氏（矢田石材店）。



図8 免震施工



図9 免震用ゲルマット

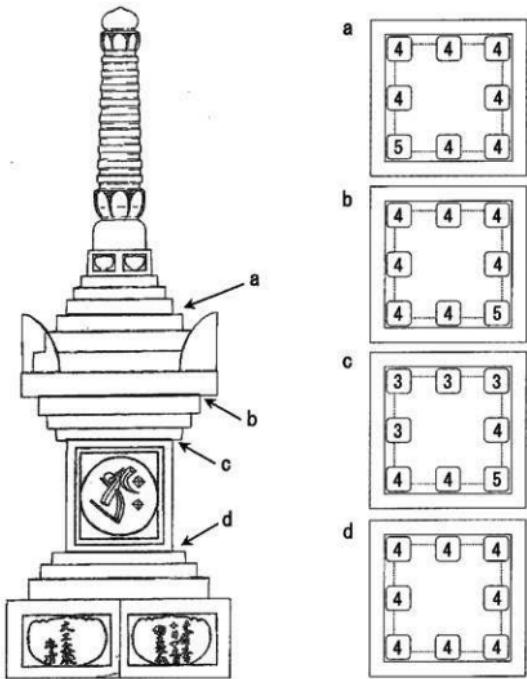


図10 免震施工部分模式図

\*数値はゲルマットの大きさ（一边）を表す

#### f. 納経（図11）

本書第2章2項で報告されているように、額安寺宝篋印塔の塔身には奉籠孔が彫られている。本来、ここには法舎利としての経巻が納められていた可能性が高いが、石造宝篋印塔のモデルとなった中國製金属宝篋印塔の事例を勘案すれば、その経巻は宝篋印陀羅尼であった可能性が最も高い。今回の組上げに際しては、この奉籠孔に唐招提寺元長老の遠藤證圓師の筆になる宝篋印陀羅尼經と、今回の修理の経緯を記した「額安寺宝篋印塔修復記」を納めた経筒を納入した。

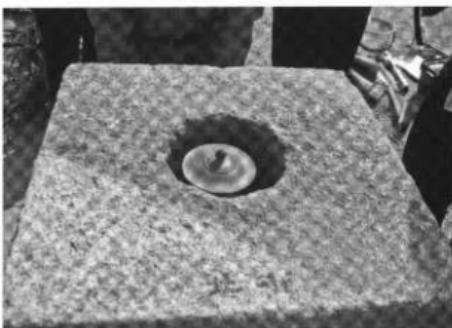


図11 経筒の奉納

#### g. 供養（図12・13）

組上げ工事の終了後、遠藤證圓師を導師として竣工供養が行われた。

〔文責：e = 杉田規久男  
その他 = 西村大造〕



図12 竣工供養



図13 同上



図14 竣工（北面）



図15 竣工（東面）



図16 竣工（南面）



図17 竣工（西北より）

## IV. 明星池中島の発掘調査

### 1. 調査の契機および経過

この発掘調査は、類安寺宝篋印塔の移転・修理に伴い、塔が立てられていた明星池中島の地下を調査したものである。主な目的としては、中島の築造年代の確定と、宝篋印塔が造立当初からここに存在したかどうかを確認することを掲げた。

発掘調査は平成21年3月2日に開始し、同12日に終了した。調査面積は8.2m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査の概要

#### (1)遺構

中島全体の規模は、南北約5.1m、東西約5.6m、高さは約1.7mを測るものである。調査は、宝篋印塔が立っていた場所を中心に十字の土層観察用畦畔を残し、島上の平坦部分を人力で掘り下げた（図1）。なお堆土については、一輪車を用いて仮設橋から外部に搬出した。

表土層（①層）は腐葉土を主体とする層で、約10cmの厚さである（以下、土層に関して図2・3参照）。時期的には近現代の遺物を含む。なお、この①層の一部が、宝篋印塔の下部まで入り込んでいる状況も看取された。このことについては、基礎の東側下端部をコンクリートや石で支えた痕跡が見られたので、昭和48年の再建時<sup>1</sup>、基礎も傾きを修正するなどの改変が行われた可能性がある。

①層を除去すると、茶褐色の②層（厚さ約35cm）に至る。付近の丘陵から削った土を盛ったと思われる人為的な盛土で、層中には土器や瓦・陶磁器の他に、拳大から人頭大の礫を含む（図3）。このほか、鎌倉時代を主体とする瓦も多く混入していたが、これらについては盛土の根固め的な効果を期待して、意図的に混入されたものかもしれない。また、採土地の付近には古墳も存在したようで、埴輪片も若干出土した。本層の時期を直接示す土器や陶磁器の年代観は、18世紀後葉～19世紀初頭である。宝篋印塔は、本層の上に立っていたので、石塔が現在の位置に固定されたのは、18世紀後葉～19世紀初頭以後ということになる。なお、宝篋印塔を支えるための基礎（石組など）は見られなかった。また、版築などの構造も認められない。

②層の下部は、やや濃い茶褐色を呈する③層となる。本層は、②層に比して締まりはよいが、版築などは行われていない。②層のように18世紀代の遺物は含まず、また時期を明瞭に示す遺物を欠くが、出土した瓦質土器（甕）の年代観は、おおむね16世紀後葉から17世紀前葉までに収まるものである。なお、本層は調査範囲の南西部部分で表土から約80cmまで掘り下げたが<sup>2</sup>土層に変化はなく、また地山面も検出されなかった。この中島については、全体が盛土で形成されたものである可能性が高い。

#### (2)遺物（図4～図6）

ここでは、実測可能な遺物を中心に、層別に報告を行う。

##### ①層出土遺物

1（写真のみの報告）は、桟瓦の小巴部分（蛇の目）である。近代以降のもの。①層からはコンクリート片などを含む、近現代の遺物が主に出土している。

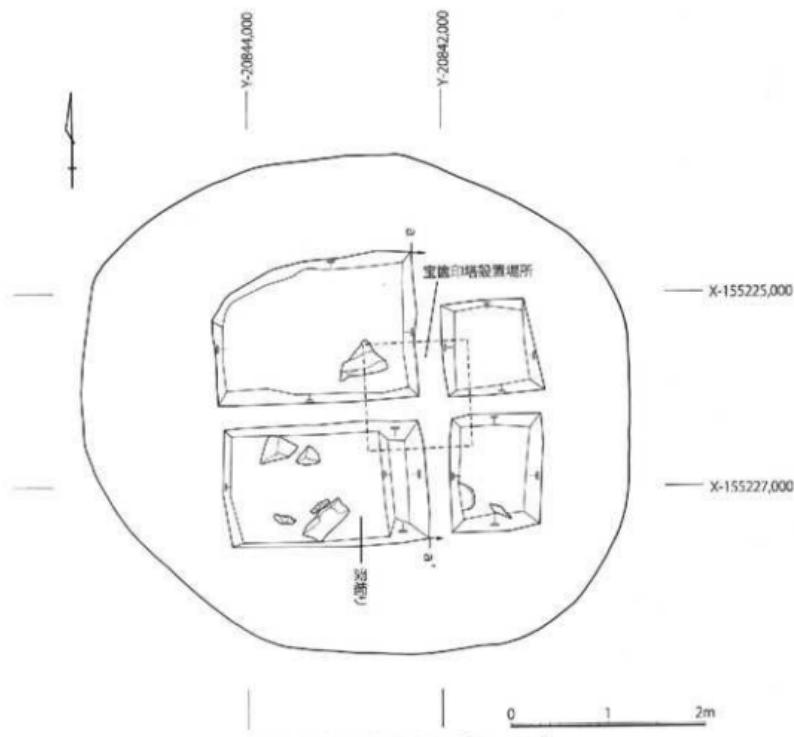


図1 発掘調査区平面図 (S: 1/50)



図2 トレンチ南北壁畔土層図  
(西より・S: 1/50)

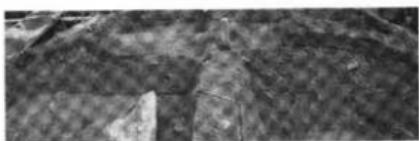


図3 トレンチ南北壁畔土層図 (西より)

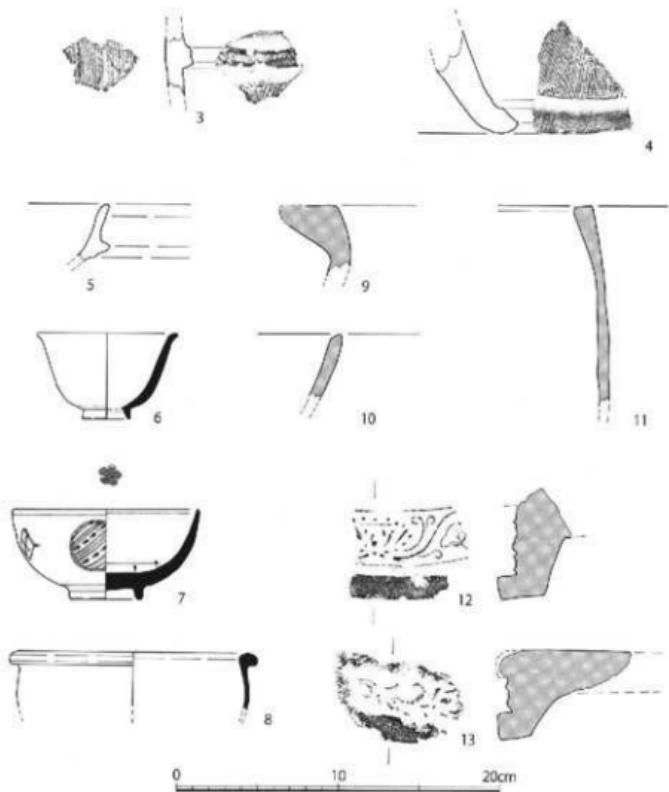


図4 須安寺14次 ②層出土遺物実測図 (S: 1/3)

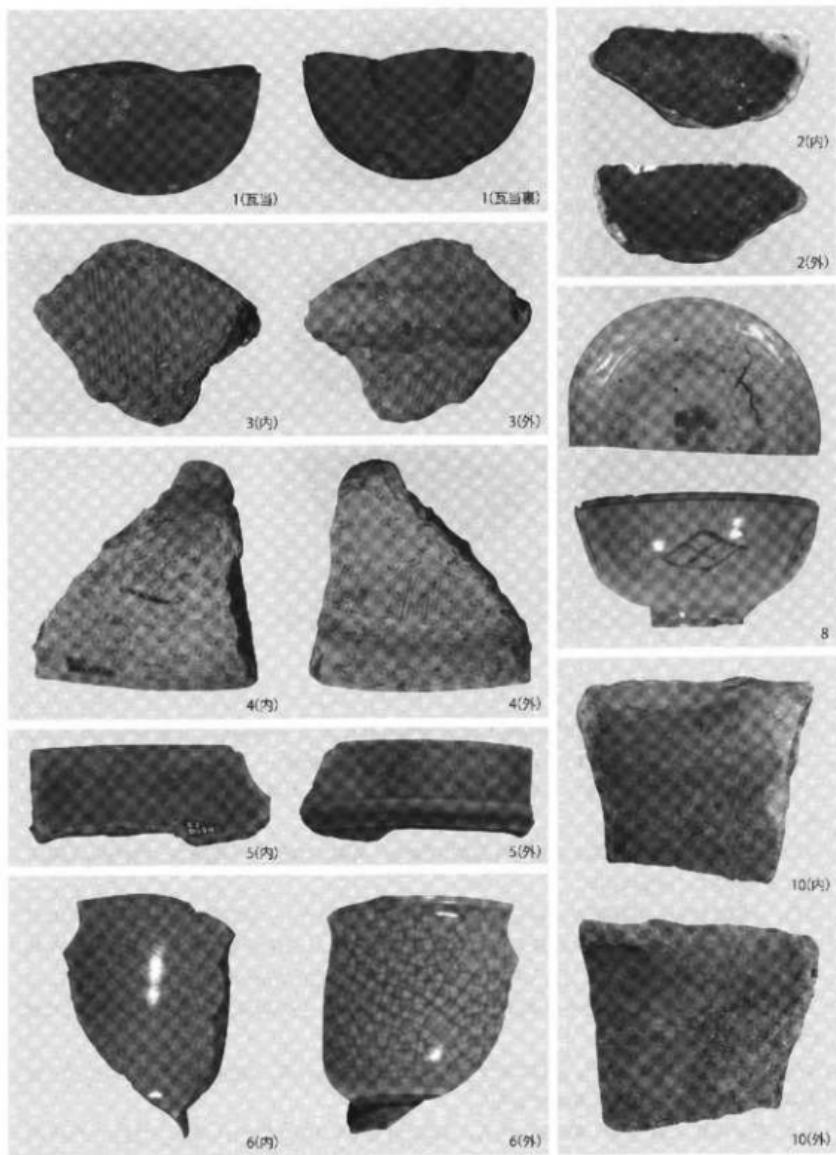


図5 出土遺物写真①

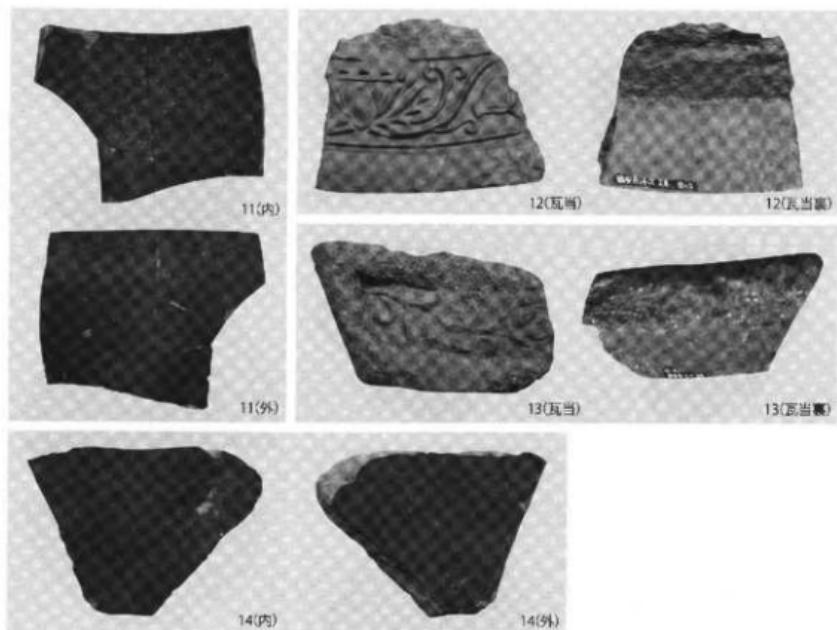


図6 出土遺物写真②

### ②層出土遺物

2は、瓦器椀の破片である。内部に粗いミガキが施されている。川越編年（川越1983）III-C型式、橋本編年（橋本2009）III-3期に属する。13世紀中葉～後葉。

3は、円筒埴輪の破片である。外面タガの下に縦ハケ、内面にも縦ハケが施される。古墳時代後期。

4は、形象埴輪の基底部（裾）と思われる破片である。外面には縦ハケが施され、裾付近には強く円周ナデを施す。内面はナデ。

5は、土師器焰烙の口縁部破片である。口縁の内外面をヨコナデし、突帯を貼付けた後に、やはりヨコナデが施される。内外面には薄く煤が付着する。胎土中には雲母の微粒を多く含む。難波分類（難波1989）Fc類。時期的には、類似するタイプの焰烙が波佐見磁器中野編年（中野2000）III-2～3期の染付磁器を共伴する事例が見られることから<sup>3</sup>、18世紀後葉～19世紀初頭の年代観が与えられる。

6は、灰釉陶器端反碗である。精良な胎土に長石釉が施されている。表面は貫入が著しい。京・信楽系陶器で、時期は江戸時代後期であろう。

7は、肥前磁器（波佐見焼）染付碗である。外面は丸文および菱文を交互に配し、見込には崩れた五弁花文のコンニャク印判が押されている。また、内面には蛇の目釉剥が見られる。時期は、中野編年（中野2000）のIII-2～3期（18世紀後葉～19世紀初頭）に収まるものと思われる。

8は、綠釉陶器行平鍋の口縁部である。口縁部を外側に巻き返すように肥厚しており、外面には弱

い飛びガンナの痕跡がある。

9は、瓦質土器火鉢（丸形）の口縁部である。外湾する体部と内側に大きく肥厚させる口縁部が特徴である。

10は、瓦質土器擂鉢の口縁部（注口部）破片である。端部は内傾し、面を持つ。内面の一部には摺目が見られる。佐藤編年（佐藤1999）のD期で、15世紀末～16世紀前葉。

11は、瓦質土器火鉢の口縁部破片である。内外面共にナデ調整が施されるが、内面には指頭圧痕を残す。なお、体部には方形の窓が開けられている。

12は、軒平瓦の破片である。半裁蓮華文の横に、唐草および迦葉の表現がある。法隆寺274A型式（佐川1992）と同範<sup>4</sup>であるが（図7-1）、こちらの方が迦葉の葉脈が少なく、法隆寺のものが改範後の様相を示す。時期は、1280年前後（山崎2000）、1275～1283年以降（桃崎1996）という見解が公表されている。類安寺では、初の出土例となる。

13は、やはり軒平瓦の破片である。左から右に流れる唐草文が表現されている。法隆寺287A型式（佐川1992）と同範。完形品（図7-2）では、中心飾に鳳凰文があしらわれている。時期は、鎌倉時代後期とされる（佐川1992）。

### ③層出土遺物

14（写真のみ報告）は、瓦質土器大型製品の破片である。薄手の大型製品であり、甕の可能性が高い。外面には難れ砂が若干付着している。焼成は良好で、還元や表面の炭素吸着も完全である。以上の諸点から、この遺物については16世紀後葉～17世紀前葉の時期観が与えられる。なお、③層からは同様の特徴を持つ瓦質土器破片が数点出土している。

### （3）小結

以上のように、今回の調査を通じて、明星池中島の築造は16世紀後葉～17世紀前葉に下ることが明らかとなった。つまり類安寺宝鏡印塔は、造立当初はここに立地されていたものと考えられる。18世紀後葉～19世紀初頭に、中島はさらに上部に盛土がなされ、宝鏡印塔もその層の上に立て直されている。

しかしながら、盛土には版築などの構造は見られず、塔の下部構造として石組なども設けられていなかったことから、石塔の自重で基礎が不等沈下を起こし、宝鏡印塔が傾く主原因となったのであろう。なお、既述のように石塔の基礎東側にはコンクリートや踝が埋め込まれていた。これは、塔の傾きを修正するために、昭和48年の再建時に行われたものと思われる。

（文責：山川 均）

<sup>1</sup> 本書第II章2項参照。

<sup>2</sup> このように深掘を一部に止めたのは、島を保護する観点からである。

<sup>3</sup> たとえば、商井城第7次調査第2トレンチ第2包含層出土の埴洛（大和郡山市教育委員会2006）など。

<sup>4</sup> 同範圍紙の調査に際しては、奈良文化財研究所で実物同士を照合した。なお、この際に同研究所考古第3調査室・今井晃樹氏の多大なご協力を得た。



図7 法隆寺における同範瓦（S:1/4）

奈良文化財研究所提供

## V. 考察

### 1. 大藏派の遺品とその活動

#### (1)はじめに

今回、修理が行われた額安寺宝篋印塔は、報告の通り「文応元年十月十五日 願主永弘 大工大藏安清」の銘をもつ。この「大工大藏安清」は、「大藏派」と称される工人の一人であり、本塔は大藏派の最古の遺品であるとともに、関西で唯一、「大藏」銘をもつ塔である。

大藏派ならびに大藏派宝篋印塔については、川勝政太郎氏による一連の研究を嚆矢として、大藏派を番匠大工として位置づけ、西大寺流律宗の工匠集団として位置づけを行った前田元重氏の研究、各塔の修理報告など、数多くの先行研究がある<sup>1</sup>。筆者もかつて、先学によって大藏派と称されてきた宝篋印塔について検討を行い、その系譜や活動について論じたことがある（岡本2003.2006）。また、近年では山川均氏も大藏派に関する諸説を提示されている（山川2006.2008）。大藏派は、石工に関する資料が極めて乏しい中世史上において、律宗の布教活動と密接に関わっていることが知られ、彼らの活動の範囲や実態が窺える事例として、早くから注目を集めてきた。

ところで、これまで研究史上において、「大藏派」と称されてきた一群の中には、①「大藏」銘をもつもの、②銘文および形状・比率などから大藏派の系譜がたどれるもの、③銘はないものの①に酷似し、大藏派の製作による可能性が極めて高いものがある。また、大藏派がもたらした様式は、その後の関東で展開する石造物の様式に多大な影響を与え、宝篋印塔については基本的に大藏派の創出した意匠を模倣することによってこの地方の様式として定着していく（岡本2003）。本稿では①および②を「大藏派宝篋印塔」、③を「大藏派系宝篋印塔」とし、④大藏派の模倣品として展開する一連の様式を従前の研究史を受けて便宜的に「関東様式宝篋印塔」と呼称する。しかしながら、③と④の区分については、先学の研究によっても明らかなどおり、各研究者によって若干のばらつきがあり、決定的な分類方法を提示することはできない。ここでは、なかでもより①との類似点が多いものを③と位置づけることとする。

本稿は、これら大藏派宝篋印塔ならびに大藏派系宝篋印塔を取り上げ、その活動を概観するとともに、額安寺宝篋印塔の再評価を行うことを目的とする。

#### (2)大藏派宝篋印塔と大藏派系宝篋印塔

今回調査が行われた額安寺塔は、先述の通り大藏派宝篋印塔中、最古の遺品である。また、本塔は関西では唯一「大藏」銘が刻まれた塔であり、後に関東で活躍する大藏派が確かに大和を拠点として活動していたことが銘文から知られるという点においても貴重である。

塔の概要については本書第II章2・3項の通りであるが、額安寺塔より1年先んじて造立された生駒市興山往生院塔に代表される、基礎が高く側面を素面とし、隅飾も素面で低いという、比較的シンプルな特徴をもつ大和の大多数の宝篋印塔の諸特徴とは異なり、額安寺塔は基礎ならびに露盤側面を2区に分かって格狭間を刻み、塔身には二重の輪郭を有するなど、比較的装飾的な意匠を有する。低い基礎に格狭間を刻む点、石材が花崗岩である点などの特徴は、後に作られる典型的な関東様式の宝篋印塔とは異なるが、各部に輪郭を設けるなどの装飾的特徴は、総じて関東様式につながる特徴であるといえるだろう。

大和において、こうした装飾的な特徴をもつ塔としては、他に奈良市菩提山町所在の正暦寺塔がある（図1-1）。塔には、関西の宝篋印塔にしては珍しく反花座を有する。反花座は侧面素面で高く、上部には複弁反花を刻んでいる。反花は、関西のもの多くが隅部分に蓮弁を配さないのは対称的に、四隅に各1枚、各面7枚の花弁を刻む。基礎は側面を2区に分かち、それぞれに格狭間を刻出する。基礎上を3段にする点も額安寺塔に共通する特徴である。塔身は額安寺塔と同じく二重の輪郭を作り出し、その内部には金剛界四仏の種子を薬研彫りする。笠は上下2石で作りだすが、軒下の段形2段は復元されたものである。笠上は6段、頂部には露盤を作り出し、この部分もやはり2区に分かって内部に格狭間を入れる。隅飾は2弧で素面。残念ながら銘はないが、塔全体に額安寺塔に共通する装飾的な意匠がみられることから、「大藏派」の手による宝篋印塔と指摘されてきた塔である（川勝1974）。製作年代も額安寺塔とさほど間をおかない時期とみられ、反花座を有する点を額安寺塔よりも新しい要素とみれば、関東様式につながる要素を額安寺塔以上に持ち合わせている塔と評価できるだろう。

現在のところ、関西において大藏派の活動や系譜が具体的に知られる資料は、額安寺塔と正暦寺塔の2基のみである。大和において鎌倉時代後期以降、定形化していく宝篋印塔は、塔身に輪郭を有するものの奥山往生院塔の系譜に繋がるシンプルな特徴をもつ塔であり、額安寺塔の系譜をひく塔はこの後、関東へと移る。以下、関東における大藏派宝篋印塔と大藏派系宝篋印塔を順にみていくこととする。

#### 元箱根塔（神奈川県足柄下郡箱根町元箱根、国指定重要文化財、図1-2）

箱根山の山麓、精進池のほとりに、早くから注目されてきた大藏派宝篋印塔がある。基礎には大きく格狭間を刻み、基礎上は3段。塔身には3面に胎藏界四仏の「ア」・「アー」・「アン」が、残る1面には仏龕内に仏坐像が陽刻される。笠の軒部分には宝篋印陀羅尼と三帰依真言が刻まれる（箱根町教育委員会1993）。隅飾は2弧で素面。笠上は6段で、頂部には側面に2区の輪郭を刻んだ露盤をのせる。相輪は欠損しており、現在は後補材がのる。基礎上および笠下の段形が3段、笠上が6段になる点などは、額安寺塔や正暦寺塔に通ずる特徴であるが、基礎や各部の比率などは、これら二塔や本塔に続く大藏派宝篋印塔とは異なっており、両者をつなぐ段階の塔であることが窺える。

本塔には、基礎部分に長文の銘が刻まれている。前段には、本塔の造立願文が刻まれ、「永仁四年丙申五月四日 大願主金剛佛子<sup>母</sup>円房匿善敬白」とあり、その後に結縁衆として「武石四郎左衛門平宗圖」以下18名が名を連ね、「大工大和國所生左衛門大夫大藏安氏」の名が刻まれる。さらに、末尾には「供養導師良觀上人 正安二年八月廿一日 心阿」とある。これらの銘から、本塔は、永仁4年（1296）に「大和國所生」の大工大藏安氏によって造塔された後、正安2年（1300）に良觀上人、すなわち忍性によって供養が行われたものとみられる。心阿は安氏の後を繼いで造塔に携わった大工であるとみられており、正安2年にその名を追刻したものであろう。

#### 余見塔（神奈川県足柄上郡大井町余見、大井町指定文化財、図1-3）

反花座は側面2区に分かち、上端は二重単弁となる<sup>3</sup>。基礎も2区の輪郭をもち、上端は3段。塔身には輪郭内に金剛界四仏の種子を刻む。笠下を3段、笠上を6段とし、露盤には2区の輪郭をもつ。基礎側面に「大勸進 僧覺一 大仲臣金光 一結衆五十人 大工 藤原頼光 大倉定安嘉元二年大才甲辰十二月廿日」の銘がある。大工の名は風化で判読が困難なため諸説あるが、姓を「大倉」とみる点は共通しており、大藏派の作とみられる。この塔の大工を松井一明氏にならって「大藏定安」であるとすれば（松井2009）、前田元重氏が大藏派を石工ではなく番匠大工であると位置づける根拠とした称名寺「堂建立書」の中にみえる「大藏定康」と同一人物である可能性があ

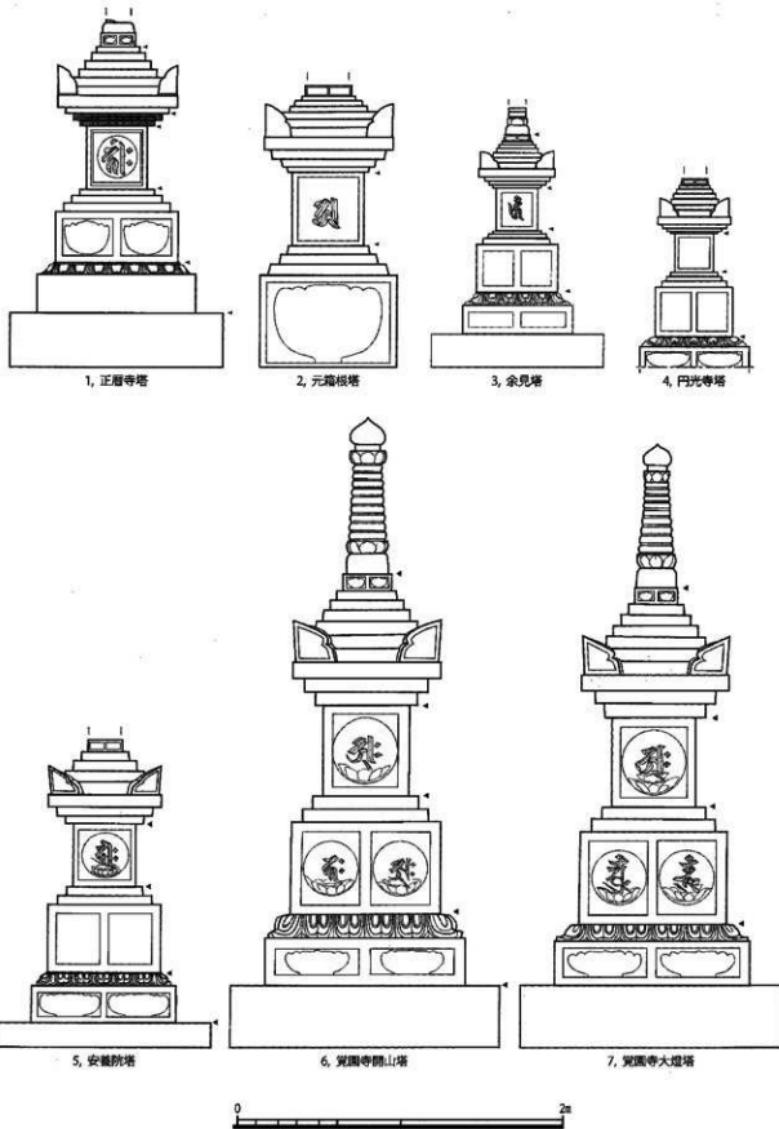


図1 大藏派宝篋印塔・大藏派系宝篋印塔実測図 (S : 1/30)

る。また、「僧覺一」は、泉涌寺第七世長老覺一房覺阿ではないかとされており、本塔の造塔にも律僧が関わっていることが窺える。覺阿は、余見塔に近い足柄上郡最明寺の第二世として住持していたようで、厚木市飯山寺の寺主であったことも知られている（伊藤1977）。

ところで、この余見塔に似た特徴をもつ塔が、厚木市円光寺にある（図1-4）。反花座の側面に格狭間を刻む点、塔身に種子ではなく四仏の像容を表す点などが異なるが、塔の規模、比率、蓮弁の表現など、余見塔と共通する部分が多いことから、余見塔に近い大工の手によって造立された塔であるとみられ、大藏派系宝篋印塔として位置づけられる塔と考えられる。

#### 安養院塔（鎌倉市大町、国指定重要文化財、図1-5）

基礎の東部分に「…塔婆 □觀上人之／…結縁衆之 名字所奉造立如件 德治三年（1302）戊申七月 日／大工沙弥心阿 大檀那沙弥觀果」の銘がある（（財）文化財建造物保存技術協会1980）。この「大工沙弥心阿」は、元箱根塔に追刻で名がみえる「心阿」と同一人物とみられ、本塔は元箱根塔の造立に関わった心阿の作による塔とみられている。

切石1段の基壇上に反花座を据える。反花座側面は2区格狭間、上端は二重複弁<sup>3</sup>で、四隅に各1枚、各面5枚の花弁を配する。基礎は側面2区に分かれ、基礎上ならびに笠下の段は各2段。塔身には月輪内蓮座上に金剛界四仏種子を流麗に薬研彫りする。隅飾は2弧輪郭付き。笠上は4段でその上に露盤を置く。相輪は欠損し、現在は後補材がのる。

#### 長谷寺宝篋印塔陽刻板碑（鎌倉市、鎌倉市指定文化財）

長谷寺宝物館内に保管されている安山岩製の板碑で、上半部いっぱいに宝篋印塔を陽刻する。最下段は方形、輪郭内に格狭間を大きく表す。基礎は2区の輪郭を持ち、基礎上・笠下の段形は各2段。塔身には胎藏界大日如来の種子を大きく薬研彫りする。露盤は省略されているが、頂部には優美な相輪を立てる。基礎の両側に供された華瓶の表現も陽刻で表される。

塔の上部には光明真言の種子が、塔下には「右志趣者為二親 聖靈等乃至法界 平等利益矣 德治三年五月 四日沙弥信阿敬白」の銘がある。ここにみられる「信阿」という人物は、元箱根塔ならびに安養院塔にみられる「心阿」と同一人物であることが指摘されている（賀1981）。板碑は頂部に二条の沈線がなく、まるくなっています。石材、華瓶の表現方法など、鎌倉近郊にみられる板碑とは異なる点が多く、宝篋印塔の基本的な構成や比率は安養院塔と共に通する部分が多くみられることがから、本板碑を造立した石工は、この地方で主に板碑を作ってきた石工ではなく、心阿と同一人物とみるのが妥当であると考えられる。

#### 覚園寺開山塔（鎌倉市二階堂平子、国指定重要文化財、図1-6）

覚園寺開山智海心慧の塔で、高さ4.27mの巨塔である。基壇上に側面2区格狭間、上端に二重複弁を刻出した反花座をおく。基礎は2区に分かれ、輪郭内には蓮座上月輪内に般若理趣經の八大菩薩種子を流麗な薬研彫りで表す。基礎上は2段。塔身には蓮座上月輪内に金剛界四仏種子を刻む。笠上は6段で、その上に露盤をのせる。塔には部分的に漆喰が残り、化粧塔として飾られていた可能性がある。基礎には「開山大和尚／正慶元年（1332）壬申 沙弥禪門□阿 仲秋廿七日造立／嘗事惠秀 願主尼良阿 大工光弘／住山豊惠」の銘がある。住山の豊惠は覚園寺第三世長老で暦山と号する。本塔は、嘉元4年（1306）に示寂した開山智海心慧の二十七回忌の年忌塔として、營



図2 長谷寺宝篋印塔  
陽刻板碑  
(長谷寺提供)

事の恵秀と尼良阿が大工光弘に造立させたものである。

塔下には石室があり、中央に火葬骨を納めた古瀬戸草葉文壺が、また基壇内部に褐釉壺が納められていた（鎌倉国宝館2005）。褐釉壺は山茶碗を蓋とし、内部に銅製鍍金五輪塔を安置していた。五輪塔には「右為信阿聖靈也／元亨三年（1323）三月十九日／孝子光弘敬白」の刻銘があり、内部に歯骨を納めた竹筒が納入されていた。この五輪塔に名のある「信阿」は安養院塔、長谷寺宝篋印塔陽刻板碑を造立した「心（信）阿」と、光弘は、大工光弘と同一人物とみられており、光弘が親である信阿の菩提を弔うために作った五輪塔を、開山塔に納入したようである。

#### 同大燈塔（図1-7）

開山塔と並んで歴代住持の墓所内に立つ覺園寺第二世長老大燈源智の塔で、高4.11mを測る。開山塔とは細部に違いがあるものの、基本的な構造は同じである。こちらは基礎に尊勝曼荼羅の大仏頂種子を刻む。基礎には「正慶元年壬申 大燈大和尚之塔 仲秋廿八日造立／住持比丘鑿惠敬誌／建立尼圓觀／營持比丘恵秀 大工光弘等」の銘があり、本塔も開山塔同様、大工光弘が造立に関わったことがわかる。

基壇内には褐釉双耳壺が、塔身内から銅製鍍金の台座を有する水晶五輪塔形舍利容器1基が納められていた。基壇には開山塔同様、塔下に石室が設けられていたが、骨蔵器は残されていなかった。

以上が、大藏派宝篋印塔、大藏派系宝篋印塔と位置づけられる可能性が高い塔である。これらの塔は、全体として各部に輪郭や格狭間を多用し、装飾的な意匠を有することを特徴とするが、その萌芽は額安寺塔に見られ、大藏安清が考案した斬新なデザインを発展的に踏襲した結果とみられる。銘文からは「安清一安氏一定安一心阿一光弘」の系譜が窺えるが、余見塔以降の年号を持つ塔については、各部の比率がほぼ一致することから、これらの系譜が銘文上だけでなく、比率などの属性からも裏付けられるものと考えられる（岡本2003）。

#### （3）大藏派とその活動

「大藏」銘をもつ石造物の塔の形式は、以上にみてきたように宝篋印塔のみであるが、それ以外にも大藏派が造立に関わったとみられるものがある。

箱根山宝篋印塔が立つ精進池のほとりには、俗称二十五菩薩と称される地蔵磨崖仏、虎御前墓、曾我兄弟墓との伝承をもつ3基の五輪塔、六道地蔵と称される大型の地蔵磨崖仏などがある。これらは、宝篋印塔とほぼ同時期、永仁元年（1293）から正安2年（1300）の短期間に集中して造立されたものである。仏の像容や、立地などから宝篋印塔以外の石造物群についても大藏派が製作に関わった可能性が高い。

箱根の地は、これらの石造物の銘文にもみえるとおり、地獄があるといわれてきた地である<sup>4</sup>。銘文からは、これらの石造物群の造立に地蔵講衆が関わったことが見て取れ<sup>5</sup>。これらの石造物群の造立が一段落したとみられる正安2年に忍性によって供養が行われていることは、これら一連の造営事業が忍性らの大々的な活動によって行われたことを示している。地獄の故地に、地蔵菩薩と供養塔としての宝篋印塔や五輪塔を計画的に配することは、それらに結縁することこそが救済への道であることを効果的に示す何よりの宗教的演出となつたであろう<sup>6</sup>。そして、これらの工事を実務的に取り仕切ったものこそ大藏派であった。

彼らは、忍性とともに大和を発ち、箱根の地でこの大事業に携わり、その後関東へと下向する。中世の石工は出張製作を行っているとされるが（川勝1957）、彼らは大和の地へ再び帰ることはな

く、関東の地で活動の場を広げることとなり、関東地方周辺の石造物に大きな影響を与えていく。ここまで、額安寺塔が大和の宝篋印塔とは異なる装飾的な意匠を加味した塔であり、大藏派はその意匠を踏襲して大藏派様式ともいいうべきものを作りあげていくことをみてきたが、彼らの意匠は関東地方の宝篋印塔はもとより、その他の形式の塔のデザインにも大きな影響を与えたものとみられる。例えば、称名寺審海五輪塔や極楽寺薬鉢台座などは、余見塔や円光寺塔などと同様の、前田元重氏が「西大寺工匠集團」の特徴として位置づけた二重単弁を有しているし、鎌倉市極楽寺忍性五輪塔や、淨光明寺五輪塔は、安養院塔や覺園寺塔と同様の側面を2区に分かち、上端に二重複弁を入れる反花座を有している。また、大藏派の特徴として各部に装飾的に輪郭を設けることがあげられるが、この輪郭は、鎌倉所在の無縫塔などにも見て取ることができる。鎌倉近郊の石造物が、鎌倉時代後期以降、大藏派の意匠と共に各部に輪郭や格狭間を入れるという特徴を持つようになることは、この地域において大藏派の斬新な意匠が模倣され、取り入れられていった結果とみられる。

また、関東地方の石造物は、鎌倉時代中期以前においては凝灰岩や砂岩などの軟質石材で造塔されたものしかなかった。しかし、大藏派が関東へと下向する鎌倉時代後期になって、突如、安山岩製の石造物が席捲するようになる。このことは、馬淵和雄氏の指摘のとおり、大藏派が硬質石材加工技術を関東へともたらした結果と考えられる（馬淵2005）。彼らのもたらした技術は、おそらく鎌倉の地で律宗が盛んに行っていた造寺、造塔事業、あるいは井戸掘り、架橋などの土木事業にも多大な影響を及ぼしたことであろう。

また、大藏派は西大寺流配下の工匠集團として捉えられてきたが（前田1989）、大藏派宝篋印塔の造塔背景からは、北京律僧の姿も垣間見える。先述のように、余見塔を造立した「僧覺一」は泉涌寺第七世長老覺一房覺阿とみられているし、覺園寺はいまでもなく泉涌寺派の寺院である。さらに、安養院は現在浄土宗の寺院であり、宝篋印塔は浄土宗名越派開祖尊觀上人の墓と伝えられているが、その前身寺院は律院であった可能性が高いとされており、大森順雄氏の指摘どおりこの地に東榮寺があったとすれば、ここでも北京律系の僧が本塔の造立に関わっていた可能性がある（大森1991）<sup>7</sup>。大藏派は西大寺流配下という枠組みを超えて、より広く各種の造営活動に携わっていたと推測される（岡本2006）。

このように、銘文中にみえる大藏派の動きは点でしかないけれども、そこから垣間見える彼らの姿は中世史上において看過できないものであった。

#### (4)額安寺塔解体修理の結果

ところで、大藏派が関東へともたらした硬質石材加工技術とは、具体的には何であったのか。これまで、その点については大藏派の関東下向と期を一にして硬質石材による石造物が増えるという事象から指摘がなされてきたが、大藏派が持っていた新しい技術が、新しい道具によるものなのか、新しい技法によるものなのかといった点は具体的な資料がなく等閑に付されてきた。

今回の額安寺塔の解体修理では、基礎の下面の未調整部分に矢穴が確認された。鎌倉時代以降の石造物の多くは、成形後、細部調整された石材を組み上げることによって成っている。したがって、よほど粗雑なつくりでない限り、成形痕は消されてしまうこととなる。このことが、石造物の製作技法の解明を困難にしているのであるが、額安寺塔は定形化していない段階の塔であるためか、基礎下端を地中に埋没させるように作られていたため、成形時の痕跡が留められていたのである。鎌倉時代の石造物にみえる矢穴は、これまで弘長2年（1262）銘の京都府東小阿弥陀石仏

にみえるものが最古とされていたが（森岡・藤川2008）、額安寺塔の矢穴はそれを超ることとなつた。矢穴については、森岡秀人氏の詳細なご論考（本章3項）を参照されたいが、中村博司氏は、矢による石材加工技術こそが、伊派が中国よりもたらした技術であるとみている（中村2003）。実際、中国・南宋代の石造物にも矢穴がみられることが明らかになってきており（佐藤2009）、宋人石工が有していた矢を用いて石材を割る技術が、鎌倉時代前期には日本にもたらされていた可能性は極めて高くなつたといえるだろう。

大藏派の出自については、山川均氏が伊派から分派したとみる説を提出されているが（山川2008）、大藏銘のある額安寺塔に矢穴が確認されたことは、少なくとも大藏派が矢を用いて硬質石材を割るという大陸系の技術を有していたことを示している。大藏派が造立した関東の石造物の特徴は、立体的で鋭い細部加工と写実的な表現、そしてバランスの良さにあるといえる。大藏派が有していた技術は、おそらく矢を使うということのみではないように思われるが、今回の調査はその一端を窺うことができるものであったといえよう。

#### (5)おわりに

以上、額安寺塔を造立した大藏派とその活動、そして額安寺塔調査の成果についてみてきた。大藏派は、大和から関東へと下向し活躍したことが知られる当代一流の大工であり、額安寺塔は大藏銘最古の塔であるとともに、大藏派が大和の石工であったことを具体的に示す唯一の遺品である。大藏派宝篋印塔の多くは、その造塔技術の高さと有銘であることから、国の重要文化財に指定されている。しかしながら、額安寺塔は長らく倒壊していたためか、現在でも大和郡山市指定文化財となっているのみである。

今回の修理工事の結果、明星池の中島に置かれていた塔は境内へと移され、破損していた部分も西村石灯呂店のご尽力によって元の形に復すこととなつた。向後、額安寺塔の価値が正しく世間に理解され、大藏派の技術と活動が長らく伝えられることを願って、本稿のまとめにかえたい。

（文責：岡本智子）

1 代表的なものとして、川勝1960、同1974、前田1989・1991などをあげておく。

2 子葉が二重になる單弁。蓮弁の呼称については、斎藤2001による。

3 子葉が二重になる複弁。

4 宝篋印塔銘に「上首根山之勝地灌精進池之靈泉是當六道之國」とある。また、飛鳥井雅有の『春の深山路』には「又この山には地獄とかやもありて、死人常に人に行き会いて、故郷へ言伝てなどする由、あまた記せり。」とある。

5 五輪塔銘に「右志者為地蔵講結縁衆等平等利益也。」とある。

6 落合義明氏は、こうした律僧による活動は石造物群の遺賞にとどまるものではなく、さらに箱根権現の再建、湯本宿・芦川宿などの整備といった事業とも一連のものであり、幕府関係者も関与した大々的なものであったとされている（落合2005）。

7 東栄寺の位置については、落合義明氏が女養院のあたりと経師ヶ谷の2か所を想定しているが、いずれにせよ女養院の前身となる寺院には北京律系の僧侶が関わっていたとされている（落合2007）。

## 2. 大和の宝篋印塔に関する基礎的整理－鎌倉～南北朝期の様相－

### はじめに

本書で報告する額安寺宝篋印塔は、中世大和のみならず我が国石造文化史に重要な位置を占める遺物である。その概要および歴史的位置付けについては報文および他執筆者による考察において、余すところなく述べられている。本稿では額安寺宝篋印塔を含めた、鎌倉～南北朝期における大和の宝篋印塔のありようを整理、その動態についての基礎的整理を試み、大和の中世社会を石造物から考えるための基礎研究としたい。

#### (1)基礎資料

京都・大和は石造物の中心地とも考えられている。しかしながら、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔はそう多くはない。まず、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔を表1・2にまとめた。年代決定の根拠は記年銘資料および記年銘資料との類似性、先行研究（川勝1966.1978、清水1984ほか）により抽出したもので、多少の不安定要素も含んでいる。おおむね残欠も含め63例を抽出した。この他、先行研究がない残欠で年代決定に不安のあるものや、県外出品などは抽出していない。

宝篋印塔の分布は図1のとおり、奈良盆地内、生駒谷、東山中、吉野方面とほぼ満遍なく分布しているが、奈良盆地東南部・葛城山麓には空白が見られる。

#### (2)宝篋印塔の諸属性

大和における宝篋印塔の特徴としては、これまでにも基礎素面のものが多い点などが指摘されてきた（清水1984）。岡本智子は西日本の宝篋印塔を分類、その展開を考察する中で、大和においては「基礎が無地で高く、笠の高さに対して隅飾が低い」もの（氏のEタイプ）が主流で、生駒市奥山往生院塔がその最古のものであると指摘した（岡本2006）。岡本の指摘はそれまで漠然と述べられてきた宝篋印塔の地域性を、考古学的に型式分類した点で画期的なものであったが、無記年銘資料や残欠を対象に含めると、大和国内においても様々なバリエーションがあり、これらを視野においたより詳細な類型設定が求められよう。本章以下ではこうした現状をもとに、下記の視点から類型の再設定を行い、あわせて分布傾向を確認する。

#### 隅飾の形状による分類

宝篋印塔の型式分類に、隅飾の形態分類が有効である点は、これまでにも指摘されている通りであり、先行研究では主に笠の高さに対するその比率に注目してきた（田岡1960、岡本2006）。しかし実資料の観察において「隅飾の大きさ」という要素を数値化するには、笠の幅に対する隅飾の幅も加味せねばならない。そこで、「隅飾の高さ÷隅飾基底幅」（高さ指数と呼称）を縦軸に、笠幅に対する隅飾の占有率（隅飾占有率と呼称）を横軸に設定し、計測できた39基の法量分布を示した（図2・3）<sup>1</sup>。これを見ると隅飾の形態は大きく3群に分かれることがわかる。

1群は高さ指数が1.4～1.6で、隅飾占有率が30～50%を占めるものである。

2群は高さ指数が1～1.3で、隅飾占有率が50%以下のものである。奈良市正暦寺塔5（14）、奈良市南明寺塔（16）は30%前後と著しく小さい<sup>2</sup>。こうしたものについては、今後別類型で扱える必要があると考えるが、資料数の少ない現段階では、とりあえずの措置として2群に編入しておく。

番号	所在地	西暦	銘文	石材	備考
1	奈良市鳴川町 醍醐寺1			花崗岩	藤原豊成塔
2	奈良市鳴川町 醍醐寺2			花崗岩	藤原豊成塔の部材
3	奈良市御薙屋町 小塔院			花崗岩	
4	奈良市川上町 三笠塗園1			花崗岩	4と組み合う?
5	奈良市川上町 三笠塗園2			花崗岩	3段笠下と軒の部分
6	奈良市川上町 三笠塗園3			花崗岩	5と組み合う?
7	奈良市川上町 三笠塗園4			花崗岩	1と組み合う?
8	奈良市川上町 三笠塗園5			花崗岩	3と組み合う?
9	奈良市二名町 桟振神社			花崗岩	塔身のみ
10	奈良市五条町 唐招提寺	1263?		花崗岩	開山塔
11	奈良市菩提山町 正應寺1 (中央塔)			花崗岩	基礎および腰盤2区格陥没
12	奈良市菩提山町 正應寺2 (東塔)			花崗岩	台座3区格陥没
13	奈良市菩提山町 正應寺3 (西塔)			花崗岩	台座3区格陥没
14	奈良市菩提山町 正應寺5 (廊柱)			花崗岩	第の部材のみ
15	奈良市坂道町 神宮寺			花崗岩	
16	奈良市阪原町南出 南明寺			花崗岩	基礎面積は地上露出部分で算出
17	奈良市長谷町 日吉神社			花崗岩	
18	山形村春日 不動院	1317	文保元丁巳二月日/願主親等等求/合力比 丘宣信/沙弥道教	花崗岩	岡本広義氏針測値を使用
19	山形村大富 大燈籠地			花崗岩	相輪に水煙
20	奈良市小倉町 道の山	1360	(願)明神 石塔也 小鹿庄 道文五庚子	花崗岩	腰盤2区格陥没
21	奈良市坂井村廣生 齋寺			花崗岩	
22	奈良市螢火路町 奈良国立博物館			花崗岩	福澤邦夫氏針測値を使用
23	奈良市魚屋町 基本大学生寮			花崗岩	
24	生駒市勝示町 西方寺			花崗岩	
25	生駒市猪口町河南条			花崗岩	「如法經」の銘文、納入孔あり
26	生駒市有里町 円福寺北塔	1293	右志者/為自他滅滅/生勝往生利/七世 因是法界衆生/平等利益/造立如併/永仁 元年壬辰十二月十六日/元祖口於□□□ □沙弥/□□□口尼淨阿弥陀佛/近真口	花崗岩	
27	生駒市有里町 四幡寺南塔			花崗岩	
28	生駒市萩原町 興山院生院	1259	南無口口/蓮華/牙密仏/駿追入滅/一八千 百/六十七年/正光元年/十月日/駿追口口 □□	花崗岩	
29	大和郡山市城内町 郡山城	1298	右志者界衆生普度佛/永仁六年戊午七月 十三日/駿達聖仙臺/大施主一課入滅/大 工権安政	花崗岩	
30	大和郡山市城内町 郡山城天守台1			花崗岩	段形のみ存在
31	大和郡山市城内町 郡山城天守台2			花崗岩	段形のみ存在
32	大和郡山市綾田町 綾安寺	1260	文応元年/十月十五日/願主永弘/大工大 藏/元清	花崗岩	岡本広義氏針測値を使用。塔身行方 不明
33	天理市上町 土塹山東塔			花崗岩	現在基礎のみ
34	天理市上町 土塹山西塔			凝灰岩	塔身行方不明
35	天理市袖之内町木室 神淵池畔			花崗岩	岡本広義氏針測値を使用
36	天理市福集町 三十八柱神社			花崗岩	繩張一石で成形
37	天理市柳本町 長岳寺大師堂東			花崗岩	岡本広義氏針測値を使用
38	天理市柳本町 長岳寺境内1			花崗岩	塔身別個体
39	天理市柳本町 長岳寺境内2			花崗岩	塔身と基礎のみ
40	天理市柳本町 長岳寺墓地1			花崗岩	基礎と台座のみ
41	天理市柳本町 長岳寺墓地2			花崗岩	笠のみ
42	天理市柳本町 長岳寺墓地3			花崗岩	塔身別個体。
43	田原本町龍堂 沙羅室			花崗岩	
44	田原本町菟王寺 運休寺			花崗岩	笠のみ。針測値は横田・三木1990よ り
45	桜井市初瀬 長谷寺			花崗岩	対向孔蓋文の基礎のみ
46	桜井市上之宮			花崗岩	

表1 大和における鎌倉～南北朝期の宝鏡印塔（1）

番号	所在地	西暦	銘文	石材	備考
47	榎井西向音羽 繩音寺			花崗岩 御陵造	御陵上端欠損
48	福原山高木町百畠内 安養寺			花崗岩	縫合まで一石で造り出す。実見できず。
49	明日香村阿闍利 寺寺	1260	電光寺/知法延聖納/延文五年十一月廿日 (二行判読不能)	花崗岩	奉納孔あり
50	明日香村上原 上宮寺1			花崗岩	
51	明日香村上原 上宮寺2			花崗岩	塔身直隸
52	明日香村上原 上宮寺3			花崗岩	塔身直隸
53	明日香村冬野 墓神社	1298	妙金寺 東仁六成供 達延造/或重願 御法塔 正月日曜立	花崗岩	組添丸氏計測値を使用
54	高取町上小島網所 繩音院	1363	弘長參拜文/勤洛僧法心/二月廿三日	花崗岩	遺墳・区格換開、火穴あり。笠上は 2段→3段
55	高取町春阪 奉仏寺			花崗岩	
56	王寺町木町二丁目 達磨寺			花崗岩	本堂基壇内石室より出土
57	広陵町広瀬中条 与樂寺			花崗岩	
58	広陵町東葉尾 教行寺			花崗岩	笠のみ
59	宇陀市楠原町赤瀬 幸福寺			花崗岩	
60	宇陀市南条村 東生寺			花崗岩 御陵造	組北高麗河源
61	吉野町山口 黒崎寺	1278	父母願共/往生安樂/建治四年/願主口口	花崗岩 御陵造	笠と基礎のみ
62	吉野町 お子田			花崗岩	伝承上興光の墓
63	十津川村折立 墓の森の塔				9基の宝篋印塔

表2 大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔（2）

3群は、高さ指標に関して見ると2群とほぼ同じであるが、隅飾占有率が50～65%前後を占めるものである。

王寺町達磨寺塔（56）は本堂基壇内石室から出土した含利奉納用の塔である（図4）（王寺町教育委員会ほか2005）。全ての領域から外れるが、これは奉納用の特殊品として今回の検討からは外したい。

#### 隅飾の輪郭

隅飾には輪郭巻のものと、素面のものがある。これらも隅飾グループと相関関係を持つことから、類型の属性とした。これに對し、弧数は隅飾形状と相関関係がなく、また分布にも大きな傾向が見られないことから扱わない。

#### 石材の構成

通常大和の宝篋印塔は相輪と笠、塔身、基礎をそれぞれ一石で成形することを基本とするが、笠上下と基礎上をそれぞれ別石で造り出すものがある（本書の主題である大和郡山市額安寺塔が典型例）。こうした別石造りの物の中には笠上を軒上面もしくは数段目を分割し別石にするものと、軒下面で段形を別石にするものがある。また、上宮寺塔2（51）のように笠は一石で成形するが、基礎上面のみ別石で成形するものがある。

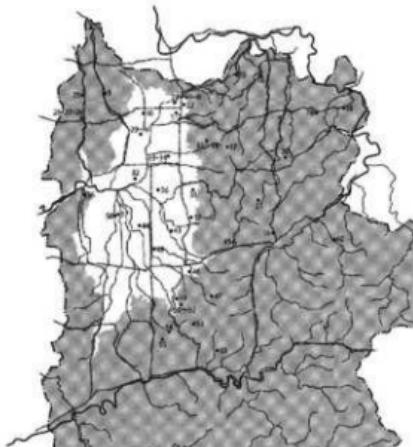


図1 宝篋印塔の分布

高さ指数(高さ÷基礎幅)

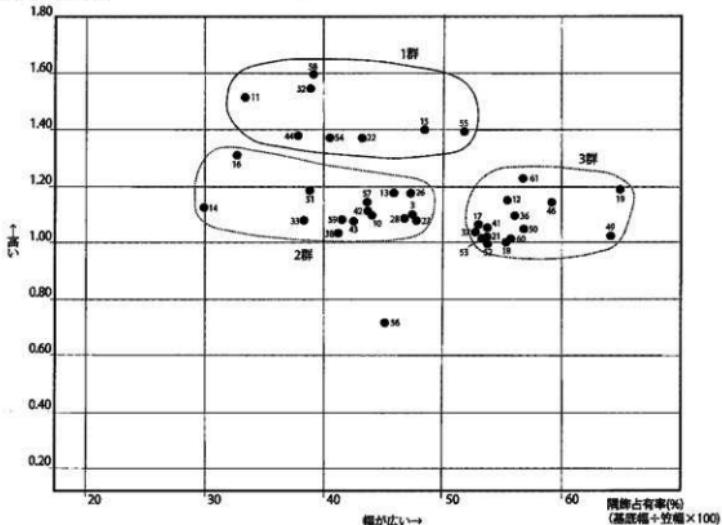


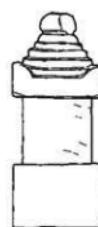
図2 開脚法量分布



図3 開脚の分類(笠幅を合わせて任意倍)

### 基礎形態

先述の通り、研究史上大和の宝篋印塔は基礎が高いことを特長とされてきた。そこで、基礎側面の縦横比を算出し、幅に対する高さの比率（基礎高さ比率と呼ぶ）が50%以下のものを1群、50～60%のものを2群、60パーセント以上のものを3群とした。ちなみに、大和の宝篋印塔基礎のもう一つの要素である基礎側面の加飾の有無については、8例に加飾が認められたほか、山中に若干多いものの奈良盆地内にも生駒地域にも認められ、その有無に特定の傾向を見出せなかった。

図4 王寺町達磨寺塔  
(S:1/20) [報文よりトレース]

### (3)分類(表3)

上記属性に注目し、大和の宝篋印塔を3類7小類に分類する。

#### 1類

1.A類 開脚1群で、笠上若しくは笠下の段形を複数石で製作するもの。高取町塗阪寺塔(55)

分類	番号	名称	西暦	笠		基礎	隅飾			基盤 寸法
				別石造り	段別石		輪郭有	表面	分類	
1-A類 (隅飾1群で 笠を複数有 て製作)	15	奈良市 神宮寺		●	●		●	●	1	1
	32	大和郡山市 鶴安寺	1260	●	●		●	●	1	1
	11	奈良市 正應寺1(中央塔)		●	●		●	●	1	1
	22	奈良市 奈良國立博物館		●	●		●	●	1	1
	54	高取町 観音院		●	●		●	●	1	2
	55	高取町 宝福寺	1263	●	●	●	●	●	1	
1-B類 (隅飾1群で 笠・石造り)	44	田原本町 蓬体寺			?		●	●	1	
	58	広陵町 教行寺			?		●	●	1	
2-A類 (隅飾2群で 笠・基礎を 複数石で製 作)	10	奈良市 唐招提寺	1263?	●	●		●	●	2	1
	51	明日香村 上宮寺2			●		●	●	2	1
2-B類 (隅飾2群で 笠一石で製 作、隅飾り に輪郭無)	33	天理市 玉臺山東塔					●	●	2	1
	27	生駒市 円福寺南塔					●	●	2	1
	26	生駒市 円福寺北塔	1293				●	●	3	2
	38	天理市 技法寺境内1					●	●	2	2
	28	生駒市 舟山往生院	1259				●	●	2	2
	57	広陵町 与来寺					●	●	2	2
	43	田原本町 淨福寺					●	●	2	2
	42	天理市 長岳寺墓地3					●	●	2	3
	59	宇陀市 千福寺					●	●	2	3
	14	奈良市 正應寺5(部材)					●	●	2	1
	16	奈良市 南明寺					●?	●	2	1
	3	奈良市 小塔院					●	●	2	3
	13	奈良市 正應寺3(西塔)					●	●	2	3
	47	桜井市 観音寺					●	●	2?	2
	61	吉野町 藤原寺	1278				●	●	3	2
	53	明日香村 燐神社	1298				●	●	3	3
3-A類 (隅飾3群で 笠一名で製 作、隅飾り に輪郭無)	19	山添村 大坂墓地					●	●	3	3
	36	天理市 三十八柱神社					●	●	3	3
	41	天理市 長岳寺墓地2					●	●	3	2
	21	奈良市 青龍寺					●	●	3	2
	46	桜井市 上之宮					●	●	3	2
	17	奈良市 日吉神社					●	●	3	2
	37	天理市 長岳寺大師堂東1					●	●	3	3
	49	明日香村 国寺	1360				●	●	3	3
	60	宇陀市 家生寺					●	●	3	3
	12	奈良市 正應寺2(東塔)					●	●	3	3
	50	明日香村 上宮寺1					●	●	3	3
	18	山添村 不動院	1317				●	●	3	3
	52	明日香村 上宮寺3					●	●	3	3

表3 宝鏡印塔の分類

以外は全て笠幅70cm以上の大型塔で、隅飾に輪郭は持たない。基礎は高取町観音院塔(54)以外1群である。

1-B類 隅飾1群で、笠上若しくは笠下の段形を一石で製作するもの。大きさは様々である。隅飾に輪郭は持たない。笠のみの資料のため、基礎上が一石であるか複数材であるかは詳らかでない。

## 2類

2-A類 隅飾2群で笠上下もしくは基礎上段形を別石で製作するもの。隅飾に輪郭は持たない。基礎は1群である。

2-B類 隅飾2群で笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作する。隅飾に輪郭は持たない。基礎は1~3群各種が存在する。

2-C類 2-B類と同じ属性を持つが、隅飾輪郭巻である点が異なる。また基礎は3群である。

### 3類

3-A類 隅飾3群で笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作する。隅飾は輪郭を持たない。基礎は吉野町山口藥師寺(61)を除き3群である。

3-B類 3-A類と同じ属性を持つが、隅飾輪郭巻である点が異なる。基礎は3群を主体とし、これに2群が混じる。

#### {4}各分類の年代と分布

##### 1類

1-A類宝篋印塔は部材の分割方法などにバリエーションはあるものの、隅飾形態、分割製作技法、基礎法量などに強いまとまりが見られる。有記年銘資料は大和郡山市額安寺塔(32)・高取町觀音院塔(54)ともに1260年代前半のものであり、1260年代を前後する、大和における出現期の宝篋印塔群と考える。笠が一石製作になる1-B類は1-A類に後出する可能性がある。田原本町蓮休寺塔(44)は露盤2区格狭間入りで、笠上は5段と少ないが、軒下3段であり、全体として額安寺塔と同じ設計とみなせ、大蔵派の関与が疑われる(濱田・三木1990)。これを是とした場合、本塔の年代は大蔵派が関東へ移動した最初の資料である箱根山宝篋印塔(永仁4年[1296])以前のものと考えられよう。

1-A類の分布は、高取町觀音院塔、壺阪寺塔を除くとほぼ奈良盆地北部に限定できる(図5)。これに本来1-A類宝篋印塔を構成していた可能性が高い段形部材の分布を加えると<sup>3</sup>、奈良盆地北部の偏在性がさらに明瞭となる。その所在地は、本来の位置が不明確な奈良国立博物館塔(22)を除外しても南都諸寺院との関係の深い場所に所在するといえる<sup>4</sup>。

ところで、ここで問題となるのが高取町壺阪寺塔(55)(図6)である。本塔について、川勝政太郎はこれを鎌倉時代中期と位置付け、笠下3段的方式が神奈川県箱根山宝篋印塔に見られることから、大蔵安氏が「この地方の手法を関東へ持って行ったことが考えられる」とする(川勝1966)。三木治子はこれをさらに発展させ、別石反花座に注目し、壺阪寺塔が大蔵派最古の遺品と考える(三木1986)。これに対して、古川久雄は、壺阪寺塔が大和に例を見ないタイプのものであることと、同塔が京都に存在する隅飾3弧、輪郭付、基礎上別石反花座などの特徴を持つ、京都の宝篋印塔(古川の設定する「誠心院型」宝篋印塔)に類似することから、壺阪寺塔も誠心院型宝篋印塔の一種であるとしたうえで、その年代観を、京都における誠心院型宝篋印塔に若干先行する13世紀末から14世紀初頭と考えた(古川2001)。壺阪寺塔隅飾は別石造3弧輪郭巻で法量1群の形態を持つが、この形態は別石造という手

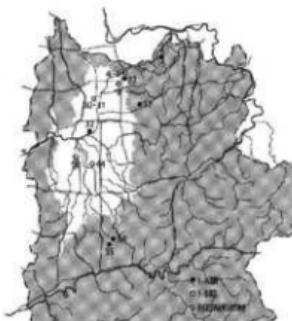


図5 1類宝篋印塔の分布



図6 高取町壺阪寺塔

法ともども大和に類例がない。さらに、基礎上に反花を置くことは奈良国立博物館塔、高取町觀音院塔や生駒市円福寺南塔（27）などにも見られるが、高さが高く、垂れ下るような形態の反花は類例がない上に、弁尖が四隅に配される形態もほとんど類例をみない。そして、何よりも壇阪寺塔の諸属性が、一つとしてその後の大和の宝鏡印塔に引き継がれていない。このことから、筆者は古川の指摘するように、壇阪寺塔は京都からの搬入、もしくは京都系石工の出作であると考える。

## 2類

2-A類は、1類の亞種という位置付けを行うべきかもしれないが、隅飾形状を重視する今回の区分上は2類に編入しておく。2-A類の代表である奈良市唐招提寺塔（10）は隅飾の形態以外は1-A類と同じ要素を有し、軒直上で分割する方法は1-A類である奈良市須川神宮寺塔や奈良国立博物館塔（図7）と同じである。笠幅も基礎側面面積もこれらの塔は酷似し、同じ工人によるものではないかとさえ思わせる。桃崎祐輔は唐招提寺塔について、唐招提寺開山鑑真和上（763年没）の五百回忌塔ではないかと考えるが（桃崎2000）、筆者も賛同したい。これに対し、明日香村上宮塔2（51）は笠を一石で製作し、基礎上段形のみ別石製作することから、1-B類と同様の時期のものと考える。

2-B類は、有記年銘資料では1259年銘の生駒市奥山往生院塔（28）、1293年銘生駒市円福寺北塔（26）があり、かなりの時期幅を持つ。今後細分の余地があろう。

2-C類は有記年銘最古の資料が、弘安10年（1287）の京都府相楽郡和束町湯船熊野神社跡塔である<sup>5</sup>。湯船塔は基礎2群であり、2-C類の中でも古いものである可能性を考えられることから、2-C類の年代を13世紀第4四半期以降としておきたい。

2類の分布を見ると、宇陀市千福寺塔（59）を除くと、奈良盆地およびその縁辺に集中する（図8）。奈良市南明寺（16）は神宮寺同様南都の別所的存在であり、影響圏内と言える。

## 3群

3-A類は、現在残存する最古の資料が吉野町山口薬師寺塔（1278年）（図9）となる。ただ、山口薬師寺塔は、これに続くものが明日香村畠神社塔（53:1298年）となり、年代的にかなり開きがある。また、山口薬師寺塔は今回の分析方法では3類に当たるが、笠上端を屋根形にする点や、同時期の大和の宝鏡印塔が大型塔で占められるのに対し小型塔であるなど違和感が多く、現段階では3-A類の初現という評価は保留したい<sup>6</sup>。3-A類の年代については、2-C類と同じ13世紀末～14世紀前半頃を想定したい。

3-B類の有記年銘資料は山添村不動院塔（18:1317年）が最古である。本塔は基礎が3群であり、これに対し2群基礎を持つグループがあることから、その出現は若干遅れる可能性が考えられる。いざれにしても14世紀代のものと言えよう。

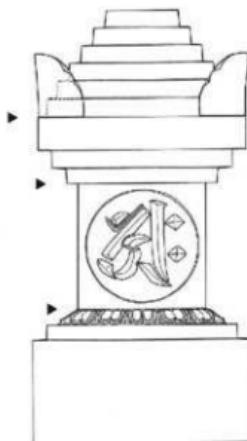


図7 奈良国立博物館塔 [◀で分割 (S:1/20) (岡本広義氏原画を筆者トレース)]

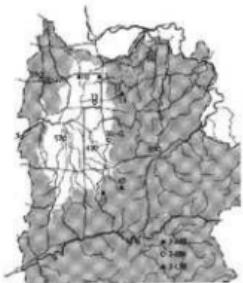


図8 2類宝鏡印塔の分布

3類の分布はそれまでの1・2類とは大きく異なり、東山中を中心とする（図10）。つまり3類は大和において客体的存在であると言えよう。

#### (5) 大和における宝篋印塔の展開

以上、大和における宝篋印塔の分類とその年代、分布を概観した。その成果を纏めると、大和においては主に1260年代を中心とした時期に1類宝篋印塔が作られる。その分布は主に大和北部、とりわけ南都の強い影響下で出現すると考えられる。また、同時期に2類宝篋印塔も出現する。1類宝篋印塔はその後広く展開することなく、1290年代後半までには廃れてしまい、2類宝篋印塔が奈良盆地全域に展開する事になる。つまり、大和の宝篋印塔のスタンダードは生駒市興山往生院塔（図11）を嚆矢とする2群宝篋印塔ということになる。ところで、興山往生院塔は笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作し、隅飾は小さく素面、基礎は高いという、同時期の1群宝篋印塔とは形態も成形方法も大きく異なった、革新的なデザインで出現する。これまで当該期の革新的デザインとしては大藏安清による大和郡山市額安寺塔が評価されてきたが、額安寺宝篋印塔は全体の形状及び石材の組み方では従来の大和の規範を維持しており、デザイン面で革新的であった。これに対し、興山往生院塔はデザインだけでなく石材の組み方でも革新的であり、大藏安清に勝るとも劣らない革新性を持った塔と言える。さらに、額安寺塔が忍性配下で関東のスタンダードを作り上げる事になったのに対し、興山往生院塔は大和に残り、大和のスタンダードをつくってゆくことも注意が必要である<sup>7</sup>。

さて、13世紀後半になると隅飾大ぶりな3類宝篋印塔が出現する。これは東山中を中心に分布し、その後隅飾輪郭巻を持つ3-B類が同じ地域に展開してゆく。この隅飾輪郭巻という要素は、先にも述べたとおり京都府と東町湯船熊野神社跡宝篋印塔（1287年）を最古とする。ところで、この塔のすぐ横には基礎と笠の残骸が存在し、そこには石工として「行長」の銘がある。この行長は長野県飯田市文永寺五輪塔および石屋形を製作した「菅原行長」と同一人物とみなせ、この基礎と同じ石材で作られる笠石の隅飾には輪郭巻がみられる。このことから、隅飾輪郭巻という要素が、13世紀後半の南都石工にも採用されていたことは確実である。しかしながら、南都においては奈良の中心地である奈良市小塔院塔（3:2-C類）にすでに採用されるものの、南都や奈良盆地に広まった様子はなく、鎌倉～南北朝期を通して客体的存在である<sup>8</sup>。むしろこの要素は近江地域で積極的に展開し、古くは正応4年（1291）銘を持つ滋賀県八日市市正壽寺塔にすでにみられる。この塔は隅飾占有率が61%、高さ指數が1.21と、3群の形態を持つ。近江地域の宝篋印塔はほとんどが隅飾占有率60～70%と、3群、いわゆる「大ぶりな隅飾」を持ち、輪郭巻である。こうした近江系の要素は伊賀地域へも波及しており<sup>9</sup>、大和において3類が東山中を中心に分布し、隅飾輪郭巻もまた同様の分布を示すことは、13世紀末～14世紀に大和東山中で宝篋印塔造立が開始された際に、主に伊賀地域からこれら



図9 吉野町萊師寺塔

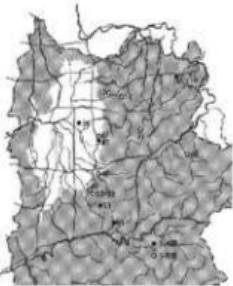


図10 3類宝篋印塔の分布

の要素が波及したことを示すと言えよう。

おわりに

以上、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔の様相について概観した。本稿では、1260年代前後に大和で宝篋印塔の造立が始まり、当初は隅飾が高く、基礎および笠を複数部材で構成する1類塔と、隅飾が素面で小さく、基礎の高い2類塔が並存、13世紀後半までに2類塔が独占するようになり。これが大和を代表する宝篋印塔であることを明らかにした。さらにその嚆矢となる奥山往生院塔の重要性にも触れた。また、隅飾の大きい3類宝篋印塔が、大和では13世紀末～14世紀にかけて、主に伊賀地方からの影響で東山中を中心として展開することを確認した。

この他にも語り残したことは多い。例えば從来大藏派の特徴とされてきた、露盤の2区格狭間が都祁村青竜寺塔（21）にみられ、塔身の二重輪郭巻も宇陀市室生寺塔（60）に見られるなど（図12）、大藏派の記憶とも言うべきものが、3類宝篋印塔の中に散在していることも今後注意が必要である。また3類と伊賀・近江との関係に関連して、奈良正暦寺塔2（12）の隅飾に、壇阪寺塔を除くと大和では唯一ともいえる月輪による加飾が見られること（図13）なども検討の余地がある。

さらに、奈良市正暦寺や、天理市長岳寺などに複数類型の宝篋印塔が見られる。これらの寺院はいずれも中世興福寺と深いかかわりのあった寺院で、また、修驗とのかかわりの深い寺院でもあった（追塩1995）。すでに山川均が指摘するように（山川2008）、宝篋印塔と修驗に何らかの関係が見出せるとすると、こうした地に多種多様な宝篋印塔が造立される背景もまたそうした広域に移動する宗教者の介在を考えることができるかもしれない。再度検討を試みたい。

最後に感想だが、今回の検討に際して各地の宝篋印塔を調査したところ、「盗まれた」ものが複数あった。路傍の石塔とはいえ、貴重な文化財であり、大切な信仰対象である。これらの管理を強めることもその対処法ではあるが、管理を強めるとモノが市民から離れていってしまう。地域の方々に文化財としての石塔、その重要性・歴史性を知ってもらい、地域で保護・管理していただくこともまた重要なのではないだろうか。

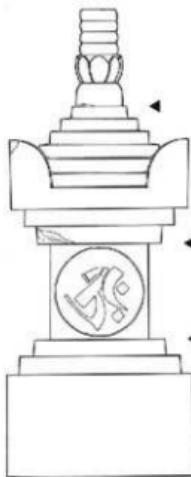


図11 生駒市興山往生院塔〔◀で分冊  
S:1/30 銘文略〕(福澤邦氏原画を筆者トレース)



図12 宇陀市室生寺塔



図13 奈良市正暦寺塔2

(文責：佐藤垂型)

- <sup>1</sup> できるだけ現物の確認・計測を行う事を心がけた。ただし、橿原市安楽寺塔（48）は調査できず、山添村塙の山塔（20）、生駒市南条塔（25）、奈良市某美大学生寮塔（23）はそれぞれ分析に耐えうる資料のはずであったが、位置を確認できなかつた。また、天理市神橋池畔塔（35）は盗難により現物を確認できなかつた。その他、広陵町与樂寺塔（57）、奈良國立博物館塔（22）、天理市王墓山東西塔（33・34）など立地上調査ができなかつた塔については、現地にて確認の後、文献等より数値をいただいた。
- <sup>2</sup> このほか、三重県伊賀市阿山町穴石神社前に隅脚占有率34%、高さ比率1.3のものがあり、このタイプのものは今後資料数が増加することが予想される。
- <sup>3</sup> 奈良市三笠蓋園塔（4～8）は3基分の宝蓋印塔部材と考えられ、そのうち（8）は奈良市唐招提寺塔や奈良市須川神宮寺塔・奈良國立博物館塔と同じく軒直上で分割し、笠下3段にするものと考えられる。これらの石塔が所在する三笠蓋園は伴寺と呼ばれる寺院の推定地であり、本来伴基と呼ばれる東大寺系僧侶の墓地であったと考えられる。ちなみに本部材のすぐ横には、もともと便乗室の隣にあった、重源の墓として著名な三角五輪塔が存在する。また、大和郡山市郡山城天守台には2基分と思われる部材が存在するが（30・31）、多聞院日記天正十六年（1588）正月廿五日条には郡山城の改築に際し、おびただしい量の石材が奈良から搬入されたとあり、本部材も奈良からの搬入が考えられる。なお、天守閣以外に柳沢文庫蔵にも段形部材が存在するようだが（南村1975）、調査が及ばなかったため一覧に記載していない。
- <sup>4</sup> 大和北東部の山中にも、奈良市須川神宮寺塔（15）などが見られる。神宮寺塔は本来須川薬師（廃寺）に所在したものであるが（『奈良市史』（社寺編））須川は奈良から笠置に抜ける重要なルートに面している。奈良時代以降巡峯道場として鹿野園、蟹多林、大慈山、忍辱山、若荷などが設けられており、この地域から解脫上人貞慶で著名な笠置寺、小田原別所の存在した岩船寺・淨瑠璃寺付近などにかけての範囲は、南部の別所群が散在する、興福寺の強い影響下に置かれていた地域であった。
- <sup>5</sup> 湯船熊野神社跡塔は隅脚基底幅占有率が46%、高さ指數が1.26、基礎高さ比率は0.557である。
- <sup>6</sup> 吉野町山口崇禪寺塔は笠上最上段を小さく屋根形に作り出す。この形態は天理市王墓山東西塔、同市長岳寺墓地塔2（41）に類似があり、これらを別のグループに纏めるべきかもしれない。検討の余地を残しておきたい。
- <sup>7</sup> 山川均は生駒地域における律宗とりわけ忍性の活動を重視し、当該地域で後に伊行氏が活動することから、生駒市奥山往生院塔の作者を伊行吉と考える（山川2006）。大藏派に對應できるスタンダードを築く石工としては、やはり筆者も伊派の可能性を考えたい。
- <sup>8</sup> この点について、山川均氏は行長が伊派に連なるものであるが、傍流であったため「菅原」を名乗ったと考える（山川2008）。輪郭巻が大和へ進出できない理由もこの辺りにあったのであろうか。
- <sup>9</sup>もちろん伊賀地域は伊派石工路の石造物が複数あり、註2に述べたように2-B 頂宝蓋印塔も確認でき、本来大和石工の勢力圏である。しかし、悉皆的に調査していないものの、数量的には隅脚輪郭巻の2-C類（例、伊賀市西光寺塔・若王子跡など）、3-B類（例、伊賀市穴石神社塔（1359年）、同市松栄寺塔など）が卓越していると考えられる。大和系石工が近江地域の強い影響下、独自の地域色を生み出していたと考えられる。

### 3. 矢穴調査報告

#### (1)緒言

日本の石材加工史、工芸史において、矢穴を彫って矢とゲンノウの使用により石材を切り出すことは、当時にあっては画期的な技術革新であり、造り出される対象物にも大きな影響と要請をもたらしたと考えられる。矢穴は考案の初期段階を中心に単発に穿たれることもあったと推測されるが、基本は直線的で連続的な矢穴列を形成して石材ができる限り真っ直ぐに切断し、切石という存在形態で対象物に適合する母材の獲得を可能とした。硬質石材の規格的利用や巨石利用、作業速度などの面において、著しい進化を招くとともに、それらの合成功がひいては新しい建造物の発達を促すことにつながった。この点、矢穴自体はきわめて単純かつ簡素なものであり、その変化を含めこれまでその基礎的研究が等閑視されてきた向きがあるが、筆者らは40年近く前から、元和・寛永年間再築の徳川大坂城の石垣採石場の調査において早くからそれらに接し、その重要性に気づき、型式分類や属性研究などを進め、一定の成果を導くとともに、近年ではその日本列島での起源論や東アジアにおける技術史的な流れ、影響関係にも関心を寄せてきた。

このたび、奈良県大和郡市教育委員会から年紀を有する額安寺宝蓋印塔で新たに発見された矢穴列痕の専門調査の依頼を同市教育委員会生涯学習課の山川均氏から受け、要請に応えた両名で実施したので、ここにその詳細を事実報告するとともに、矢穴の基礎概説、その変遷史における型式学的位置、矢穴の発現問題やその後の展開過程など、関連資料や未発表資料を提示しつつ、関係すべきことの概略を論じ、本例が現状において日本最古の矢穴例となる重要性を進捗しつつある石割技術研究の面でも明らかにしておきたい。

#### (2)矢穴を理解するにあたって

石材切断具である矢を挿入するために石面に彫成された穴を「矢穴」と称している。基本的にはノミを用いて彫られた変哲ない穴であるが、石造物や石垣の用石などに整列した矢穴を見つける機会は少なくないし、見慣れてくれば、片鱗のようなものも確認が可能となる。その主たる機能は石材の分割加工にあるが、瘤状隆起を取り去るような石素材面の粗加工にも援用されるなど、派生的な用いられ方は詮索すればいくつもあるようだ。矢穴は各種の鉄製ノミとセットで駆使して短時間で彫り、整形を施す技術が必要となるが、その膨大な検出数からみて、出現期を除けば、多くの石工が日常的に身に着けた技術であり、大量の石材の規格加工を進める上では、むしろ技術の平準化を広く促進させたものと考えている。その前提となる石の目には、さまざまなレベルが存在すると思われる。岩石節理と関連した石の目に則してミシン目のように穿たれることを原則とするが、放置された石材や利用石材にも多くの変則例が散見され、異種の岩石を広く横断する画期的な切断技術であるとともに、岩石の種類による個々の特性もみられる点は看過できない。

矢穴に挿入される道具は、鉄製・木製の矢であって、クサビではない。一見形状の似る矢とクサビは、根本原理からして似て非なるものであり、鋭利な先端部を主用するクサビに対し、矢は胴部に膨らみがあり、先端部ではなく、この部分が矢穴壁長側辺の左右に垂直方向に加わった力を水平方向の衝撃力に変換するかのごとく加えて穴を孕ませるようにして、石の目に逆らわない亀裂を生じさせ、矢穴列上に則った石材分割の切断面の形成に至るのである。その場合、矢の先端は矢穴底からは浮いた形になり、垂直方向の接触を前提とした岩石本体との衝突は起こらない。その結果、矢穴の底を衝撃することなく、左右に加わった力により石が自然に裂けるのである。矢穴掘りから

剖工程のこうした作業全般をとりあえず総称的に「矢穴技法」と名付けておきたい。

### (3) 矢穴の基本構造と部分名称、関連技術

これまでにも基礎的なこととして概説してきたことであるが（森岡・藤川2008b）、矢穴の基本構造とそれまでの部位での名称を先ず整理、提示した上で、報告に入りたい（図1）。なお、各部位の計測は、これまでの慣例にしたがい、ミリメートルのレベルで止めている。

石材の表面部分に当たる矢穴の入口を「矢穴口」、もしくは単純に「矢口」と呼ぶ。矩形をなす場合については、矢穴列方向の長辺（a）とそれに直交する短辺（b）と呼称する。通常、 $a > b$  の関係にあるが、タイプにより  $a = b$  の矢穴も認められる。矩形をなさない矢穴口を有する場合は、長辺・短辺とは呼ばずに、長軸・短軸と言う方が判りやすい。これと関連して、矢穴の長軸方向の対面する二つの矢穴壁を「矢穴長側面」とその左右、矢穴の短軸方向の対面する二つの矢穴壁を「矢穴短側面」、その上下と呼び分ける。両者の形状は、矢穴の型式差や時間差の反映であると捉えており、詳しくは後述する。矢穴の最も奥の部分を「矢穴底」、略して「矢底」と呼ぶ。矢穴底の形態も年代や型式差を表徴するもので、平らであるもの以外に、隅丸状や舟底状をなすものなど、資料の違いによりバラエティーが認められる。完存する矢穴ではむしろ正確な形状を捉えることは難しい。矢穴口面から矢穴底最低点までの距離を「矢穴深度」（c）とする。また、二つの矢穴の矢穴口短辺同士の距離を「矢穴間隔」として認識する。その数値が均質に見える矢穴列も、岩石の種類や硬さ、工程の違い、石の目の実情などさまざまな要因で、矢穴間隔はたえず変動する。計測を怠ってはならない場所であり、（d）値とする。

複数以上の矢穴の組列を「矢穴列」と呼ぶ。原則的には一直線が目指されたものであるが、実情を言えば作業面の形状や石の硬さ、石目などの影響を受け、顕著に横ぶれするものや不揃いのものがみられる。裁断面に残る単独の矢穴の長軸断面形のことを「矢穴痕」あるいは正確を期し、「矢穴縦断痕」と呼ぶ。個別の矢穴の深さや形状、個性、個体差、数値などが最も分かる。ただし、矢穴の中軸で半裁されていない場合は、かなり変形を被るため、その正確な観察には注意が必要である。良好な半裁例は実測図の他に、探査を行って、矢穴壁長側面でのノミ調整や割り取り面の平滑感の情報を得るように努めている。「矢穴横断痕」はこれと直交するもので、実測例は僅少であるが、矢の形態、大きさと関係して、本来はこの断面情報多くの手掛かりを与えてくれる。矢穴列を用いて半裁された両方の破断面对照的に残った連続する複数の矢穴の縦断面痕跡のことを「矢穴列痕」と呼び慣わしている。石切場では、対をなす同一石材の矢穴列痕が放置され、近在するケースもまある。矢穴を彫る箇所を矩形の開み条線として予めノミで彫り整えた計画ラインのことを「矢穴下取り線」と呼称する。矢穴列形成箇所をラインで指示する「矢穴列下取り線」もしばしば確認されるもので、割りたい方向や必要とする長さを定めて作業に入っていることを明かす資料であるが、数的には散見される程度にすぎない。元来は墨書きで十分できた作業段階とみていい。矢穴の四壁・周壁に「ノミ跡」と慣用している細い条痕状の表面調整痕がみられる場合がある。当然、矢穴彫り仕上げの技法と関連する痕跡とみられる。

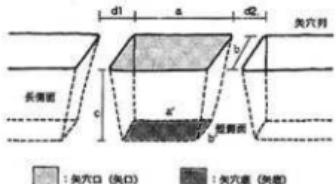


図1 矢穴各部の名称と法量測定基準

なお、矢穴の基本計測は、上記した a～d 値をミリ単位まで記録するが、ケースにより部分計測を補足することがある。これまでに膨大なデータが確保されており、統計的な調査も随時行っている（森岡・坂田2005 b）。

#### (4) 矢穴の型式分類研究史の整理と日本中世の矢穴技法への関心

矢穴の認識的な研究は、既に1960年代の末頃に着手している。その契機をなしたのは兵庫県芦屋市の徳川大阪城東六甲採石場奥山刻印群の調査であるが、それに加えて、大阪府生駒山西麓石切場、京都府赤川石材集石場、瀬戸内海各地の採石場（下津井・櫃石島・六口島・本島・日石島・北木島など）、さらに兵庫県明石城採石場、京都府亀岡市大井町の近世城郭採石場などが多く類例とヒントを与えてくれた。しかし、東六甲では専ら刻印石や刻印自体の調査・研究に取り組みの主眼が向けられ、矢穴の方は、1972年になってその断面痕跡の形態分類から始めた。元和・寛永期（17世紀前半）の矢穴の個々について、垂直彫り（「コ」の字型）と両丸彫り（逆台形型）の初步的な二つの類型設定を試みている（藤川1972）。大陸資料に触れる機会は容易にはおとずれなかったが、紀元前に位置付けられる中国前漢代に遡る矢穴列痕にも早くに気付き、東アジア世界における矢穴技法の伝播については、その頃から関心を寄せるようになった（森岡1978）。この間、古川久雄氏の案内により、奈良県向井坊古墳1号墳の左右側壁矢穴様構造を観察、既に奈良県高取町観音院宝慶印塔（13世紀後半）台座の矢穴痕などの調査を企てたものの、当時は中世・近世の矢穴は概ね同一型式（ほぼ A タイプ）という理解を示していた。

初步的な型式分類は、後述する A・B・C タイプの設定と順次変遷を徳川大阪城関連石材の調査中に見い出し（藤川1979）、模式図を提示して喚起を促したが、当時の反響は大変少なかった。しかし、矢穴石を数多く含む刻印石の調査と保存の上で、芦屋という狭隘な地域では刻印群の中において用語とともに認知されるようになった（森岡編1980）。これらは近世以降の矢穴を対象とした調査・研究であるが、形態を異にする舌状の矢穴（異型式感）に気づいた1986年頃を契機として、1990年代に入ってからは、これらより古い型式を示す中世の矢穴についての着目が新たに加わった。兵庫県宝塚市千刈水源池採石場において確認した A タイプ類似の舟底形矢穴への注意と位置付けをめぐる問題が浮上したからである。これには当初、「A タイプ丸底矢穴痕」とやや暫定的な呼称を与えている（藤川1997）。名称については、A タイプの原型と想定し得ることにより、その後、「古 A タイプ」と呼ぶようになった。また、同タイプの矢穴の類例の蓄積やその資料化を地道に進めた（藤川1998）。その調査では若林泰氏のご教示が大きく、とくに神戸市東灘区・灘区で永禄期石仏に遡る矢穴の存在が衆目を引く。滋賀県・京都府などの石造遺品に残された矢穴痕の調査では、古川氏に加え、兼康保明・鈴木武・福澤邦夫の諸氏のご教示、ご助言が多い。この時の調査により、大和頼安寺例発見以前では日本最古の矢穴痕を有する京都府加茂町東小阿弥陀笠石仏を確認したのであった（図 2-1・2）。

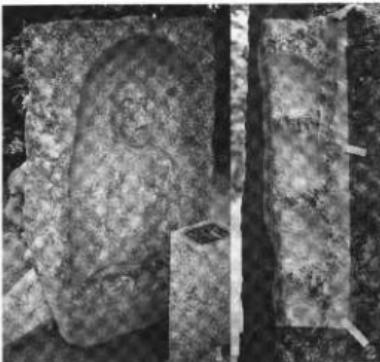


図 2 1. 東小阿弥陀笠石仏〔京都府加茂町〕弘長 2 年  
(1262) 2. 同・背面先 A タイプ矢穴列痕

以上の矢穴の属性分析と帰属石造物などの関係性を考古学的に見究める作業によって、矢穴型式である古A・A・B・Cの4タイプは、Aタイプの細分方法を含めこの順に型式組列をなすのではなく、石材・対象石造物・石工系譜・矢穴彫り技術などの多くの要素が複雑に絡み合って複数系列をなし、その新古、共存関係や呼称を含め、編年的には再度再編すべきことが提言されるようになった（森岡・坂田2005b）。これを受け、再検討を加えた結果、中世石造物に概ね共通する矢穴として「先Aタイプ」を分離独立させ、城郭石垣研究から定着するところとなった旧来のAタイプとは、時期・系譜・技術の諸方面での型式区分としての差違化をより一層明確にした（森岡・藤川2008a）。その後はこの研究動静をあらためて整理し、さらに全国的な研究を発展させる意図から、現時点における矢穴の型式分類研究の流れと到達点を明らかにする試みも公けにした（森岡・藤川2008b）。これと関連して、「古Aタイプ」に関しては、織豊系城郭の石垣以前の中世石垣（寺院・城郭関係中心）にみられる矢穴について限定して呼ぶこととし、その段階の典型資料として、京都市銀閣寺東山殿石垣構成石材矢穴（内田2008）をあげておいた（森岡・藤川2008b）。土器資料からも15世紀末頃に比定し得るこの矢穴は、中世石造物に認められる先Aタイプの新しい部分に併行、ないしは後出するもので、Aタイプの古い属性を併せもつという過渡的な資料として大いに注目した。

筆者らの編年細別や再編の動きと重なるかのように、矢穴の個別研究は近年急速に増えつつある。伊庭功氏による観音寺城の採石地調査と矢穴に関する所見（伊庭2006）、北原治氏による觀音寺型の矢穴技法の提唱（北原2008）、関東地方における矢穴技法の研究も中世資料に遡ってその確認と悉皆収集から始まっている（栗木2007・2009a・2009b）。また、筆者らの調査については、東山殿例前後以降、全国各地から情報が寄せられるようになり、三重県伊賀上野城では、藤堂高虎築城以前の天正13年（1585）を遡る石垣にも古Aタイプの矢穴痕跡を検証する（船2009）など、確信のもてる成果が次々と得られた。芦屋市内では、朝日ヶ丘町芦屋墓園無縁仏や春日町元塚の石仏などから永禄期前後の室町時代の矢穴痕を（図3-1・2）、大阪城の築城史研究会刻印調査においては、江戸時代初期の山里丸石垣中からも同時期前後の転用石仏を見い出し（図3-3・4）、先Aタイプの矢穴の存在は普遍的となりつつある。その典型的な資料との遭遇が日本最古と認定し得る奈良県額安寺宝篋印塔例であり、さら年代的に先行する中国南部浙江省寧波北

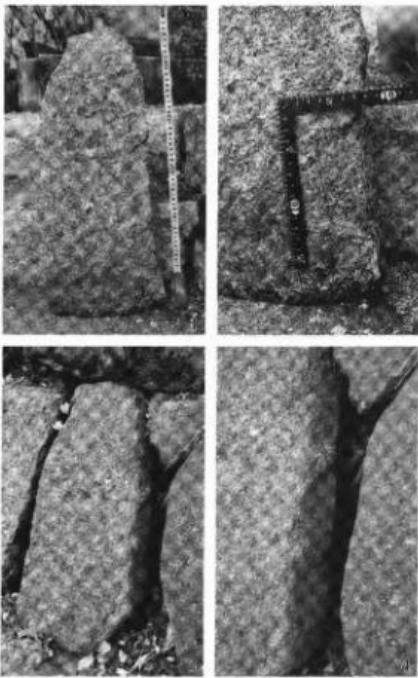


図3 1. 芦屋墓園石仏（阿弥陀如来像）[兵庫県芦屋市朝日ヶ丘町] 2. 同・正面先Aタイプ矢穴列痕 3. 徳川大坂城山里丸石仏未製品転用石 4. 同側面先Aタイプ矢穴列痕

郊の慈城・朱貴祠における寧波プロジェクト科研チームによる南宋代武士石像基礎石に遺存する矢痕の発見と写真鑑定であった（朝日新聞2008年12月13日ほか）。研究の流れから見て、矢穴技法の起源を中国の13世紀前半以前に求めてきた東アジア的な視座の正しさの一端が、鎌倉時代石造物製作の系譜研究者の熱心な調査活動（岡本2006、佐藤2007a、中日石造物研究会編2008、山川2006）ともリンクして、立証の第一歩を踏み始めた意義は計り知れなく大きい。

#### (5)型式分類から見た矢穴の特徴とその変遷

以上の研究史を受けて、目下のところ、矢穴型式の基礎分類について、半島系タイプ・先Aタイプ・古Aタイプ・Aタイプ・Bタイプ・Cタイプ・Dタイプの都合7タイプに区分している。あくまで最初に注目したAタイプの形態属性を基準とした細別案であり、石材は花崗岩を基本とするが、岩石種が異なっても通用する部分が多いと考える。（森岡・藤川2008b）では、その区分原理を提示したが、この報告でも根幹をなすことであるため、分類の要件や内容について、若干増補し、簡単に記述しておきたい（図4）。

朝鮮半島の古代に散見される矢穴を半島系タイプと呼称する。百濟弥勒寺に7世紀前半の例が、新羅感恩寺に7世紀後半の例があり、指標となる。他の例を加味して矢穴痕は三角形を呈し、幅もさほどなく、明確な矢穴底を作らない。現有資料では、その日本列島伝播は認められず、7~8世紀の古墳や寺院関係の遺構には影響を与えていないようである。中世石造物系の矢穴を先Aタイプと呼ぶ。矢穴口長辺8~13cm、深さ4~8cm程を測り、U字状、舌状、舟底状を呈する。現状では、後述する寺院石垣系、城郭石垣系の矢穴には見当たらず、一方では系譜的にも、年代的にも半島系矢穴とは脈絡が辿れず、日本への伝来に後述のごとく上限時期が推測できるものである。当該例のごとく日本最古の矢穴は見つかっても、さらに遡ることのできる資料の出現により、やがては更新されるとみている。先Aタイプの完全矢穴はなかなか存在せず、その掌握は未だ難しいが、兵庫県明石市魚住町錦ガ丘五輪塔（小式部内侍）の基礎の例は、矢穴列にみれなくはないが、幅狭く、整齊感の伴わぬ態様である（図5-1・2）。なお、奈良県高市郡明日香村所在の奥山久米寺十三重塔基礎に残る完好な先Aタイプの矢穴口は、3つあって列をなす。それらは矩形を呈さず、長梢円形に近い平面形制を探って、その特徴を代表する（図5-3・4）。13世紀初頭ぐらいの所産であろうか。京都府八幡市石清水八幡宮五輪塔の火輪下部にみられる先Aタイプ矢穴列痕も鎌倉時代のものとして例示しておきたい（図5-5・6）。

寺院系石垣に先出していく矢穴を、古Aタイプと呼称している。矢穴自体は浅いものではないが、穴壁の長側面・短側面共にナイーブな形成をなし、矢底の造作も甘いつくりとなっている。

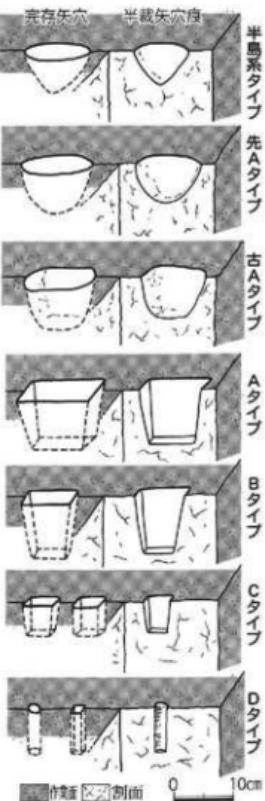


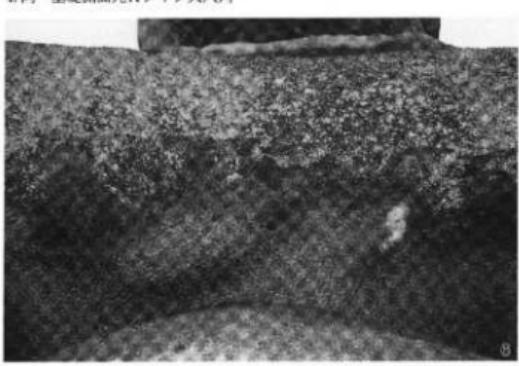
図4 矢穴の基本型式分類模式図



図5 1. 銚子丘五輪塔（小式部内侍）〔兵庫県明石市魚住町〕  
2. 同・地輪側面先Aタイプ矢穴列



3. 奥山久米寺十三重塔〔奈良県高市郡明日香村〕13世紀初頭  
4. 同・基礎側面先Aタイプ矢穴列



5. 石清水八幡宮五輪塔〔京都府八幡市〕鎌倉時代  
6. 同・火輪下部先Aタイプ矢穴列痕

矢穴短側壁が左右不揃いになっている例が多いことも注視すべきことである。矢穴口長辺は9～16cm、深さ5～12cm程度で、法量のバラツキが著しく、矢穴列内、矢穴列痕内での個体差も大きいことが特徴の一つである。先Aタイプの要素を残しつつも、Aタイプの属性をも併せもつ矢穴と言え、その資料集積が急がれる橋渡し的な矢穴型式である。寺院系以外に初期の織豊系城郭や戦国期の石垣にも散見される点は、今後、Aタイプの出現問題と深く関係するであろう。

慶長・元和・寛永期に広く普及した城郭系石垣の矢穴型式をAタイプと呼ぶ。研究初期段階、型式分けの基準となった矢穴で、矢穴口長辺8～12cm、矢穴口短辺5cm前後、深さ6～10cmを計測するのが一般的であるが、石切場における巨石の大割工程では途轍もなく大きい例が存在する。また、慶長期に遡る例はやや小型のものが多く、矢底の四周が少し隅丸をなすものが多い（兵庫県朝来市竹田城、京都府亀岡市亀山城、京都市二条城の一部など）。徳川大坂城関係だけでも細分可能な資料数を保持しているが、後半期には矢穴技法の標準化と強く関係すると睨んでいる。矢穴口長・短辺の法量はAタイプとCタイプの中間的な様相を示し、深さのみが平面規模を凌ぐやや特殊な胴長形態の矢穴をBタイプと称している。矢穴口長辺7～10cm、深さ15～20cmぐらいのものが知られているが、個体数は僅少であり、統計的数値も得られにくい。六甲山系の近世採石場においては、甲山・越木岩両刻印群のごく一部に存在する。実年代との関わりでは、竜山石の例になるが、天保7年（1836）が今のところ最も古い。これとは別系統で、18世紀後半以降に急増し、基本的には近代に至るまであまり大きさを変えず彫られてきた小型の矢穴をCタイプと一括しておく。矢穴痕の形態にはバリエーションが認められ、Aタイプと相似形のもの、a・b・cの値がほぼ同じで規格的にみえるものから、矢穴底が矩形に近いもの、穴壁全体が丸味をみせるものなど、多くの種類が存在するが、大きさの点では一定のまとまりがみられる。矢穴口長辺6cm未満、矢穴口短辺4～5cm、深さ6cm程度のものが多い。最後のDタイプは近現代の小割りに用いられた矢穴を一括する。削岩機による矢穴機能の穴も含めており、平面も円形・方形と多様である。便宜的に型式として定立したが、研究対象とはしていない。

#### (6)額安寺宝篋印塔にみられる日本最古の矢穴痕

平成20年9月24日、奈良県大和郡山市教育委員会の山川均氏より、同市額山御寺町所在の額安寺宝篋印塔に古い矢穴痕が発見されたので、移設修理中に矢穴に関する専門的な調査をこの機会にぜひ実施して欲しい旨、緊急連絡と依頼があった。從前より筆者らの中世と近世の矢穴技法をめぐる調査・研究の進展状況をよく認識されての依頼であり、現状では日本列島最古例となる重要資料でもあるため、快諾し、この連絡を受けた筆者の一人、森岡は早速、日程や調査方法に関する二、三の打ち合わせを行なった。地元芦屋では、40年にわたる共同研究者である藤川とも連絡を取り合い調整し、両名で基礎調査にあたったのは、平成21年11月4日のことであった（図6）。調査後は再建され、矢穴痕が確認された基礎部分の下部は土中に埋まり、再び長期にわたって改めての観察は不能となるため、この日の調査は半日程度ながら今から顧みれば、大変貴重なものであった。



図6 調査風景

額安寺宝篋印塔は、鎌倉時代中期の造立てで、花崗岩製で塔高は274.3cmを計測する。本塔は、「文応元年（1260）十月十三日 願主永弘」と「大工大藏安清」の銘を有し、関東地方に移動したとされる最古の大藏派石大工の作品であり、その系譜や型式学的な詳細研究は本書を彩る別稿に委ねたい。以下、この報告では、矢穴に関する所見に絞る。

矢穴は、単独の矢穴痕ではなく、矢穴列痕と呼ぶのが正確であり、額安寺塔の格狭間のみられる基礎2ヶ所に確認された。別石であるため、とりあえずA石材、B石材と仮称しておく。調査は森岡が縮尺5分の1による略実測を行い、藤川が計測を補佐した。また、矢穴痕部分に限って、A石材の拓影を藤川が、B石材の拓影を森岡が採拓し、観察の所見や法量などを野帳などに記し、でき

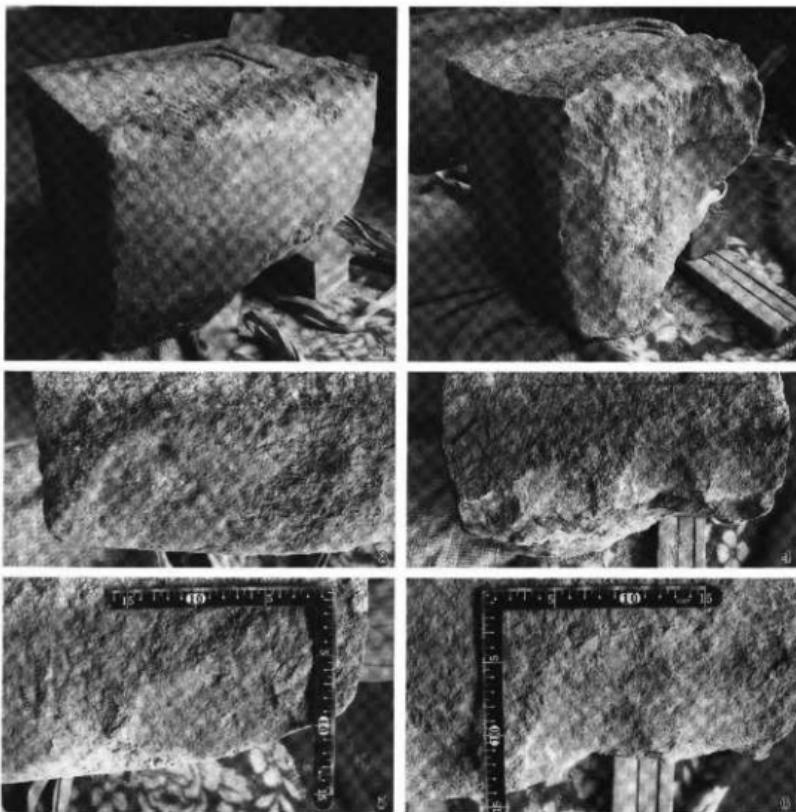


図7 1.額安寺宝篋印塔にみられる矢穴列痕 石材A 2.同・石材B 3.同・石材A矢穴列痕  
4.同・石材B矢穴列痕 5.同・矢穴列痕A細部 6.同・矢穴列痕B細部

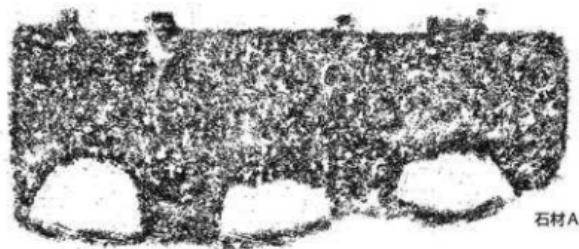
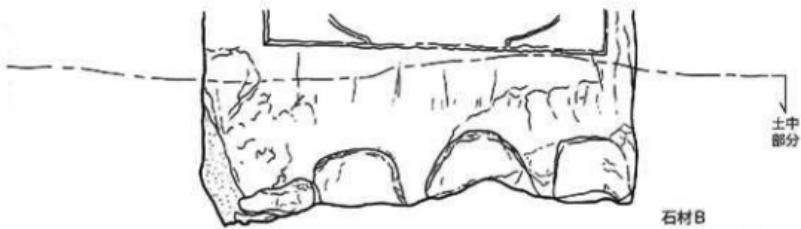
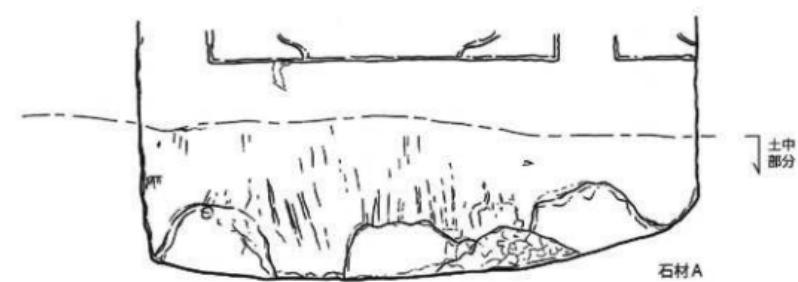


図8 頬安寺宝匣印塔の矢穴列痕略実測図・拓影 縮尺1:5、1:4

るだけ文字情報も記録にとどめた（図7・8）。

A石材の矢穴列痕は幅57.5cm、高さ49.3cmを測る基礎分割材の下端部分に認められ、3つの矢穴痕から成る。それぞれを左からA1・A2・A3と呼称する。下端はかなり円磨度の高い自然面であり、緩やかな弧面をなしており、この部分に矢穴列を設定し、外表から切断加工を行なっている。矢穴痕はA1が完存するものの、A2とA3の間には浅い割れが入っており、痕跡自体不完全である。大きさについて、矢穴痕A1は、矢穴口長辺11.5cm、深さ7.5cm、矢穴痕A2は矢穴口推定長辺10.5cm、深さ6.1cm、矢穴痕A3は矢穴口推定長辺13.0cm、深さ6.7cmを計測する。矢穴口は矩形をなすものではないが、短軸側にA1で3.0cm、A2で1.9cm、A3で1.9cm残っている。矢口間はA1-A2間が8.2cm、A2-A3間が6.4cmある点は注意されてよい。矢穴痕の形態は舌状、舟底状を呈するもので、典型的な先Aタイプと言える。明確な底面は持ち合わせていない。矢穴痕の整形、形成上の特徴について述べると、穴壁はA1・A2・A3共に左小口部分がしっかりと残っており、A1長側辺の右側にはノミ当たりの小段差が認められる。矢穴痕A3では底中央付近に不整円形の1cm未溝のノミの先端痕跡が存在する。格狭間の形成面では、格狭間の下端より5.5～6.0cm付近までノミのち敵きの丁寧な二重調整であるが、地中に没するそれ以下は縱方向の巻状の微弱なノミ跡が観察され、部位を意識した整形の使い分けがなされている。

幅45.7cm、高さ45.5cm、奥行45.5cmあるB石材の矢穴列痕も基礎石材の粗彫成面部下端に遺存する。格狭間下5cmあたりから土中に没する根部の粗い彫成となっている。先の基礎部材同様に3ヶ所の矢穴痕が認められ、矢穴列痕として残る割面が検出されたと考える。下部15cm前後が地面下にあったようで、腐蝕土と接触して黒ずむ。矢穴痕同士の間隔は、A石材より密で、矢穴の大きさも一回り小さい。左からB1・B2・B3と呼び分ける。矢穴口の形成面は割面となっているが、石材下左隅には局部的に円磨の加わった自然面が認められる。B1の左脇には長さ7.5cm程の欠け面がみられるが、これは対向割裁面の瘤状残留部のネガと思われる。個々の矢穴の大きさは、B1が矢穴口長辺9.5cm、深さ5.3cm、B2が矢穴口長辺10.0cm、深さ5.5cm、B3が矢穴口長辺8.7cm、深さ5.4cmを計測し、形状はB1とB3が類似する。矢穴口での残痕幅からしか推定できないが、その数値はB1が1.9cm、B2が2.3cmである。B3は2.0cmを測る。矢穴痕の形状は、B1とB3が圓丸を呈する先Aタイプ、B2が圓を持たない舌状の先Aタイプで、いずれも古い要素をとどめている。とくに最もコーナーらしく隅作りを行なっている箇所は、矢穴痕B3の左側底付近である。矢底に向う長軸穴壁も狭まるもので、箱形をなす矢穴からは想像しかねる程、口が楕円形状で底が不明確になって長さ・幅共に減じて終わる。矢口間の距離は、B1-B2間2.4cm、B2-B3間1.5cmを計測して、前述したとおり短い。B3右側部は、痕跡右肩を欠損しているようにみえる。ある程度矢穴底の捉えられるB1とB3では、把握可能な底部位は長さとして7.5cmと6.3cmあることを付記しておく。

さて、いま一度、矢穴のみに限って調査の結果を整理しておきたい。矢穴痕は二区格狭間に有する宝篋印塔の基礎石の分割された石材中の2石に列痕として検出され、在銘を拠り所として、現状にあっては年紀遺存石造物資料中、日本最古の位置を占める。6個の矢穴型式は、先Aタイプであり、矢穴壁は長側辺も短辺側も不明瞭な狭い矢底に向ってナイーヴに移行し、その形態は舌状ないしは舟底状と言ってよいものである。矢穴口の平面形は矩形をなさず、紡錘形を呈しているものと推測するが、本タイプの矢穴例はいたって完存例が少なく、その形状の解析は目下課題の一つであり、かなりバリエーションが認められるものと考える。短軸幅もおそらく3～4cm止まりが多いのではなかろうか。本例も復元すれば、それを少し超す程度とみられる。同一石工とみていい矢穴

痕ながら、実のところ個々に個性があり、ノミ振るいがけつして画一的なものとは言い難く、ソコウチノミが駆使された形跡もない。技術的なレベルは矢穴の変遷史の上では高いものではなく、初期のものとどちらえて大過ない。

なお、石材については、黒雲母などの有色鉱物が比較的目立つものの、ピンク色を呈する六甲花崗岩に特徴的なカリ長石は殆ど含有しない岩質であり、産出地は大和とみられるが、確かな鑑別に期待しておきたい（第II章4項参照）。

#### (7)当矢穴痕の先Aタイプに占める位置

ここでは、紙幅の関係から、矢穴痕額安寺例と直接関連する先Aタイプの矢穴痕や矢穴列痕を有する資料を若干取り上げ、その特徴の異同についてみておきたい。

既述してきたように、先Aタイプの矢穴痕は、Aタイプが主体を占める近世の城郭系石垣では確認できず、また、古Aタイプの見られる寺院系石垣にも今のところ検出例がなく、中世に遡る多様な石造遺品において多見される。額安寺例が出現するまでの日本列島最古例は、京都府綾喜郡加茂町東小所在阿弥陀笠石仏の弘長2年（1262）銘例であり、13世紀中頃近くまで遡ることが知られている（藤川1998、森岡・坂田2005b、森岡・藤川2008b）。この資料は、背面に良質の矢穴列痕を有し、最初期から逆台形にきわめて近い比較的深彫りの舟底形の矢穴痕が見い出される（前掲図2-1・2）。周知度合いの高いものは、これと1年違いの奈良県高市郡高取町観音院所在宝鏡印塔基礎の弘長3年（1263）銘例があり、宝鏡印塔の事例としては、額安寺例と同様、基礎部位の下



図9-1. 観音院宝鏡印塔〔奈良県高取町〕弘長3年（1263）

2. 同・基礎下部先Aタイプ矢穴列痕



5. 二尊院十三重塔〔京都府京都市右京区嵯峨小倉山〕13世紀末  
6. 同・基礎台座上面先Aタイプ矢穴列痕



3. 清盛塚十三重塔〔神戸市兵庫区〕弘安9年（1286）

4. 同・笠側面先Aタイプ矢穴列痕



7. 満願寺九重塔〔兵庫県川西市〕正応6年（1293）  
8. 同・基礎台座側面先Aタイプ矢穴列痕



9. 頭安寺十三重塔〔奈良県高取町〕13世紀末  
10. 同・基礎台座側面先Aタイプ矢穴列痕

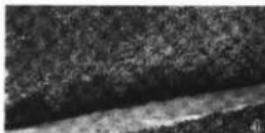
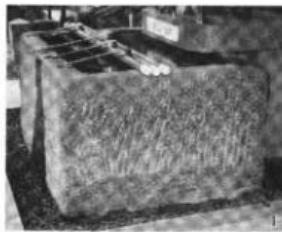
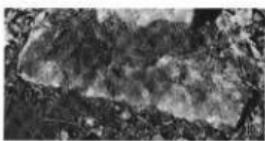
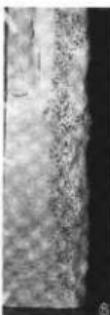


図10 1. 順成寺水盤〔滋賀県蒲生郡蒲生町〕正安4年(1302) 2. 同・短側面下部先Aタイプ矢穴列痕  
3. 報恩寺五輪塔〔兵庫県加古川市平荘町山角〕正和5年(1316) 4. 同・基礎下部右側面先Aタイプ矢穴列痕



5. 和田寺〔兵庫県播磨市今田町〕文和4年(1355) 6. 同・右側面先Aタイプ矢穴列痕



7. 藍那通称七本  
五輪卒塔婆〔神戸市北区〕1380年代  
8. 同・地輪側面  
先Aタイプ矢穴  
列痕



11. 早尾神社板碑  
〔滋賀県大津市山上町〕鎌倉時代後期  
12. 同・右側面先Aタイプ矢穴列痕

端に存在しつつも、実見自在のため、最も比較・検討すべき資料と言える（図9-1・2）。注目度の高い矢穴であり、長い間最古級の矢穴痕として紹介している。この矢穴痕は総じて舌状を呈するものである。13世紀後半の例では、和歌山県高野山町七十七町石の文永5年（1268）銘例があり、兵庫県神戸市兵庫区所在清盛塚十三重塔の弘安9年（1286）銘例などが存在する。前者は北四国志度産花崗岩製とされる（奥田2002）。清盛塚十三重塔基礎に残る先Aタイプ矢穴痕は、矢口が良好に遺存する矢穴列の一部であり、割加工中断のものとみられるが、製品に無頓着な姿で残っている一例と言えよう（図9-3・4）。さらに年代が下降し、13世紀末頃に比定される京都市右京区嵯峨小倉山所在の二尊院十三重塔基礎に残る先Aタイプは、稚拙な矢穴彫りである（図9-5・6）。正応6年（1293）銘が残る兵庫県川西市満願寺九重塔基礎の先Aタイプは、割加工面形成を目的とした舌状形態を呈する矢穴列痕であり、上線に沿って残存する（図9-7・8）。

14世紀に入るものの、調査初期に確認できたものには、滋賀県蒲生郡蒲生町所在願成寺水盤の正安4年（1302）銘例（図10-1・2）、兵庫県加古川市平荘町所在報恩寺五輪塔の正和5年（1316）銘例（図10-3・4）、同県篠山市今田町所在和田寺地蔵板碑の文和4年（1355）銘例などがあり（図10-5・6）、先Aタイプの矢穴痕の実例が継続する。例えば、1380年代とみられる神戸市北区藍那所在、通称七本五輪卒塔婆地輪などにアールの緩い浅いU字状の先Aタイプ矢穴列痕が観察される（図10-7・8）。また、京都府綾喜郡加茂町所在、西小供養塔婆の基礎前面に比較的深い舌状の先Aタイプ矢穴列痕が確認できる（図10-9・10）。在銘資料である報恩寺五重塔基礎下部の矢穴痕は浅くみえる舌状形態をなすもの（先Aタイプ）で、間隔の狭い列痕が残存している（図10-3・4）。同様に、滋賀県大津市山上町早尾神社板碑に残る先Aタイプの矢穴痕も互いの間隔は狭く、高密な矢穴列痕と言える（図10-11・12）。詳しく述べる余裕は既にないが、同タイプの矢穴は、15～16世紀の石造物にもより一層多岐にわたって採用されており、今日では保有調査資料も多く、網羅的に提示することを躊躇する。本例はその中でも最古段階のものとなつたが、その細部型式に拘れば、先Aタイプの範疇にあっても、舌状と舟底状のものが共存していることが明確なものであり、このことは両形状自体を根拠に先Aタイプを大きく前後に小区分することを可能ならしめる要素にならないこと、ひいては13世紀の段階から始まって16世紀に及ぶ長期に亘って、中世石造物の矢穴痕先Aが細別型式の組列をなして細分可能な程に整然と変化しているもので



図11 1. 小林墓地定印跡〔神戸市東灘区〕  
永禄期 2. 同・背面上端先Aタイプ矢穴列痕

3. 北向地蔵定印阿弥陀〔神戸市灘区徳川道〕永禄期  
4. 同・左側面先Aタイプ矢穴列痕

ないことも物語っていよう。ただし、現実には蓄積資料全体が相対的に古Aタイプとも親縁な舟底状のものより舌状に收斂して行く傾向にあることが判明しており、技術的な安定度は矢穴形状から見ても進んでいることは指摘できよう。永祿期以降に下降する16世紀中頃以降の神戸市東灘区小林墓地定印羽蛇の背面に残る矢穴列痕（図11-1・2）や同市灘区北向地藏定印阿弥陀像光背側面の矢穴列痕は、先Aタイプでも深みを持つ舌状形のものが並んでいる（図11-3・4）。この点、先に源流を予測した中国大陆での矢穴形態の実情が如何なるものであるのか、無視できないものがある。

#### （8）まとめと向後の課題

以上をもって、この報告を閉じることにするが、二、三のまとめと今後の課題、展望といったことがらを記し、筆者らの立場で最古の矢穴痕例となった本資料の歴史的な意義にも触れておきたい。

先Aタイプの矢穴と韓半島において7世紀には存在する半島系の矢穴は、型式学的にみても時間的にみても相違が著しい。三角形状を呈する特異な半島系タイプの矢穴は、この30年から詮索を続けてきたものの、日本の古墳時代や飛鳥・奈良時代に伝わった証左を追えず、鎌倉時代に出現する先Aタイプまでの石材切断技術に矢を用いた証拠を積極的には提示することができない。二、三認められる横穴式石室用材の矢穴もどきの痕跡は、これまでにも報告されたことがあるが（室生村教育委員会1980）、筆者らの観察結果は、クサビやバール状の工具で石の目を割り採ろうとした造作痕であって、矢を挿入するために彫った矢穴による計画性ある裁断技術とは大きく異なるものである。石材利用の一環としての割石は、継続的に大石使用が認められるので、寺院の基壇や礎石に用いられた石材利用として細部加工に至ったと考えられるが、矢穴技法に基づく巨石からの割加工は、現状にあっては、13世紀以前に大陸から新たに渡来してきた新技法と考えるしか方途がない。この時期に絞り込めば、朝鮮系ではなく、むしろ中国系の矢穴技法の伝来が予測されるが、該期において即座に思いつくのが、12世紀から13世紀初めまでを生きて、奈良東大寺の復興に心血を注いだ俊乗房重源の存在である。具体的には、彼はその時、中国南宋から石工を招聘しており、その末日集団の中に彫技に長けた者以外に矢穴技法を保持した下層工人たちが一定数含まれていることが十分考えられるからである。

ここまででは無い物ねだりの単なる思いつき、想像の世界の話に類するけれど、山川均氏の大坂歴史学会考古部会の研究発表を拝聴する機会を得て（山川2007）、私たちのかかる仮説がますます現実味を帯びるものとなった偽ならぬ経緯がある。山川氏の注目した『東大寺造立供養記』の建久7年（1196）条によれば、製作された石像の内容を詳しく知ることができるが、中門石獅子2体（現南大門北向き東像・西像として現存）・大仏石脇侍2体・大仏殿舎内の四天王像4体であり、近年「東大寺石像群」と呼称されている（山川2008）。この石像群を制作した石工が「宋人字六郎ら四人」と具体的に記されており、浙江省杭州に都をもつ南宋から、銘（明）州（浙江省寧波市）出身の伊行末一行が来日したことは疑いないものであろう。この間、額安寺塔造立に至るまでの空白期



図12 中国南宋朱貴祠武士石像矢穴列痕拓影 縮尺1:8

〔寧波プロジェクト科研チーム提供〕

間数十年の矢穴技法の実態は現在全く不詳ではあるものの、この期を埋める日本側資料の出現、証左が十分遺存する可能性を示唆している。それにも増して、筆者らの関心が高まったのは、その淵源にも相当する中国寧波近郊の東錢湖周辺石像群の南宋史氏墓前石刻を対象とした寧波プロジェクト（代表小島毅、文部科学省科研チーム）の石造物調査の推移と成果であった。それは長らく中國南部に起源を求めてきた筆者らの想定を実証するに最も相応しい研究活動であり、視認しにくい箇所に残る矢穴痕や年代併行期の石切場自体の発見を付随した形での意識的な調査に希求するしかなかった。

そんな折、中国で該期の矢穴痕発見の報が伝わったのは、2008年12月13のことであり、千天に慈雨のような想いでその詳報を持ち望んだ次第である。その稀有な資料に関する山川均氏の連報（山川2009）や佐藤亜聖氏による簡報（佐藤2009）によれば、寧波北郊外の慈城・朱貴祠において、西村大造氏が武士石像基礎石材より発見された矢穴痕であり（図12）、筆者の一人森岡は、額安寺塔例の矢穴痕の類型に属する大陸側資料として貴重な実例であることや一連の現地調査自体が大きな奏功の旨をコメントした（朝日新聞社・奈良新聞社ほか2008年記事）。

さて、矢穴の変遷理解と技法的系譜を考究するに際して、課題とすべきことのいくつかが横たわっているので、最後にまとめて記すことにしたい。先ず第一には、中世石造物の製作地、採石地に矢穴や矢穴痕に恵まれた遺跡がなかなか発見できず、織豊期以降の城郭石垣のごとく、生産地一消費地関係のケーススタディが当時の政治・社会史の中に容易に展開できないことである。往時にあっては、脈々と採石が続く過程で基本的には採り尽されたことは考えられて然るべきではあるが、各地の踏査活動では実態究明には至らず、疑問も多い。阪神・淡路大震災後の1998年、神戸市東灘区阪急御影駅周辺の家屋解体工事現場で掘り起こされたとみられる数石の石材の一つに先Aタイプの矢穴列痕を確認しており、一部紹介を試みたことがあるが（森岡・藤川2008b）、中世に遡る石切場の一部とすれば、南東方至近地に所在する弓弦羽神社境内で確認している先Aタイプ検出の石材との因果は当然として考える必要がある。かような石造物の採石場の問題は、京都府南部の当尾の里一帯の悉皆調査などを対象として真剣に始めるべきと考えている。

第二の課題は、石材加工の歴史の中で、矢穴自体の型式学的変遷の様相自体は掘めてきたものの、切石を生み出す切断技術の進化と対象石材、建造物との関係がなお合理的に、一元的には説明できないことがあげられよう。中世石造物の生産に多用されながら、寺院建築の石垣・石積などに波及しつつ、室町時代後期からは本格的に織豊系城郭の石垣に採用され、巨石・切石利用の頂点に立つ近世前期の城郭石垣においては、大量需要と共に割石技術の標準化がより一層進み、矢穴型式そのものにも規格化や安定度が加わってくるが（森岡2008、森岡・天羽2009）、技術系譜が石工のレベルでどのように継承され、裾野を広げていったのか。当時の社会背景や政治史の中での具体層の追求が要請される。第三には、矢穴を彫る技能と矢穴諸型式成立との因果関係も課題であり、とくに彫り具である鉄製ノミの変化など、以前にソコウチノミの発達との関係を見通し的に述べたこと（森岡・坂田2005b）と直接関係する。このあたりは、最初期の宝篋印塔での類例の漸増や他の中世石造物での資料の增加に期待を寄せて再考したいと考えているが、この一年でも自らの確認、追認以外に、多数の確例資料の情報が集まりつつあり、もはや中世の石造遺品の日常見えぬ場所に普遍的に存在するといった実感を高めている。冰山の一角を早くに押された筆者らの指摘や調査活動、基礎資料の提示が現時点では大きな意味を持つと自負する一方、中世の矢穴技法の痕跡が早晚、日常茶飯化していくものと予測する次第である。

そして、最後の問題が割石技術を携えて中国南部から遙々やって来た石工集団と矢穴技法との関

係性である。それには技術レベルのみならず、石材の問題が常々絡んでくるが、東大寺石獅子の風化度がノイズとなっているとはいへ、「淡いピンク色」を呈する色調や質感が梅園石（寧波郊外梅園村産出）に近似するという鑑定報告や紹介（中日石造物研究会編2008、山川2008）は、大変有力な手掛かりを与えており、矢穴技術の初期中日伝播が硬質の花崗岩以外の素材を介したことも十分考えられてよい。矢穴技法を中国製の宝篋印塔の列島伝来や影響と関係付けて偏重的な説明を加える必然性は全くなく、1230年代の日本の出現期宝篋印塔（京都市旧妙真寺宝篋印塔・京都市高山西寺宝篋印塔2など）（山川2008）をさらに30～40年遡る形での当技法独自の伝播は、他の大陸系石造物の製作を通して、一つの技術体系として発達された蓋然性の方がむしろ大きいと思われる。ましてや、実証できる現有資料が1260年代以降の初期宝篋印塔（京都市為因寺宝篋印塔1265年・生駒市奥山往生院宝篋印塔1259年・高取町觀音院宝篋印塔1263年など）（岡本2006）併行期止まりである点は、先の上限予測年代と深く関わることでもあり、13世紀前半の造立資料に焦点をあてた国内外の未確認資料の向後の充実を待つほかないであろう。

文応元年（1260）7月に石彫技術伝授の首謀伊行末が死去したことを今日に伝える銘文が奈良市般若寺笠塔婆（弘長元年（1261））にみられるが（山川2006）、額安寺宝篋印塔の製作と直接関わる矢穴痕発見により、矢穴技法は奇しくもその年までは遡ることになった現在、東大寺石像群の上限年代である建久7年（1196）を含む12世紀末にこそ、その伝來の起源や射程を求める必要性が俄かに高まったと言える。中世石造物研究者の弛まぬ探求心と実践力、矢穴技法を中心とする石割技術変遷史研究者の地道な調査・研究の足取りはこれを契機にドッキングし、協働を深化させることにより、より東アジア史的な視座からの石材加工の歴史の明るい途が開けたと言え、さらなる共同研究成果の招来が期待されよう。

末筆となつたが、矢穴痕実測図・矢穴型式分類模式図のトレースを山本麻理女史にご協力いただいた。感謝申し上げる。

（文責：森岡秀人・藤川祐作）

#### 4. 文献史料および古絵図にみる額安寺宝篋印塔

本項においては、文献史料および古絵図に表わされた宝篋印塔について記述する。

##### (1)古絵図に見られる額安寺宝篋印塔

額安寺の描かれた絵図としては、古代に描かれた「額田寺伽藍并条里図」が有名である（本書第二章1項図2）。この他にも、後述する寛永11年（1634）の絵図をはじめ4枚の絵図が残っている。また、明治に行われた寺社調査の際に作成された境内図も3枚残っている。本稿では、寛永11年銘のある古絵図を「古絵図A」、彩色があって墨書のないものを「古絵図B」、彩色があり墨書のあるものを「古絵図C」、墨書のものを「古絵図D」と称し、それぞれの概説を行う。

##### a. 古絵図A（図2）

額安寺の伽藍および寺地を描いた絵図で、図面下中央に「寛永十一年 伏見上候／扣<sup>1</sup>」とあり、寛永11年に描かれた絵図の写しと考えられる<sup>2</sup>。他の絵図と比べると、田畠の広さが記入されている点に大きな違いがある。恐らくこの絵図は、額安寺の寺領を知るという目的で制作されたのであろう。

本図では、講堂や東門と明星池の位置が近すぎる、七間四面であった金堂跡の礎石の数が足りないなど、正確に描かれたとは言い難い。しかしながら、他の古絵図には描かれていない道や川などが記されており、情報量自体は豊富といえよう。講堂・六角堂（虚空蔵堂）・東門は「瓦葺」と注記される。方丈は特に注記なく、講堂など瓦葺の建物と表現が違うことから、葺葺もしくは桧皮葺と考えられる。東門は立体的に表現されているが、西門は四角囲みで「西門」と注記されるのみであることから、この時期には、ほとんど機能していなかったと推測される。推古神社の東側には、「十羅刹」とあるが、これは古絵図C（後述）にある「十羅刹堂」のことであろう。

宝篋印塔は、「明星池」中島の西端に描かれている。本図では宝篋印塔の塔形ではなく三重層塔として表現されており、「明星石」と注記される（図1）。近くに虚空蔵堂が存在することから、当時この周辺が虚空蔵菩薩の信仰を集めていたと考えられる<sup>3</sup>。

##### b. 古絵図B（図3）

額安寺の伽藍を描いた絵図である。注記はない。道は朱を用い、太い道は太く表現する。色調から判断すると、講堂・門は瓦葺、方丈は葺葺もしくは桧皮葺であったことがわかる。池と中島は南北に細長く表現され、宝篋印塔は島の南端に描かれている。堀と樹木で囲まれた境内の東・西・南北の三か所に門が開き、さらに内側に堂舎を取り巻くように堀がめぐらされている。この内側の堀にも南に2つ、東に1つの計3つの門が開いている。

鎌倉墓・推古神社・講堂・方丈・門・虚空蔵堂などが立体的に表現されている。本図では、このように、立体的に表現されている部分と、四角囲みで墨書された部分がある。この四角囲み表現は、すでに無くなった堂跡、もしくは表現する必要のない堂舎を示していると考えられる。ただし、古絵図Aで「別所」と注記されている部分も同様に四角囲みとなっているため、すべての四角囲みが堂舎跡と考えることはできない。

本図には、古絵図Aで描かれる厨・經藏・馬場・中門が描かれておらず、また古絵図Aに描かれていない南大門・西門が描かれている。したがって、本図は古絵図Aに先行するものとみられる<sup>4</sup>。なお、古絵図Cでは虚空蔵堂が「虚空蔵堂跡」として描かれていることから、本図は古絵図Cよりも古い時期に制作されたことは間違いない（図1）。

### c. 古絵図C（図4）

額安寺の伽藍を描いた絵図である。彩色され、堂舎の説明などは墨書きされる。鎌倉幕の敷地が他の絵図と比較して詳細に描かれている。堂舎の形や境内などに違いがみられるものの、全体的に古絵図Bと類似した表現がみられる。方丈は、屋根の形が異なるだけで本体部分の表現は同じである。

宝篋印塔については、「池中島明星天子影向所石宝篋印塔高六尺」と注記があり、當時も石造宝篋印塔として認識されていたことがわかる（図1）。中島は影向所、すなわち虚空藏菩薩の降り立つ地として信仰を集めていたと考えられる。

### d. 古絵図D（図5）

額安寺の伽藍を描いたものである。右下にある墨書きから、額安寺が西大寺の末寺であり、寺領は12石であったことがわかる。本堂、虚空藏堂など立体的に示されているものと、客殿など四角で囲って範囲を示したものと二通りの表現がみられる。宝篋印塔の建っている池は「虚空藏堂也」と記されている。

本図の一番の特徴として、地蔵堂が描かれていることがあげられよう<sup>6</sup>。また、右下の墨書きには「鎮守井地蔵堂屋敷墓所」とあり坪数が記されていることから、本図は額安寺の寺領を明確にする目的があったものと推察できる。また、古絵図A～Cは、池の両側に虚空藏堂（虚空藏堂跡）をはさんで五社明神が祀られているが、本図では虚空藏堂のはいる余地がなく、池のすぐ南側に五社明神が祀られている（図1）。これは、現在と同様の状況であり、本図が制作される以前に池の拡張が行われた可能性を示している。

### e. その他

明治時代には、少なくとも5回に亘って額安寺の現状や由緒に関する調査が行われており、その際に、境内図や報告書が作成されている。そのうち3枚の境内図には、いずれのものにも池の中島に宝篋印塔が描かれているが、明治10年境内図には、池の傍に「墓所」と注記されている。

### 小結

各古絵図の前後関係は、先述の根拠に従い、古絵図B→古絵図A→古絵図C→古絵図Dとなる。ただし、古絵図A・Bの前後関係については、なお検討の余地がある。また、すべての古絵図に共通するが、木造五重層塔が現有の建物として表現されたものがないことから、いずれも16世紀後半以降に制作されたことは明らかである<sup>7</sup>。また、各絵図には、池および中島とそこに建つ宝篋印塔が描かれている（図1）。古絵図Aだけが、池を東西に細長く、宝篋印塔を西端に描く。それ以外の古絵図は、すべて池を南北に細長く、宝篋印塔を中島南端に描く<sup>8</sup>。

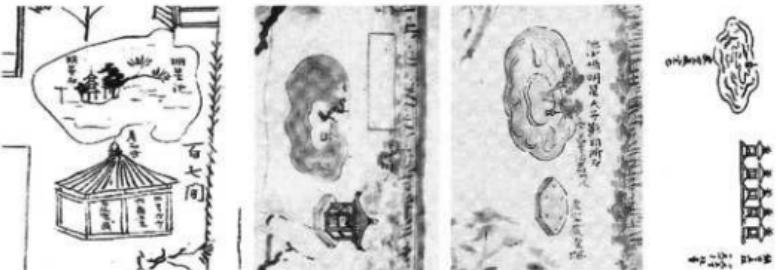


図1 古絵図に描かれた明星池とその周辺（左から古絵図A、B、C、D〔部分〕）

### (2)文献史料にみられる宝篋印塔

宝篋印塔に関する文書は、ほとんど残っておらず、江戸時代中期ごろに成立したと考えられている「額安寺縁起」<sup>9</sup>中に「一、明星池 明星石ト申伝ル/池嶋宝篋印塔在之、是ハ慈真和尚為母作之」と記述されるのみである。これによれば、江戸時代中期ごろには、池中島の宝篋印塔は「明星石」と呼ばれており、また、慈真<sup>10</sup>が母の為に造ったと考えられていたことがわかる。なお、慈真的父・学春<sup>11</sup>は額安寺の住僧であり、慈真自身も嘉元3年（1305）に額安寺大塔の復興を行うなど<sup>12</sup>、額安寺とは関係の深い僧侶である。ところで、慈真筆の「信空筆大塔供養願文」中には宝篋印塔については触れられておらず、鎌倉時代の額安寺関連史料中に、宝篋印塔に関して記述されたものが見当たらない。したがって、宝篋印塔と慈真の関係は不明といわざるをえない。

### (3)宝篋印塔基礎の銘文

額安寺宝篋印塔の基礎には「文應元年（1260）／十月十五日／願主永弘／大工大蔵／安清」という銘文がある。

本節では、願主永弘の名前が見られた、鎌倉時代の文書を紹介する。

僧永弘畠地売券<sup>13</sup>は、寛元元年（1243）に僧永弘が、先祖相伝の土地1段を比丘尼真阿に沽却したという内容である。

（端裏書）「添下□□ キヨスミノ文、東大寺へ寄口了」／「尼心阿」

沽却 清澄畠事

合壹段者

在大和國添下郡五条三里廿九坪内東繩手

四至 諸關 諸關

右、件畠者、僧永弘先祖相傳之私領也、年来領掌之間、敢無異論、而今依有用要、直米限參斛、永代奉沽却比丘尼真阿畢、向後更以不可有他妨、仍為後日亀鏡、放新券文之狀如件

寛元元年七月 日 僧永弘（花押）

この畠は、「清澄畠」とあり、清澄荘<sup>14</sup>にあった畠のことであろう。本史料では、添下郡五条三里廿九坪とあるが、ここは現大和郡市南井町付近に該当する。本史料では、1段分しか沽却していないが、南と西に「類地」と記載されていることから、永弘は当該地に少なくとも3段分以上の田畠を持っていたと考えられる。本史料の永弘が、額安寺宝篋印塔の願主・永弘と同一人物かどうかは不明であるが、南井町から額安寺までは直線距離にして約3kmしか離れておらず、両者は同一人物の可能性を指摘できるであろう。

このほか、文永5年（1268）に完成した元興寺極楽坊の聖徳太子立像（孝養太子像）<sup>15</sup>には、麗大な文書が納められていたが、その中の「太子結縁人名帳」<sup>16</sup>中に「永弘尊靈」と記載がある。また、やはり本像に納められている「木仏所画所等列名」には「善春」という名が見られる。善春は、13世紀に南都を中心として活躍した仏師で、西大寺の叢尊に重用された。善春の主たる事績として、文永5年造立の元興寺極楽坊の聖徳太子立像、建治2年（1276）造立の摩訶伽羅（大黒天）像、弘安3年（1280）造立の西大寺興正菩薩叢尊坐像の制作が挙げられよう（西川1977）。額安寺に関する事績としては、弘安5年（1282）に行われた乾漆虚空藏菩薩像の修理がある<sup>17</sup>。このように、仏師善春が制作した元興寺極楽坊聖徳太子像胎内文書に名を残す永弘が、やはり学

春、ひいては西大寺律宗（叡尊）と関わりの深い額安寺に造立された宝篋印塔の顧主であった可能性は強いといえよう。永弘は、叡尊もしくはその周辺の人物に何らかの強い縁故を有したものと想像されるが、彼は額安寺宝篋印塔が造立された文応元年（1260）から5年後となる文永5年には、「尊靈」とあるようにすでに故人となっていた。

#### 謝辞

古絵図A～Cは、奈良文化財研究所から提供を受けた。その際、同研究所歴史研究室・吉川聰室長に多大なるご協力を得た。末筆ながら記して感謝の意を表します。

（大江綾子）

<sup>1</sup> この「伏見」は伏見奉行のことと考えられる。当時の状況を勘案すれば、小堀遠州の可能性があろう（鶴柳訳文庫・藤本仁文氏の御教示による）。

<sup>2</sup> 「額安寺五輪塔修理工事報告書」中に、「額安寺古絵図（寛永十一年）」の写真が掲載されている（奈良県教育委員会1983）。写真では破れている部分が、古絵図Aでは墨で描かれている。また、写真に見られる「北」という字が、古絵図Aでは欠落している点、「西」という字の書かれた位置が違う点などからも、古絵図Aは寛永11年に描かれた絵図の写しであることがわかる。

<sup>3</sup> 「明星」とは、明星天子すなわち虚空藏菩薩のことである。

<sup>4</sup> ただし、古絵図Aでは「十羅刹堂」として描かれているものが、本図では単に四角四みで表現されている点には注意を払う必要がある。

<sup>5</sup> 注記では六尺、すなわち高さは180cmとなるが、実際には274.3cmを測る。

<sup>6</sup> 江戸時代には、額田郡村の甚七と額安寺の高舜の間に地蔵堂屋敷をめぐる争いがおこる。享保5年（1720）、高舜は、地蔵堂屋敷は元々額安寺の領地であると主張し新敷をおこしたが、結局は敗訴してしまう。それらの紛糾をまとめた「板屋瀬闇関係文書」（『大和郡市史』史料集所収「額安寺古文書（前）」）が「額安寺古文書」の中に残る。「板屋瀬闇関係文書」の中には額安寺の寺領を書きあげた絵図の存在を示すものがあるが、本図が該当するかは不明である。

<sup>7</sup> 木造五重塔は、天文11年（1583）に再興のなった西天王寺へ、豊臣秀吉の命を受けた片桐且元によって移築された。なお、本塔は慶長20年（1615）の「大阪夏の陣」の際に焼き払われたため現存していない（吉田2001）。

<sup>8</sup> 今回の修理以前の額安寺宝篋印塔は、東西に細長い長方形の明星池中島東端に建っており、いずれの絵図に描かれたものとも、その景観は異なる。

<sup>9</sup> 江戸時代中期に作成（吉田2001）。『大和郡市史』史料集所収「額安寺古文書（前）」雜記三。

<sup>10</sup> 総真是誠であり、般若寺長老を経て西大寺第二世長者となった慈道房信空（1231～1316）のことである。額安寺寺體の替春房學春の末子であり、幼名を松石といいます。水野章二氏の研究によれば、信空には春道姉子という姉がおり、信空は春道氏出身である（水野2001）。なお、『西大寺三宝料田島目録』中に、春道姉子の子息・聖順房學思が、永仁3年（1295）に恒例仏名料田として田2段分を西大寺に寄進したことが記されている（大江2008）。

<sup>11</sup> 叡尊と学春の関係は深く、叡尊の自伝「感身學正記」の記事をまとめると次の様になる（梶川1999）。まず、仁治3年（1242）、学春は、叡尊を屋敷へ勧請し、持仏堂で菩薩戒を受けている。次いで、寛元元年（1243）、叡尊は、学春の持仏堂で梵網經を講じ、康永元年（1256）には学春の願いによって、叡尊は法隆寺東院で202人に菩薩戒を授けている。

<sup>12</sup> 「信空筆大供養願文」（『額安寺古文書（前）』雜記一）。

<sup>13</sup> 東大寺文書（『鎌倉遺文』9-6213）。

<sup>14</sup> 清澄莊は、大和国源下郡にあった東大寺側莊園である。二か所に分かれて存在しており、現大和郡市野垣内町付近と同市本庄町付近に比定できる。なお、東大寺領清澄莊だけでなく、西大寺領清澄莊、九条家領清澄莊、興福寺大乘院領清澄莊があった（安田1995）。

<sup>15</sup> 日本で2番目に古い聖德太子立像（孝養像）である。同像胎内文書の一つである「木仏所画所等列名」により、文永5年3月11日に木造が行われ、同25日に色取（彩色）が行われたことが判明する（西川1977）。

<sup>16</sup> 表紙に「太子結線人名帳（鎌倉編）」とあり、文永5年に作成されたことがわかる（『鎌倉遺文』13-9917）。

<sup>17</sup> 台座裏に修理銘を墨書き（『奈良県史』16 金石文（上））。



図2 古絵図A  
奈良文化財研究所 所蔵

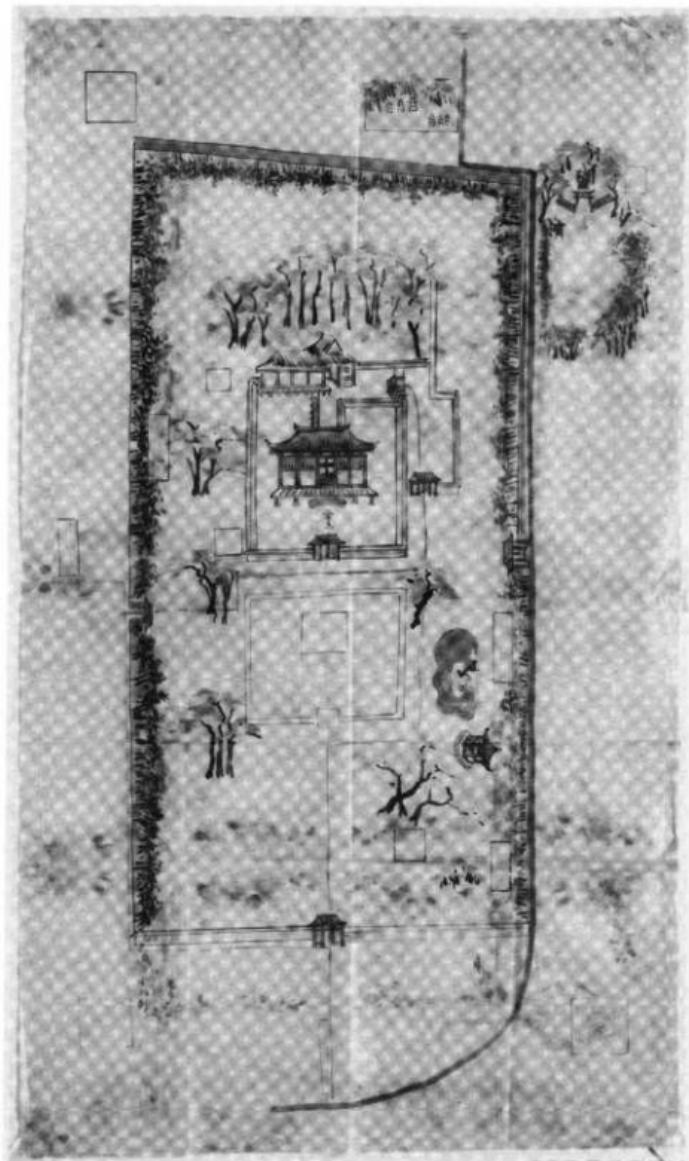


図3 古絵図B  
奈良文化財研究所蔵

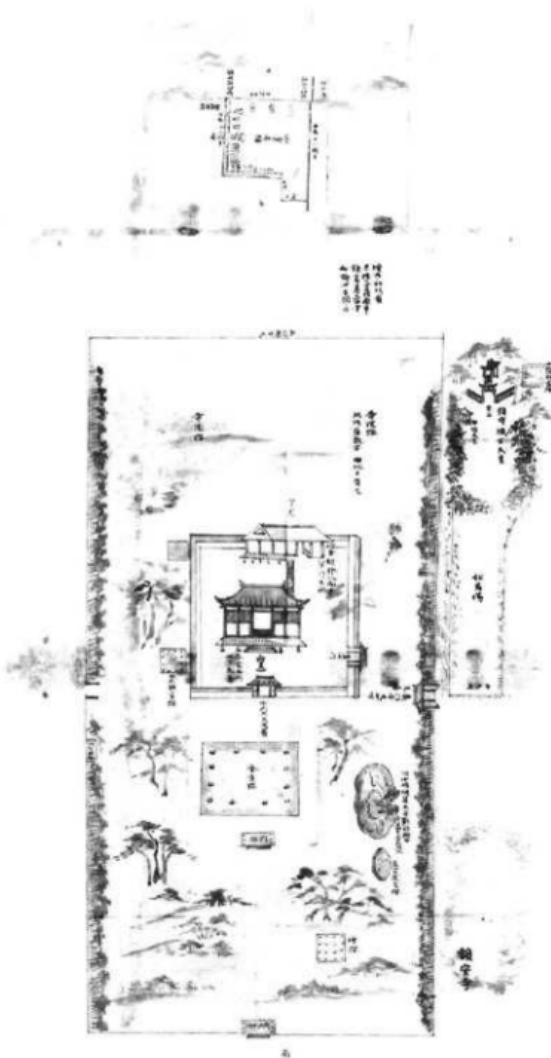


図4 古絵図C  
奈良文化財研究所 所蔵

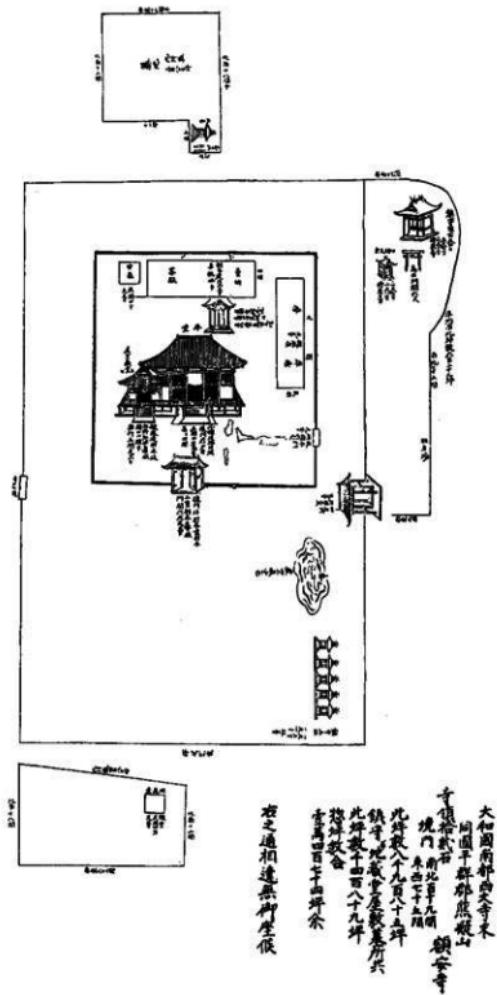


図5 古絵図D（保井 1985 より）

## VI. まとめ 一額安寺宝篋印塔の重要性について一

### 1. 額安寺宝篋印塔の原位置について

今回の修理に際しては、宝篋印塔を額安寺境内に移動・再建した。このことにより、盜難等に関する防犯上の安全性は格段に向上したといえる。また、宝篋印塔が立っていた明星池中島は、版築構造などを持たない脆弱な人造島であり、かつ塔の下部にも基礎工事は全くなされていなかった。ここに宝篋印塔を戻すことは、不等沈下等による塔の倒壊を招く恐れが強く、また中島が不安定な地盤である以上、当然地震の影響もより強く受けることになる。

一方、本書第1章で触れたように、奈良県教育委員会の意見は、額安寺宝篋印塔を中島から移動した場合、国指定重要文化財への指定は不可能というものであった。以下、今回の調査結果に基づき、この意見についての検討を試みてみよう。

近世の額安寺周辺を描いた絵図は数枚知られているが<sup>1</sup>、その中でも年号が記入されているものに、寛永11年（1634）の絵図がある（第V章4項図2）。そこにはすでに「明星池」とその中島が描かれており、島の上には「明星石」と称する石塔が描かれている。これは額安寺宝篋印塔を指すものと思われるが、少なくとも中島はこの時期には存在し、宝篋印塔はその上に立てられていた。また、明星池の南側には「虚空藏六角堂」と称する仏堂が描かれている。虚空藏菩薩の別名は「明星天子」なので、近世にはこの辺りは明星池と宝篋印塔<sup>2</sup>（明星石）、虚空藏六角堂がセットとなって、虚空藏菩薩信仰の場として認識されていた可能性が高い<sup>3</sup>。

また、現在の額安寺本堂は慶長11年（1609）に再建されたもので、本尊は十一面觀音である。上述の寛永絵図には本堂前に一基の石灯籠が描かれているが、これは現存しており、竿に「觀音堂」と刻まれている。のことから、近世の額安寺では、本堂周辺は觀音信仰の場として機能した可能性が高い。先に述べた明星池周辺がこの本堂と同時期に整備され、そしてそれと対になるように虚空藏信仰の場として機能した可能性は指摘し得るであろう。この時期観は、発掘成果とも矛盾するものではない。

その後、江戸時代後期になって、侵食などによって損傷した島の補修が行われたものと思われ、その際に宝篋印塔も組み直されたようである。これがいつ倒壊したのかは明確ではないが、明治16年（1883）に描かれた境内図には宝篋印塔が描かれているので、倒壊は少なくともこれ以降のこととなる。

いずれにせよここで確認される重要な事実は、額安寺宝篋印塔はその当初においては、明星池中島以外の場に造立されていたという点である。すなわち、宝篋印塔の原位置はここではなかった。したがって平成16年度における、奈良県教育委員会の宝篋印塔移動に関する意見は、今回の発掘調査成果に基づく学術的観点からいえば、ほぼ意味を失ったものと評価される。

額安寺においては、慶長2年（1597）の豊臣秀吉による寺領安堵を契機に、本堂の復興などが行われたが<sup>4</sup>、中島の築造も含む明星池の整備についてもその一環として行われ、上述のように本堂は觀音信仰の場として機能し、一方、明星池中島は虚空藏信仰の場としての性格が与えられた。額安寺宝篋印塔は、後者のシンボル的存在（明星天子影向所）として、中島の築造と同時に周辺<sup>5</sup>から中島に移築されたのではないかだろうか。

### 2. 額安寺宝篋印塔の重要性について

現在、作者の名前が銘文などから判明し、明確に大藏派石工の作品であること判断できるものは、全国に10例存在する（表1）。このうち、宝篋印塔は6例である。このほか、様式的に大藏派の作品とほぼ認定できるものには正暦寺宝篋印塔（奈良市）、円光寺宝篋印塔（神奈川県厚木市）、大見寺宝篋印塔（神奈川県小田原市）があるが、これらを加えて大藏派の作品は全国で13例し

表1 全国在銘大藏派石造物一覧

名称	所在地	建立年	石工名	高さ(㎝)	施主の区分	指定年	備考
額安寺宝篋印塔	奈良県大和郡山市鶴田町寺町	文永元(1260)	大藏安清	284	市指定	1976	1974年発見
元蔵鏡宝篋印塔	神奈川県足柄下郡箱根町	永仁4(1296)	大藏安兵	265 (複数接頭)	国指定	1961	1995.8年解体修理
余見宝篋印塔	神奈川県足柄上郡大井町	嘉永3(1804)	大倉口○	152	市指定	1972	
安南斎宝篋印塔	神奈川県鎌倉市大船	建治3(1308)	心阿	247 (複数接頭)	国指定	1933	1980年解体修理
愛媛寺宝篋印塔(開山塔)	神奈川県鎌倉市二階堂	正保元(1332)	光弘	427	国指定	1934	1985年解体修理
覚園寺宝篋印塔(大悲塔)	神奈川県鎌倉市二階堂	正保元(1332)	光弘	411	国指定	1934	1965年解体修理
光明坊墨塔	広島県尾道市御薗戸町	永仁2(1294)	心阿	814	国指定	1927	1968年解体修理
宗光寺墨塔	広島県三原市本町	年久	心阿	250 (複数接頭)	市指定	1986	2001年解体修理
長谷寺宝篋印塔(塔基)附板	神奈川県鎌倉市大谷	建治3(1308)	秋田	266	市指定	1971	旧重要美術品
寶嚴寺不動石仏	兵庫県朝来郡朝来町	永仁4(1296)	心阿	896	県指定	1966	1956年発見

か存在しないということになる（岡本2003）。

額安寺宝篋印塔は、これら大藏派石工制作の石造物の中でも最古の作例であり、その作者である大藏安清は大藏姓を有する石工では始祖的な存在となる。また、残存率の面から見ても、額安寺宝篋印塔は、相輪まで全ての当初部材が完存している。大藏派宝篋印塔で制作当時のパーツが全て揃っている例としては、本塔と、覚園寺宝篋印塔2基（鎌倉市）を数えるのみである。

在銘の大藏派宝篋印塔（板碑は除く）で、国の重要文化財指定を受けていないのは額安寺宝篋印塔と余見宝篋印塔のみであるが（表1）、後者は小型で、作者の名前も判然としないものなので<sup>10</sup>、他の在銘大藏派宝篋印塔と同列に比較することはできない。なお、大藏派石工のうち「心阿」は宝篋印塔以外に層塔などの制作も行ったことが銘文から判明するが、その代表例である光明坊墨塔（広島県尾道市）は、重要文化財の指定を受けている<sup>11</sup>。

次に、比較の対象を鎌倉時代の宝篋印塔全体にまで括げてみた場合<sup>12</sup>、額安寺宝篋印塔は、在銘の宝篋印塔としては奥山往生院宝篋印塔（国指定重要文化財・奈良県生駒市）に次いで全国で二番目の古さとなり、制作した石工や願主の名前が判明する宝篋印塔としては、全国で最古になる<sup>13</sup>。

以上のように、額安寺宝篋印塔は銘文から制作年代や石工の名前が判明し、かつ、制作にあたった石工は、伊派と並んで我が国を代表する大藏派石工の始祖となる人物であった。また、本塔は相輪まで完存しており、その残りの良さも他に卓越する。このほか、本書では詳述していないが、額安寺宝篋印塔造立に際して忍性の関与があったことは複数の史料からほぼ確実であり（山川2008）、その造立に関する歴史的背景にも奥深いものがある。

以上のポジティブな要素に加え、今回、現在の日本の石工を代表する西村金造・大造両氏によって額安寺宝篋印塔の修理が行われ、本塔はその本来の美しさを取り戻した。これらの諸点を勘案すれば、額安寺宝篋印塔の重要文化財指定は必然であり、それはすぐれた文化財をより良い条件で後世に伝える上でわれわれに課せられた義務といっても過言ではない。

（文責：山川 均）

<sup>1</sup> 本書第V章4項参照。

<sup>2</sup> 別の近世絵図に、この明星天子影向所と記したものがある（本書第V章4項参照）。

<sup>3</sup> 本書第V章4項参照。

<sup>4</sup> 火袋を欠いた状態で、本堂の西側に置かれている。

<sup>5</sup> 本書第II章2項で触れたように、額安寺宝篋印塔は昭和48年に再建されるまでは池中に倒壊した状態であった。

<sup>6</sup> 本書第V章4項参照。

<sup>7</sup> 1974年に執筆された川勝政太郎の論文中（川勝1974）には「池前に住まれる顛田家の老婦人が嫁して来られた數十年前にはすでに倒れていた由」との記述がある。

<sup>8</sup> 本書第V章4項参照。

<sup>9</sup> 宝篋印塔の旧所在地については、今後発掘調査などで基礎構造が発見され、確定する可能性もあるが、現時点では不明である。ここでは、額安寺寺境内内外などと、渡瀬と推定しておきたい。

<sup>10</sup> 2008年、松井一氏によつて余見宝篋印塔銘文が読み下された。それによれば、本塔の作者は「大倉延安」となる（松井2008）。

<sup>11</sup> いま一つの事例である宗光寺墨塔（三原市指定文化財）は在銘であるが、造立年が刻まれていない。

<sup>12</sup> 川勝政太郎「日本石造美術辞典」（東京堂出版）「分類目次」参照。ただし、本書で取り上げられている「鎌倉やぐら出土宝篋印塔」については、型式的にかなりイレギュラーな遺物であり、廣作の可能性を有するので、ここでは検討対象から除外する。

<sup>13</sup> 旧妙真寺宝篋印塔と高山寺宝篋印塔（いずれも京都市）は、銘文はないが、様式や文献から額安寺宝篋印塔に先行すると考えられるものである（山川2008）。

## 参考・引用文献一覧

- 伊藤宏見1977「順行上人惠静の研究（上）」『密教文化』117
- 伊庭 功2006「觀音寺城跡に残る採石場（推定）と石垣の矢穴度」『滋賀県安土城郭調査研究所 研究紀要』12
- 上原真人2001「額田寺出土瓦の再検討」『國立歴史民俗博物館研究報告』第88集
- 内田好昭2008「5.まとめ（2）石垣7・溝8の石工技術」『史跡慈照寺（銀閣寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査報告 2007-16
- 追塙千尋1995『中世の南都仏教』吉川弘文館
- 王寺町教育委員会・権原考古学研究所2005『速應寺発掘調査報告書』
- 大江聰子2008「鎌倉時代における律宗とその受容層について」『戒律文化』第6号
- 大森順雄1991「覺圓寺と鎌倉律宗の研究」有隣堂
- 岡本智子2003「大藏派宝鏡印塔の研究」『戒律文化』第2号
- 岡本智子2005「日本における石造宝鏡印塔の成立過程とその意義」『日引』6
- 岡本智子2006「初期宝鏡印塔と律宗」『戒律文化』第4号
- 奥田 尚2002『石の考古学』学生社
- 尾崎正紀・寒川旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作 2000 「奈良地域の地質」地質調査所, 162p
- 落合義明2005「境界の宿としての宿根」「中世東国の「都市的な場」と武士」（山川歴史モノグラフ7）山川出版社
- 落合義明2007「中世鎌倉名越の律宗寺院—実央寺を中心として—」『戒律文化』第5号
- 覺圓寺1966『重要文化財覺圓寺開山塔・大燈塔修理工事報告書』
- 鎌倉国宝館2005『特別展覺圓寺—開山智海心慧七百年忌記念—』（展示図録）
- 川勝政太郎1957『日本石材工芸史』絵葉社
- 川勝政太郎1960「関東形式宝鏡印塔の成立」『鎌倉』4号
- 川勝政太郎1966『石の奈良』東京中日新聞出版局
- 川勝政太郎1974「大藏派石大工と関係遺品」『史述と美術』449号
- 川勝政太郎1978『日本石造美術辞典』東京堂出版
- 川越俊一1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』
- 岸 熊吉1935「三井麻塚および額田部窯址調査報告書」
- 北原 治2008「矢穴考—鎌倉式城技法の提唱について—」『滋賀県文化財保護協会 紀要』21
- 栗木 崇2007「中世南関東の矢穴技法について」中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル、人、技術—中間報告会発表資料
- 栗木 崇2009a「中世石造物に見る矢穴痕について」『中世における石材加工技術—安山岩製石造物の加工と分布』國立歴史民俗博物館
- 栗木 崇2009b「江戸の石をきる—伊豆石丁場—」『歴博』No.155
- 國立歴史民俗博物館2001『國立歴史民俗博物館研究報告』第88集
- 斎藤彦司2001「石塔における相模型反花座の成立」『鎌倉』92
- 佐川正敏1992『法隆寺の至寶 瓦』昭和資財報15 小学館
- 佐藤亜聖1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI
- 佐藤亜聖2007 a 「中国宝鏡印塔の編年について」「中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝鏡印塔を中心に」シルクロード学研究27
- 佐藤亜聖2007 b 「中世的石塔の成立と定義」「墓と葬送の中世」高志書院
- 佐藤亜聖2009「中世石造物の普及をさえた技術」『歴博』No.155
- 清水俊明1974「大和額安寺の宝鏡印塔」『史述と美術』446
- 清水俊明1984『奈良県史』第7巻 名著出版
- 田岡香造1960「早期宝鏡印塔考」『史述と美術』405
- 館 邦典2009「V. 資料紹介 1. 矢穴痕にみる土野城の変遷過程」『伊賀市文化財年報5』伊賀市教育委員会
- 田村吉永ほか1966「古代の寺院」「大和郡山市史」

- 中日石造物研究会編2008『東大寺石獅子をめぐる研究集会』
- 土井 実1985『奈良県史』第16巻 名著出版
- 奈良県教育委員会1983『重要文化財奈安寺五輪塔修理工事報告書』
- 中野雄二2000『波佐見』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 中村博司2003『花崗岩石割り技術の誕生とその展開』『歴史遺産としての石垣構築物の土木史的研究』
- 難波洋三1989『市坂の土器作り』『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』京都大学埋蔵文化財センター
- 西岡芳晴・尾崎正紀・寒川 旭・山元孝広・宮地良典 2001『桜井地域の地質』 地質調査所, 141p.
- 西川杏太郎1977『聖徳太子立像(孝養太子像)』『大和古寺大観』第3巻(元興寺極楽坊・元興寺・大安寺・般若寺・十輪院) 岩波書店
- 貫 達人1981『鍾倉の板碑』(鍾倉国宝館図録第24集)
- 箱根町教育委員会1993『元箱根石仏・石塔群の調査(箱根町文化財研究紀要第25号)』
- 橋本久和2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 濱田謙次・三木治子1990『新資料六例』『歴史考古学』27号
- 藤川祐作1972『武津大坂城(6)一芦屋山中の採石場』『城と陣屋』65
- 藤川祐作1979『採石場からみた岩ヶ平』『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作1997『千刈採石場』『市史研究紀要たからづか』13 宝塚市教育委員会
- 藤川祐作1998『年表一石工・石造遺物・矢穴一』『川瀬の糞』5
- 古川久雄2001『「誠心院型」宝鏡印塔と中世京都石工の動向』『実証の地域史』村川行弘先生頌寿記念会
- 古川久雄2007『大和の宝鏡印塔と石工』『シンポジウム「石造物が語る中世職能集団」を読む』資料集
- 歴文化財建造物保存技術協会1980『重要文化財安養院宝鏡印塔保存修理工事報告書』
- 樋口涼一1999『感身学正記』東洋文庫664 平凡社
- 堀口健式2005『倭城の石垣・採石遺構とその技術を中心の一』『国際シンポジウム韓国倭城と大坂城—西国大名は倭城築造から何を学んだか』 実行委員会
- 前田実知雄1979『奈安寺旧境内発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1978年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 前田実知雄ほか2001『考古資料編』『國立歴史民俗博物館研究報告』第88集國立歴史民俗博物館
- 前田元重1989『箱根宝鏡印塔と大工前大和権守大藏氏』『金津文庫研究紀要』9・10
- 前田元重1991『東国の大収蔵と文化遺産』『佛教藝術』199号
- 松井一明2009『東海の中世墓』『日本の中世墓』高志書院
- 馬瀬和雄2005『職人・宗教・都市』『五味文彦編「交流・物流・越境(中世都市研究11)』新人物往来社
- 三木治子1986『特殊様式の宝鏡印塔について』『歴史考古学』16
- 水野草二2001『中世の賴安寺と周辺地域』『國立歴史民俗博物館研究報告』第88集
- 南村俊一1975『石造物 郡山城址用材調査概要』郡山城史跡・柳沢文庫保存会
- 宮地良典・田舎庄良昭・吉川敏之・寒川旭 1998『大坂東南部地域の地質』 地質調査所 113p.
- 村川行弘1970『大坂城の謎』 学生社
- 室生村教育委員会1980『向坊古墳』
- 桃崎祐輔1996『鎌倉時代蓮華唐草文軒平瓦の系譜と年代 - 南都諸大寺と三村山清冷院極楽寺を結ぶ瓦の意匠 - 』『考古学雑誌・西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会
- 桃崎裕輔2000『忍性の東国布教と叡縛諸大弟子の活動』『叡尊・忍性と律宗系集団』シンポジウム「叡尊・忍性と律宗系集団」実行委員会
- 森岡秀人1978『新中国・遺跡文物の旅』『武陽史学』16
- 森岡秀人2008『築城石・石切場と切石規格化をめぐる一試考』『橿原考古学研究所論集』第15
- 森岡秀人編1980『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・羽田育子2009『丁場類型によりみたる花崗石の石切場』『間壁蔵子先生喜寿記念論文集兵庫発信の考古学』
- 森岡秀人・坂田典彦2005 a『石切技術をめぐる用語について』『岩ヶ平石切丁場跡』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦2005 b『矢穴・矢穴痕の多様性と機能的位置づけ』『岩ヶ平石切丁場跡』 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人・藤川祐作2008 a『慈照寺（銀閣寺）旧境内発掘調査検出石垣遺構にみられる古相の矢穴および矢穴列痕に関する鑑別所見』
- 森岡秀人・藤川祐作2008 b「矢穴の型式学」『古代学研究』180
- 毛利光俊彦ほか1992「瓦の変遷」『法隆寺の至寶 瓦』昭和賞財帳15 小学館
- 保井芳太郎1985『大和上代寺院志』第一書房
- 山川 均2006『石造物が語る中世職能集団』日本史リブレット29 山川出版社
- 山川 均2007「宋人石工の源流とその末裔」大阪歴史学会考古部会・中世史部会合同研究会発表資料
- 山川 均2008『中世石造物の研究』日本史史料研究会
- 山川 均2009「頬安寺宝鏡印塔』『月刊石材』340
- 大和郡山市教育委員会1995『頬田寺開達文化財報告』頬田寺旧境内表採軒瓦調査報告書』大和郡山市文化財調査概報34
- 大和郡山市教育委員会2003『頬安寺第8次発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 大和郡山市教育委員会2006『筒井城第7次発掘調査報告書』大和郡山市文化財調査報告書第10集
- 山峰信二2000『中世瓦の研究』奈良國立文化財研究所
- 吉井敬幸1997「正暦寺と修驗道」「正暦寺—千年の歴史」正暦寺
- 吉田栄治郎2001「頬安寺境内景觀の変遷について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集
- 米山徳馬1966「文化的遺物」『大和郡山市史』
- Ishihara, S. 1977 「The magnetite-series and ilmenite-series granitic rocks」『Mining Geol.』27,293-305.



## あとがき

額安寺先代ご住職の喜多寿佳師は、同寺の復興を、夫であった喜多亮快師より引継ぎ、本堂の復興など、その職責を見事に全うされた。しかし寿佳師は、門前の明星池中島にある額安寺宝鏡印塔が倒壊の危機にあることや、傷みが激しいことも非常に気にされており、境内の復興が一段落した後、宝鏡印塔の修理が師の最後の望みでもあった。

しかしながら、額安寺宝鏡印塔の修理や移築は、本書Ⅰ章で記述したように、必ずしも平坦な道のりで実現したのではない。そこには様々な問題が横たわっていたのである。師はそれらの問題をひとつひとつ辛抱強く乗り越えられ、ついにこの宝鏡印塔修理の偉業を成し遂げられた。

残念ながら、師は宝鏡印塔の竣工を見ることなく、平成20年11月24日に享年97歳で逝去されたが、修理を担当された西村金造氏はその遺志を汲み、師の舍利を、亮快師の舍利と共に宝鏡印塔の塔身に収められた。だから額安寺を復興された喜多亮快・寿佳両師のご遺志は、この宝鏡印塔と共に在り続けるといつても過言ではなく、また、本塔はその象徴として再生した姿といい換えることもできる。

謹んで師の靈前に、本書を捧げる。

平成23年3月吉日 山川 均



喜多寿佳師

## 執筆者紹介（五十音順・敬称略・所属は当時）

- 大江綾子 1984年生 奈良女子大学大学院 博士前期課程  
岡本智子 1979年生 同志社大学歴史資料館 調査員  
狭川真一 1959年生 傅元興寺文化財研究所 研究部長（主幹研究員）  
先山 徹 1954年生 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員  
佐藤亜聖 1972年生 傅元興寺文化財研究所 主任研究員  
杉田規久男 1967年生 傅安慶 代表取締役  
西村大造 1964年生 傅西村石灯呂店 代表取締役  
藤川祐作 1944年生 神戸深江生活文化史料館 研究員  
森岡秀人 1952年生 芦屋市教育委員会 文化財担当主査  
山川 均 1961年生 大和郡市教育委員会 主任

大和郡山市文化財調査報告書18集  
額安寺宝篋印塔修理報告書

平成23年3月31日

編集・発行 大和郡市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4  
印 刷 共同精版印刷株式会社  
奈良市三条大路2丁目2-6